

第Ⅱ部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

東京大学駒場構内遺跡

大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点

発掘調査報告

1998

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は東京大大学院数理科学研究科Ⅱ期棟の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地は東京都目黒区駒場3丁目8番地1号、東京大学駒場Ⅰキャンパス内に所在している。
3. 本遺跡は東京都教育委員会『東京都遺跡地図』（平成8年）では範囲不明の縄文中期・晩期の埋蔵文化財包蔵地－東大遺跡（目黒区No.1）－として登録をされている。本地点の内容は遺跡の範囲、年代などが登録されている東大遺跡と違いが認められるため、目黒区教育委員会と埋蔵文化財調査室との協議を行い、東大遺跡を包括する遺跡名として「東京大学駒場構内遺跡」を使用することで合意した。
4. 調査面積は1160㎡である。
5. 調査期間は以下のとおりである。

確認調査	1993年5月8日～15日
試掘調査	1996年11月11日～12日
事前調査	1996年12月12日～1997年2月6日
整理作業	1997年2月15日～11月17日
報告書編集	1997年11月18日～1998年3月31日
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は堀内秀樹である。
7. 調査区は、その内包した範囲を8×8mグリッドで区画し、東北点を基点とし、北から南に数字、東から西にアルファベットを附した。なお、南北軸は真北より17°20′00″東に振れている。
8. 土層断面などで使用した標高は、目黒区公共基準点駒場三丁目8番1号先地点（36.780m－T.P）から算出した。
9. 本報告の編集は堀内秀樹の指導で佐藤律子が行った。
10. 縄文土器については東京大学考古学研究室大塚達朗氏にご教示いただいた。

11. 草野尚詩氏には炉穴に関する考察をいただいた。

12. 実測、図版の作成は佐藤律子、武藤康弘が行った。執筆分担は以下の通りである。なお文責は担当した文末に記載した。

I, II, III	堀内秀樹	VII-1	佐藤律子
IV, V,	佐藤律子	- 2	草野尚詩
VI-1	佐藤律子	- 3	堀内秀樹
- 2	堀内秀樹	VIII	堀内秀樹

13. 出土遺物は埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱキャンパス内で運用・保存・管理している。

14. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)

今村啓爾，及川 登，大塚達朗，大野尚子，小川望，小林謙一，鈴木啓志，草野尚詩，
武田浩司，長佐古真也，藤沢良裕，桃井 勝，両角まり

東京大学大学院数理学研究科，東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室，東京大学施設部，ノリタケカンパニーリミテド，目黒区教育委員会，フロム建設株式会社，加藤重機建設株式会社

15. 発掘調査・整理作業参加者

佐藤律子（東京大学埋蔵文化財調査室），山田 哲・国武貞克（東京大学大学院），寿盛友則・横田龍一・伊藤和人・大泉恵裕・大岸 裕・草野尚詩・久保虎一・高木 明・高木尚子・戸賀崎珠穂・戸賀崎智乃・西畑 太・深津征治・藤井茂男・松田泰典・三浦 篤・安田 敬・柳 絢子・山極 輝（加藤重機建設株式会社）

凡 例

1. 遺構の略号は以下に示す。
SD：溝 SF：炉穴 SI：住居跡 SK：土坑 SP：ピット ST：墓壙
SX：性格不明の落込み
2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。
3. 遺物番号は、本文、挿図、観察表で共通の番号を使用し、写真番号は観察表に記した。
4. 炉穴の主軸方向は足場と炉部を結んだ直線の炉部の方向で、真北から時計回りに振った角度で表した。
5. 炉穴内で、火を焚いた場所と考えられる焼土堆積部分を燃焼部、燃焼部を配する側の掘り込みを炉部、炉部の反対側で火を焚いている時の人の作業場と考えられる部分を足場とした。
6. 炉穴の新旧関係は「旧炉穴→新炉穴」と表す。
7. 炉穴実測図のスクリーントーンは焼土範囲を表す。
8. 遺物実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
 - ・◀は高台、見込みなどの軸際を表している。
 - ・┆┆┆は口唇の口銹
 - ・中心線上下の破線は推定口径を表す。
 - ・――は断面を表す。
 - ・播鉢の┆→┆は体部播目の範囲を表す。
 - ・口唇部の┆←┆は敲打痕を表す。
9. 本文中に使用した参考・引用文献は、Ⅶは文末に、他は一括して末尾に記載した。
10. 本書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の地形図『首都圏1:10,000地形図』である。

東京大学駒場構内遺跡
大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点
発掘調査報告 目次

例	言	141
凡	例	143
I	調査の概要	
1	調査に至る経緯	145
2	調査の方法と経過	146
II	遺跡の位置と環境	147
III	基本層序	152
IV	先土器時代	153
V	縄文時代	158
VI	歴史時代	
1	平安時代	185
2	近世・近現代	187
VII	考察	
1	東京大学駒場構内数理学研究科Ⅱ期棟地点の炉穴について	佐藤 律子…197
2	炉穴をめぐる覚え書き — 火・穴・場所 —	草野 尚詩…203
3	「統制番号」のついた陶磁器について	堀内 秀樹…211
	参考文献	215
	写真図版	219
	報告書抄録	

I 調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成5年度に東京大学施設部建築課より同埋蔵文化財調査室に大学院数理学研究科校舎新築に伴う、埋蔵文化財の有無の照会があった。建設予定地区は、教養学部構内東端にある池より南に開析される谷と東西に流れる目黒川支流に挟まれた台地上に立地している。東京都遺跡地図によると東大遺跡として遺跡範囲が不確定ながらも縄文時代中期、晩期の周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されており、当該地区においても埋蔵文化財の有無を事前に確認する必要がある。埋蔵文化財調査室では平成5年5月に確認調査を実施した。

確認調査

平成5年5月8～15日、確認調査を行った。建築予定地点にはテニスコートおよび木造の官舎が数棟と生活道路が存在していた。このため建築計画を考慮に入れ、官舎を避け、2×23m、2×29m、2×29m、2×97mの試掘坑を設定し、調査を実施した。調査はローム層上面において縄文時代以降の確認調査を行ったのち、一部ローム層を掘り下げ、先土器時代の確認調査を行った。この結果、縄文時代早期と推定される炉穴1基、および土坑と思われる落ち込み1基が確認された。以上の結果より、北東部を中心に縄文時代の遺跡が遺存している旨の回答を行った。

事前協議

数理学研究科の計画では、西側（Ⅰ期棟）と東側（Ⅱ期棟）とに分け、遺跡の確認されていない西側部分から建築を行ない、遺跡が確認された東側部分は建築の際に再度協議を行うこととした。第Ⅰ期棟建築後の平成8年度になり、Ⅱ期棟の建築計画に伴ない発掘調査との調整を目黒区教育委員会、施設部建築課、埋蔵文化財調査室との間で行った。その協議では、試掘で遺構が確認された地点が建築予定地区北西隅に偏在すること、東端は昭和58年2月に目黒区教育委員会で確認調査を行った結果、埋蔵文化財が認められない区域であることなどにより、予定地内全面調査の必要性に関する議論が出されたが、再度、分布範囲確認のための調査を行うこととなった。調査は平成8年11月11・12の両日に、2×20m、2×23m、2×24mの試掘坑を設定し、行った。この結果、平成5年度に行った確認調査では検出されなかった南側より、新たに縄文時代炉穴2基、陥穴1基、ピット10基が確認された。以上の経緯より目黒区教育委員会で試掘調査した位置より西側部分について発掘調査を行うことが確認された。また、その後の協議の中でⅡ期棟建築が平成8年度事業の中で予定されており、それ以前に発掘調査を終了することがあわせて確認された。

(堀内 秀樹)

2. 調査の方法と経過

調査の方法

前述のように建設対象区域の西端を除く全域および建築の際掘削される可能性のあるⅠ期棟との間を含めた1,160mを考古学的調査の対象とした。調査は建築予定地区を含めた範囲についてグリッド法を用い、記録を行った。グリッドは8×8mで区画し、その北東隅を基準点として名称を東から西へアルファベット、北から南へ数字を若い順に付与した。

調査の経過

発掘調査は埋蔵文化財調査室総括的指導のもとで行われることとなり、現地調査は調査室員堀内秀樹が担当することとなった。平成8年12月12日より重機による表土掘削作業から開始された。作業は南側から、遺構の確認できるローム漸移層上面までの掘削を行った。表土は北西端で約40cm程度であったが、東南方向に傾斜を持っていたため、実際は想定した盛土の厚さを超えるものとなった。このため表土掘削作業は最終的には12月20日に終了した。これと並行して遺構確認が行われ、表土掘削が終了した段階で遺跡の南側を中心に縄文時代炉穴と推定される落ち込み10数群、土坑数基、ピット10数基、近世～近代の溝2基、土坑2基が確認され、当初の予想をはるかに超えた密な遺構の分布が確認された。遺構の遺存状況は官舎が建っていた北西部の一部を除き、きわめて良好であった。12月24日からは近世～近代の遺構の調査に入り、年内に終了した。年明けから縄文時代の調査を開始、好天にも恵まれ順調に調査は進化した。1月24日には縄文時代の遺構の調査も一部を除いて終了し、調査区の遺構全体写真の撮影を行った。1月27日より先土器時代の試掘坑を規格的に10ヶ所設定し、武蔵野台地基本層序Ⅴ層までの調査を行った。調査終了予定前日の1月30日調査区の東北側Ⅳ層上部からフレイクおよび焼礫が検出された。周囲を拡張し、調査を行ったが、事前の協議の中で調査範囲からはずれた区域まで礫群が分布していることが判明した。急遽、施設部建築課との協議を持ち、東壁から6×6mの範囲の拡張および期間を延長し、調査を継続した。遺物はⅣ層下層ではほぼ収束し、2月7日埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

(堀内 秀樹)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

本遺跡は、東京都目黒区駒場3丁目8番地1号に所在する。調査対象になったのは東京大学駒場第Ⅰキャンパス（以下「駒場Ⅰ」と略す）の東南端、京王帝都電鉄井の頭線、駒場東大前駅正面にある正門より、東の炊事門方面に約300m向かった場所に位置している。当該地付近の地形は関東ローム層の下に武蔵野砂礫層、東京層、三浦層群からなり、現在の地形は立川ローム層、武蔵野ローム層の堆積期に地形を形成している。遺跡は武蔵野台地東端、目黒川と神田川に挟まれた淀橋台上にあり、駒場Ⅰ東側にある池より南に開析される谷と西郷山下付近で目黒川に合流する支流に挟まれた台地上、現表面で標高約37m（東京湾平均海面）に立地している。この東、南を流れる目黒川の支流は、それぞれ駒場Ⅰ内に湧水点を持つ。遺跡内の微地形は西側中央部を頂部として舌状に北、東、南に緩く傾斜を有する台地緩斜面である。

本遺跡は駒場3丁目、東京大学教養学部内に存在する東大遺跡として縄文時代中、晩期の埋蔵文化財包蔵地として周知されている。今回発掘調査で確認された遺構、遺物は先土器時代、縄文時代早期、平安時代、江戸～近代の各時期のものが、また、平成5年8月～10月に発掘調査を行った教養学部情報教育棟地点（仮称）の調査では縄文時代草創、早、中、後期の遺構、遺物が出土しており（武藤1997）、範囲は未確定なもの広がりをもつ一つの遺跡群として東京大学駒場構内遺跡の中に位置づけることとした。

周辺の遺跡（図1、表1、2）

本遺跡周辺では渋谷川、目黒川流域には先土器時代から歴史時代に至る多くの遺跡が確認され、古くより人間が活動した足跡が残されている。

先土器時代では同じ台地上の目黒川北岸に位置する大橋遺跡(9)がある。立川ロームⅢ層～Ⅸ層にかけて文化層が確認され、ナイフ形石器、角錐状石器、礫群等が出土している。ここより対岸にあたる東山遺跡(8)では礫群が確認されており、下流の中目黒遺跡では立川ロームⅣ層より礫群8ヶ所およびナイフ形石器、角錐状石器、削器などが、鉢山町遺跡(89)からは立川ロームⅢ層～Ⅵ層からナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、搔器などが、茶屋坂遺跡からはⅣ層から礫群、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡の分布は中期を中心にやや密である。本遺跡周辺では大橋遺跡は早期撚糸文期の住居址、貝殻条痕文期の炉穴、特に中期加曽利E期には住居址、集石、土坑などが多数出土し、縄文中期の集落が経営されていたことが確認されている。対岸の東山遺跡は中期加曽利E期の住居址、後期堀之内期の住居址、集石、安行Ⅰ～Ⅱ期の住居址、晩期安行Ⅲc期の住居址、土坑墓などが確認されている。その他、前述の付近で唯一の草創期の土器が東京大学駒場構内遺跡教養学部情報教育棟地点（仮称）で出土している。早・前期は鉢山町遺跡から撚糸文期の住居址、中目黒遺跡から撚糸文系の土器が出土し、東大駒場情報教育棟地点から集石が確認されている。また、中目黒遺跡、鉢山町遺跡、渋谷区猿楽町17遺跡(89)では撚糸文期の住居址が確認されてい

る。中期は目黒川流域に広く分布しており、駒場遺跡(2)、氷川遺跡(3)、大坂下遺跡(6)、旧練兵場遺跡(7)、日向遺跡(5)、大橋遺跡、東山遺跡、騎兵山遺跡(32)、多聞山遺跡(24)などがあげられる。

弥生時代には鉢山町遺跡から環濠、東山遺跡からは後期の住居址、また、やや下流の新富士遺跡からは中期の住居址が確認されている。

古墳時代では恵比寿遺跡より古墳時代前期の住居址が確認されている。

平安時代以降では円融寺南遺跡から中世の溝、建物址、井戸などが、また江戸時代では新富士遺跡から富士講関連遺構が、北青山遺跡(90)では淀藩稲葉家下屋敷跡が確認されている。

明治以降の東京大学駒場構内遺跡の変遷

近代以降は明治7(1874)年4月に農学部の前身である内務省農事修学場が現在の日本近代文学館のある場所に建設され、駒場Ⅰはその農場として使用されていた。明治10(1877)年農学校、明治15(1882)年駒場農学校、明治19(1886)年東京農林学校と改称され、明治23(1890)年帝国大学農科大学として帝国大学に編入されている。この間農科大学の中心は現在の駒場Ⅰの方に移動しており、以前の校舎があった場所と現在の駒場第Ⅱキャンパス(以下「駒場Ⅱ」と略す)はその農場として使用されている。関東大震災後の大正15(1926)年には本郷の元富士町にあった前田侯爵邸と土地交換をしている。これによって農場として使用していた現在の日本近代文学館の場所が前田侯爵邸として使用され、農学部(大正8年、帝国大学農科大学を東京帝国大学農学部と改称)の敷地は前田邸を挟んで東西に二分されることになった。西側は航空研究所から昭和21(1946)年理工学研究所、昭和33(1958)年航空研究所、昭和39(1964)年宇宙航空研究所、昭和62(1987)年先端科学技術研究センターを経て現在では駒場Ⅱとして先端科学技術研究センター、生産技術研究所などが利用する地域として計画されている。東側は昭和10(1935)年農学部と敷地交換した第一高等学校が入り、昭和24(1949)年5月、第一高等学校、東京高等学校を包摂して新制東京大学教養学部になり、現在に至っている。

本遺跡は明治13(1880)年に測量された「東京府武蔵国南豊島郡代々木村荏原郡上目黒村近辺」2万分の1の地図をみると、遺跡にあたる場所は「畑」として記載されている。以降の変遷から考慮すると明治7年に設立された農学校に附属する農地の隣接地であったと思われる。また、農学校が帝国大学に編入された明治23年以降は、第一高等学校時代を含めて昭和24(1949)年までは引きつづき民間地であったことがわかる。教養学部となって後には官舎が建てられ、本調査の契機となった数理学研究棟新築によって取り壊されるまで、職員の居宅として機能していた。

(堀内 秀樹)

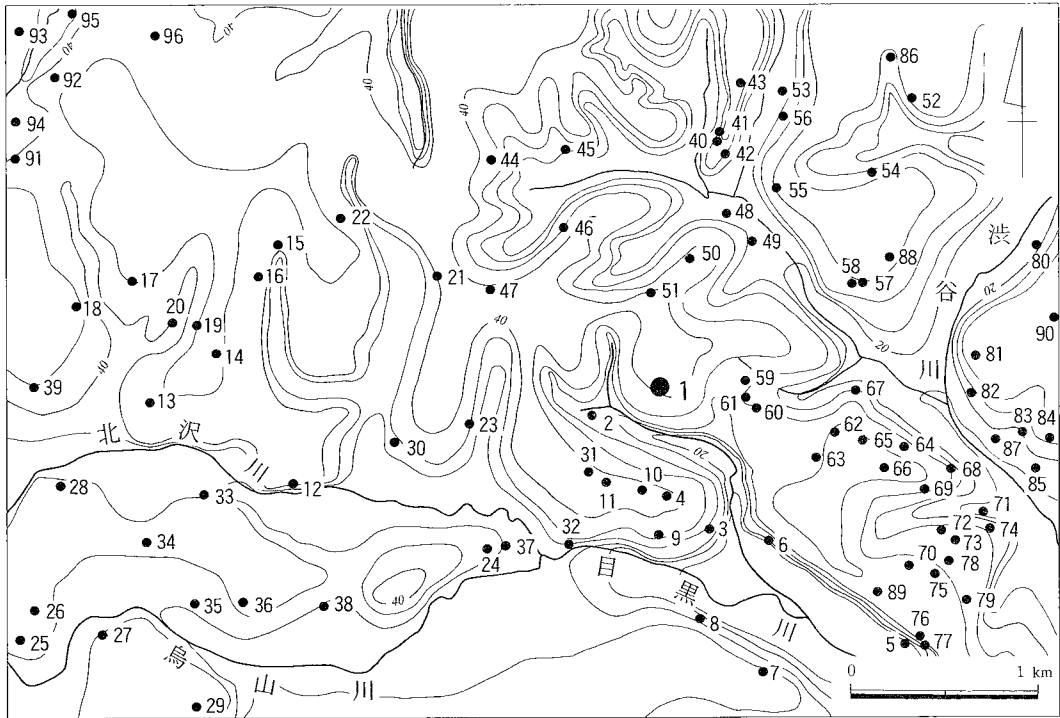


図1 周辺遺跡分布図

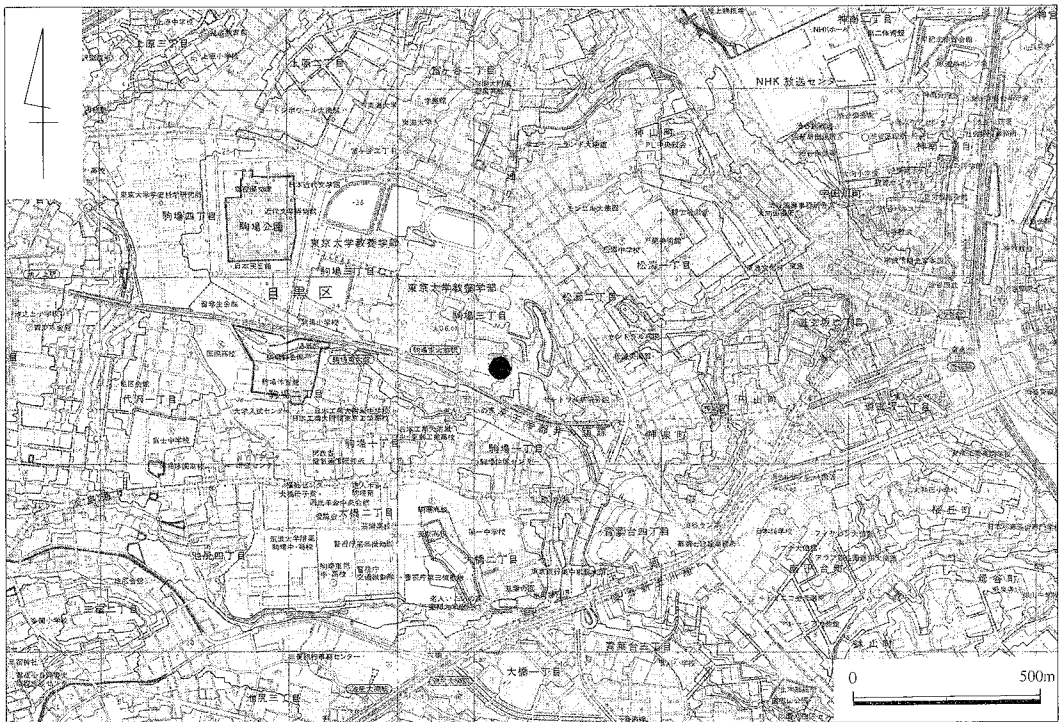


図2 遺跡の位置

表1 周辺の遺跡(1)

番号	遺跡名	所在地	時代	概要
1	東京大学駒場構内遺跡	目黒区駒場三丁目東京大学教養学部内	縄文早・中・晩	台地縁辺 包蔵地 縄文)炉穴
2	駒場	目黒区駒場三丁目	ブレ・縄文早・中・後	台地縁辺・斜面・低地 包蔵地
3	氷川	目黒区大橋二丁目氷川神社	縄文中	台地斜面 包蔵地
4	駒場高校	目黒区大橋二丁目都立駒場高校内土器塚	ブレ・縄文早・中・後	台地縁辺 包蔵地
5	日向	目黒区青葉台一丁目	縄文中	台地 包蔵地
6	大阪下	目黒区青葉台三丁目	縄文中	台地縁辺 包蔵地
7	旧練兵場	目黒区東山一丁目	縄文中	台地 包蔵地
8	東山	目黒区東山三丁目 世田谷区池尻二丁目	ブレ・縄文中・後	台地縁辺・斜面・低地 集落・貝塚 (ブレ)礫群 縄文)住居 木杭列 土墳墓 弥生)住居
9	大橋	目黒区大橋二丁目	ブレ・縄文早・前・中・後・晩	台地 谷 集落 (ブレ)石器集中 縄文)住居 竪穴状遺構 集石 炉穴 土坑 埋甕 弥生・古墳)住居 近世)溝
10	駒場御用屋敷跡	目黒区大橋二丁目	近世	台地縁辺 御用屋敷 空堀 薬圃
11	大橋北	目黒区大橋二丁目	縄文中・弥生後期	台地 集落 縄文)住居 土坑 弥生)住居
12	円城院	世田谷区代田二丁目	縄文中・弥生後・古墳	台地 集落 弥生)住居 竪穴 弥生・古墳)住居 溝
13	六郎次山 根津山 飛羽根本	世田谷区代田四丁目・松原六丁目	ブレ・縄文早・前・中・近世	台地 集落 縄文)小竪穴群 炉穴 土坑 近世)掘立柱状遺構 溝
14	代田西丸	世田谷区代田四丁目	縄文	台地 包蔵地
15	東大原	世田谷区代田六丁目・大原一丁目	縄文中	台地 包蔵地
16	守山	世田谷区代田六丁目	縄文中	台地 包蔵地
17	松原羽根本通	世田谷区羽根本二丁目・松原一・五丁目	ブレ・縄文前・中・後・晩・近世	台地 集落 縄文)住居 掘立柱建物 竪穴 炉 屋外炉 焼土 土坑 近世)建物 溝
18	松原小学校	世田谷区松原五丁目松原小学校	縄文中・後・古墳	台地 包蔵地
19	羽根本山田邸跡	世田谷区羽根本一丁目・代田四丁目	縄文中	台地 集落 縄文)住居
20	梅ヶ丘	世田谷区松原五丁目	縄文中	台地 包蔵地
21	下山谷	世田谷区北沢三丁目	縄文中	台地 包蔵地
22	大山谷	世田谷区北沢四丁目・大原一丁目	縄文	台地 包蔵地
23	池ノ上	世田谷区代沢二丁目	縄文中	台地 包蔵地
24	多聞山	世田谷区三宿二丁目	縄文早・前・中・後・古墳・中世・近世	台地 集落 縄文)住居 炉 土坑 古墳)住居 中世)溝
25	世田谷城跡	世田谷区豪徳寺二丁目	中世	台地 城館
26	大鷲山	世田谷区豪徳寺二丁目	縄文中・弥生	台地 包蔵地
27	元宿	世田谷区世田谷四丁目	縄文前	台地 包蔵地
28	北沢窪	世田谷区梅ヶ丘一丁目	縄文後	台地 包蔵地
29	西山谷	世田谷区若林三丁目	不明	台地 包蔵地
30	下北沢本村	世田谷区代沢一・三丁目	弥生	台地 包蔵地
31	土器塚	世田谷区代沢一丁目	縄文中	台地 包蔵地
32	騎兵山	世田谷区池尻四丁目	縄文中	台地 包蔵地
33	代田栗原	世田谷区代田三丁目	縄文・古墳・近世	台地 包蔵地
34	栗原塚	世田谷区代田三丁目	近世?	台地 塚
35	若林中学校	世田谷区若林五丁目若林中学校	縄文	台地 包蔵地
36	若林三角山	世田谷区若林二・三丁目	縄文	台地 包蔵地
37	三宿城跡	世田谷区三宿二丁目	中世	台地 城館
38	太子堂本村	世田谷区太子堂五丁目	中世	台地 中世)石塔
39	半田塚	世田谷区松原六丁目	近世	台地 塚
40	代々木八橋	渋谷区代々木五丁目代々木八橋神社	縄文早・前・中・後	台地縁辺 集落 縄文)住居
41	渋谷4	渋谷区代々木五丁目代々木八橋神社	古墳	台地縁辺 古墳(円墳?)
42	渋谷5	渋谷区代々木五丁目	縄文中	台地斜面 包蔵地
43	渋谷6	渋谷区代々木五丁目	縄文中	台地斜面 包蔵地
44	渋谷7	渋谷区大山町	縄文中	台地 包蔵地
45	渋谷8	渋谷区西原三丁目	縄文中	台地縁辺 包蔵地
46	渋谷10	渋谷区上原三丁目	縄文中	台地縁辺 包蔵地
47	渋谷11	渋谷区上原三丁目	縄文中	台地斜面 包蔵地
48	渋谷12	渋谷区富ヶ谷一丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓2
49	渋谷13	渋谷区富ヶ谷一丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓2
50	渋谷14	渋谷区富ヶ谷一丁目	古墳	台地 古墳(円墳)

表2 周辺の遺跡(2)

番号	遺跡名	所在地	時代	概要
51	渋谷15	渋谷区富ヶ谷二丁目	縄文中	台地・低地
52	渋谷22	渋谷区代々木神園明治神宮	古墳	台地縁辺 古墳(円墳)
53	渋谷23	渋谷区代々木神園町代々木公園	古墳	台地 古墳(円墳) 3
54	渋谷26	渋谷区代々木神園町代々木公園	縄文中・弥生・奈良・平安	台地 包蔵地
55	渋谷27	渋谷区代々木神園町代々木公園	縄文中	台地縁辺 包蔵地
56	渋谷28	渋谷区代々木神園町代々木公園	縄文中	台地縁辺 包蔵地
57	ナマコ山古墳	渋谷区神南二丁目NHK放送センター	古墳	台地 古墳(円墳?)
58	渋谷30	渋谷区神南二丁目NHK放送センター	縄文中	台地 包蔵地
59	渋谷31	渋谷区松濤二丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓
60	渋谷32	渋谷区松濤二丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓
61	渋谷33	渋谷区松濤二丁目	縄文中	台地斜面 包蔵地 縄文)小竪穴
62	渋谷34	渋谷区円山町	不明	台地縁辺 社寺
63	円山町	渋谷区円山町	古墳	台地縁辺 集落 古墳)住居
64	渋谷36	渋谷区道玄坂一丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 3
65	渋谷38	渋谷区道玄坂一丁目	縄文中	台地 包蔵地
66	渋谷39	渋谷区桜丘町	プレ・縄文中	台地 包蔵地
67	渋谷40	渋谷区道玄坂二丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 2
68	渋谷41	渋谷区桜丘町	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 3
69	渋谷42	渋谷区桜丘町	縄文中・弥生	台地 包蔵地
70	渋谷44	渋谷区鉢山町	縄文中	台地 包蔵地
71	渋谷45	渋谷区鶯谷町	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 2
72	鶯谷	渋谷区鶯谷町鉢山中学校 東泉寺	縄文中	台地縁辺 集落 縄文)住居
73	渋谷47	渋谷区鶯谷町	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 3
74	渋谷48	渋谷区猿楽町	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 4
75	渋谷49	渋谷区猿楽町	縄文中	台地 集落 縄文)敷石住居?
76	猿楽塚(北塚)古墳	渋谷区猿楽町	古墳	台地縁辺 古墳(円墳)
77	猿楽塚(南塚)古墳	渋谷区猿楽町	古墳	台地縁辺 古墳(円墳)
78	渋谷52	渋谷区猿楽町	弥生	台地 包蔵地
79	渋谷53	渋谷区代官山町	古墳	台地 包蔵地
80	渋谷63	渋谷区神宮前五丁目	縄文中	台地 包蔵地
81	渋谷64	渋谷区渋谷一丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓
82	渋谷65	渋谷区渋谷二丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 2
83	渋谷城(金王丸城)跡	渋谷区渋谷三丁目金王八幡神社	中世	台地 城館
84	渋谷67	渋谷区東一丁目実践女子学園	縄文中	台地 集落 縄文)住居
85	渋谷68	渋谷区渋谷三丁目・東一丁目	古墳・奈良	台地斜面 横穴墓 6
86	渋谷82	渋谷区代々木神園町明治神宮権殿	縄文中	台地 包蔵地
87	河崎庄司郎館跡	渋谷区渋谷三丁目金王八幡西	不明	台地 城跡
88	渋谷94	渋谷区神南二丁目	縄文・古墳・奈良・平安	台地 包蔵地
89	鉢山町・猿楽町17番	渋谷区鉢山町・猿楽町	プレ・縄文・弥生・中世・近世	台地 集落 プレ)土坑 縄文)住居 土坑 弥生)環濠 住居 土坑 中世)溝 近世)掘立柱建物 溝
90	目黒54 北青山	目黒区若葉台一丁目 渋谷区神宮前五丁目	プレ・縄文後・近世	台地 包蔵地・屋敷 縄文)土坑 近世)掘立柱建物土坑 地下室 井戸 溝
91	明治大学和泉校地	杉並区永福一丁目	プレ・縄文中	台地 集落 プレ)ブロック 礎群
92	杉並91	杉並区和泉二丁目	縄文中・奈良・平安	台地斜面 包蔵地
93	杉並92	杉並区和泉三丁目	縄文後・古墳	台地 集落 古墳)住居
94	杉並169	杉並区永福一丁目	縄文	台地 包蔵地
95	杉並170	杉並区和泉二・四丁目	縄文早・前	台地 包蔵地
96	杉並171	杉並区和泉四丁目	縄文中・古墳・近世	台地 包蔵地

III 基本層序 (図3)

調査地点は、教養学部構内東端にある池より南に開析される谷と東西に流れる目黒川支流によって形成された谷に挟まれた東にのびる舌状台地上に立地している。したがって台地の微地形は西から東に緩やかな傾斜を有し、調査前まで使用されていた官舎、テニスコート等は段切り状に土を削平あるいは盛土を行って構築されていた。このうち当該地はテラス状に盛土された旧官舎部分に該当し、表土は西側では40cm程度であったが、東端では120cm程度確認された。表土は上部 (I a層) ではコンクリート、ビニールなどが認められ、数理学研究科I期棟の建築に伴う建築工事の際に駐車場、資材置場、建築小屋等として利用するため盛られたものと推定される。表土下部 (I b層) は明治時代の遺物包含層である。黒色土層で、畑等に利用されていた可能性も指摘できる。以下は、自然堆積層である。表土直下には北西の一部を除きほぼ全域に、斑状の明褐色土ブロックを含む褐色土層 (II層) が認められる。この層はいわゆるローム漸移層として認識されている層の下部と推定され、縄文時代早期の包含層である。III層以下は立川ローム層で、武蔵野台地基準層位に対応させている。III層は上部に明褐色土が斑状にみられ、縄文時代草創期から早期に何らかの自然現象によって土壌の攪拌が行われたと思われる。IV層から調査を行ったX層下部までは周辺遺跡との大きな差異は観察されなかった。 (堀内 秀樹)

— 36.8 m

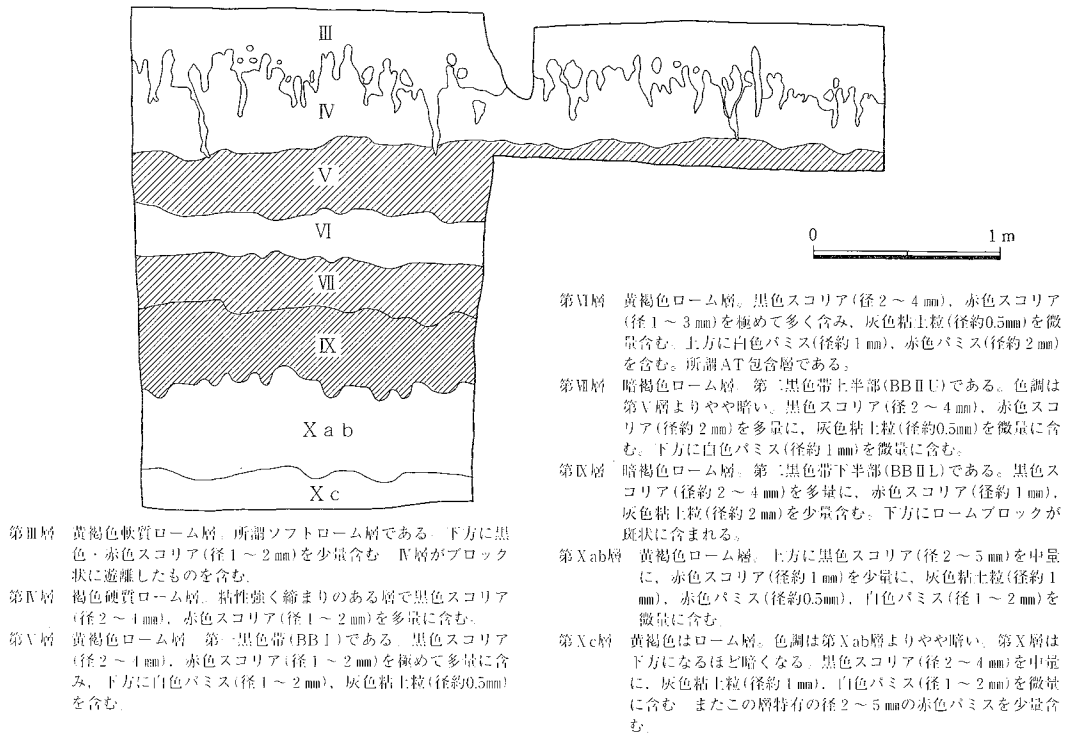


図3 基本層序

Ⅳ 先土器時代

調査は調査区全体に対して、基本的にグリッド2枚分、8×16mに対して2×2mの試掘坑を設定し、武蔵野台地基本層序V層上部まで行った(図4、5)。また、E6グリッドに設定した試掘坑はローム層堆積状況の観察をかねて、2×2mの範囲をX層下部まで調査を行った。先土器時代の遺物が確認されたのは、B3グリッドに設定した試掘坑およびその周辺域からである。分布範

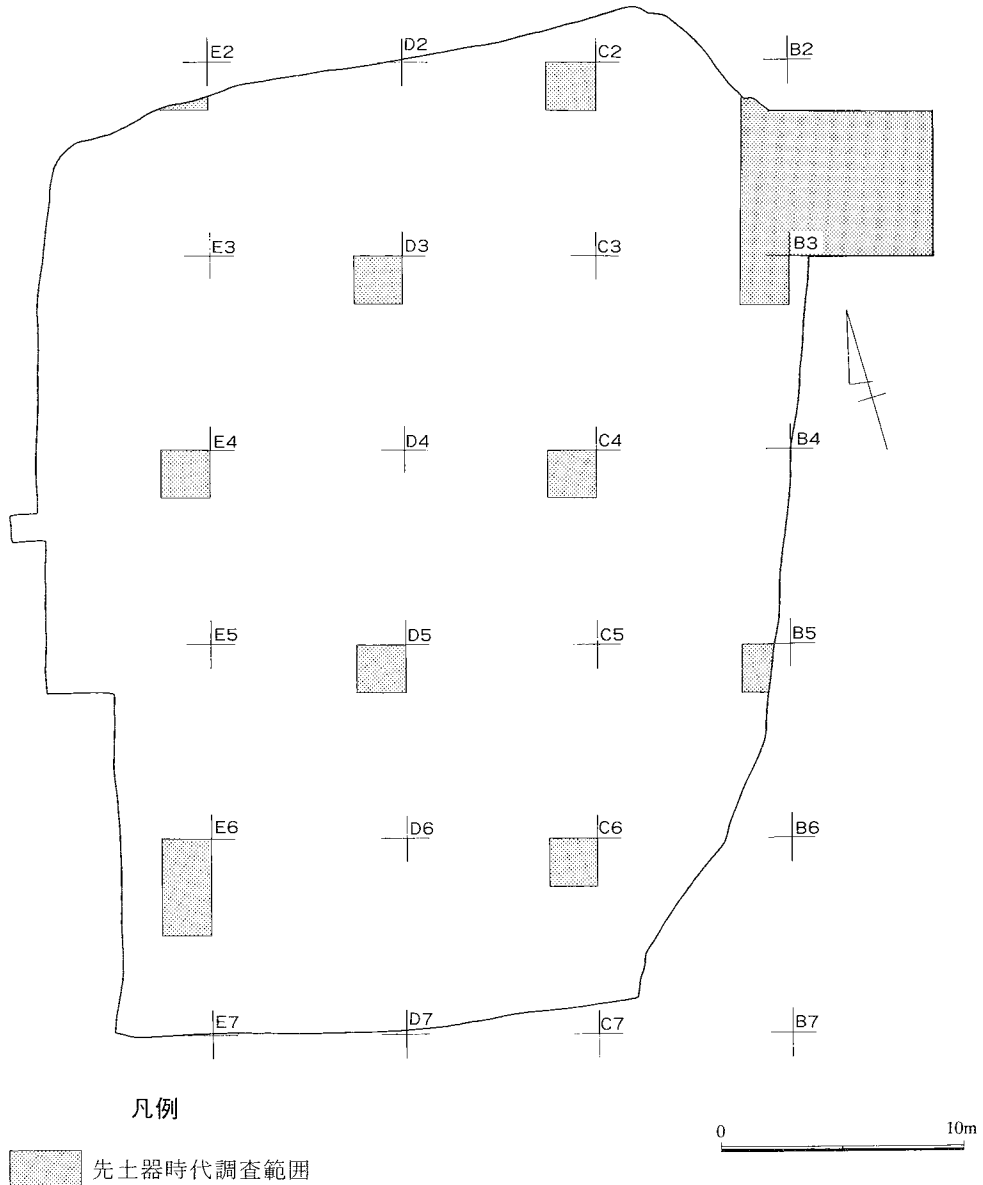


図4 先土器時代調査範囲

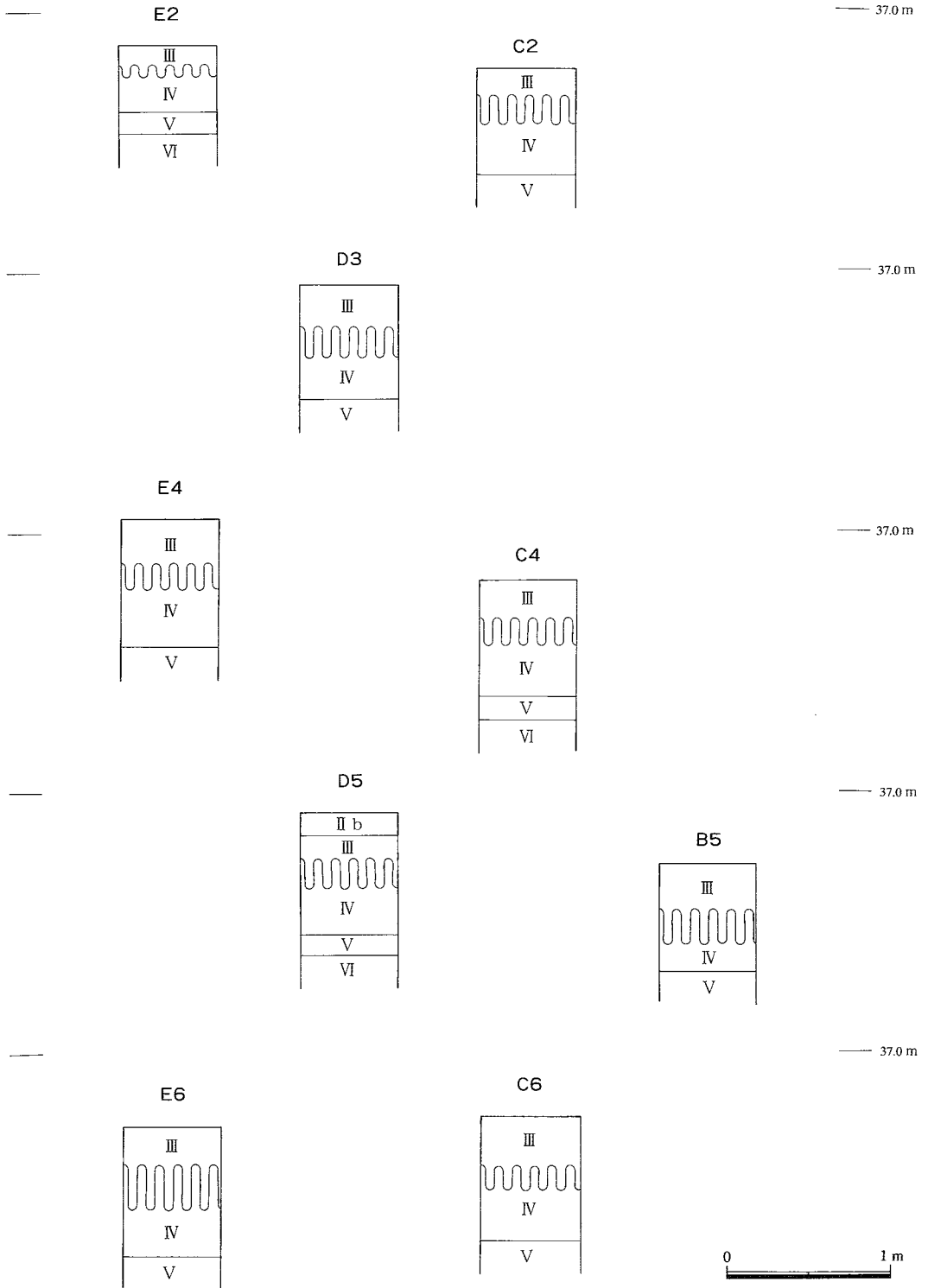


図5 土層柱状図

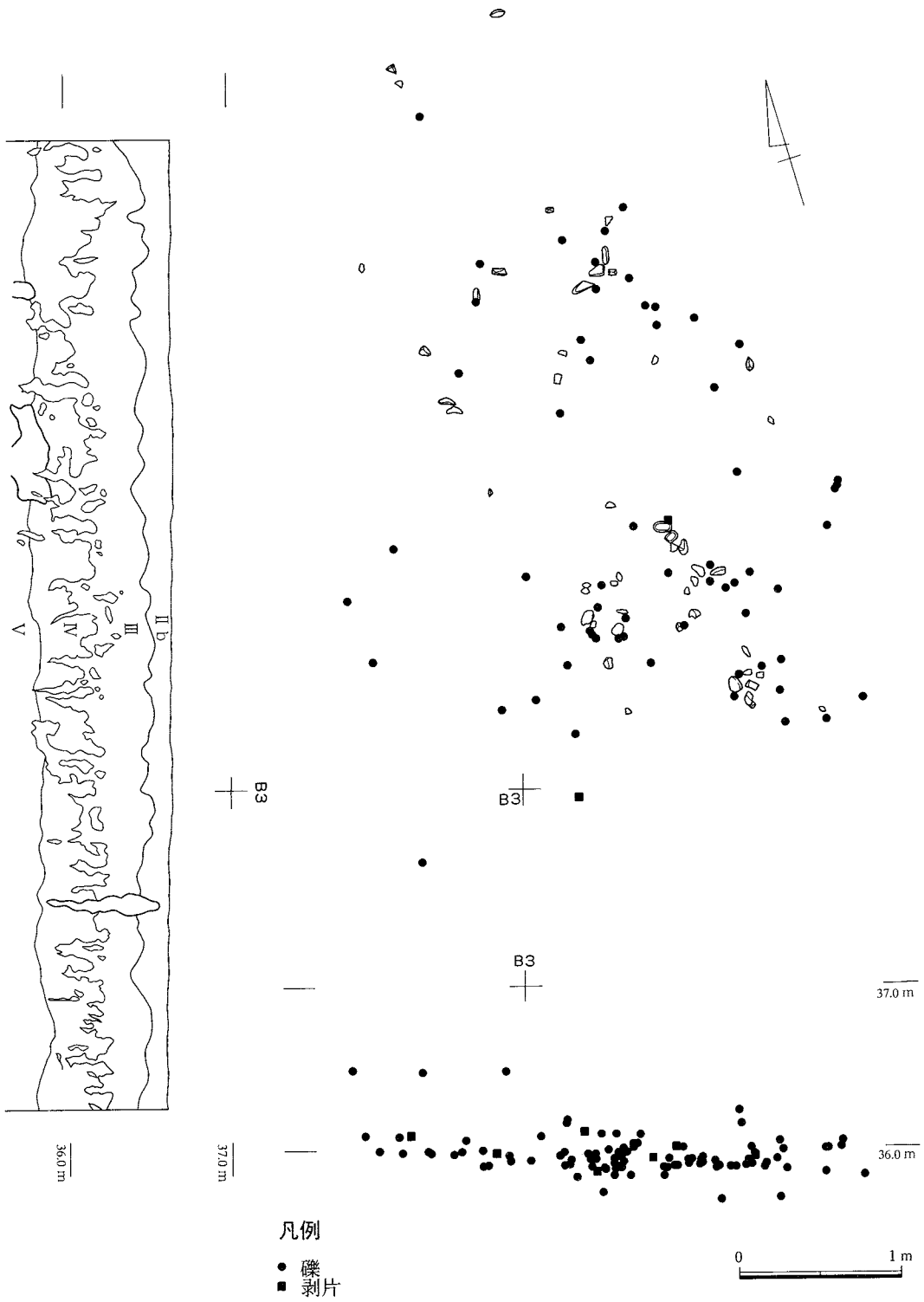


図6 礫群出土状況

冪を確認しつつ平面的に調査範囲の拡張を行い、結果的に8×6mの拡張範囲のなかで礫群1ブロックと剥片が確認された。礫および剥片の集中区は5×3mの範囲に広がり、層序はⅣ層中～下層を中心に、礫が104点が検出されたほか、剥片が7点確認された。礫群は平場から東傾面にかかる旧地形における地形転換点付近にあり、斜面にそって傾斜している。集中区には礫の分布密度がやや高いエリアが2ヶ所あるが、相互に接合することから、この礫群は一ブロックであると推察される。出土した礫はほとんどが火を受けて赤化しているが、タールが付着しているものは見られなかった(表3)。完形で検出されたものは104点中わずか5点と少なかった。接合率は高く74点が接合し、17個体になった。接合後の礫の大きさは長径8～10cmの握り拳よりやや大きいものが中心である。石質はほとんどが砂岩である。

剥片は7点が礫群と同じⅣ層で検出された。石質は珪岩が中心で、いずれも二次加工の痕跡は見られなかった(図8、表4)。 (佐藤 律子)

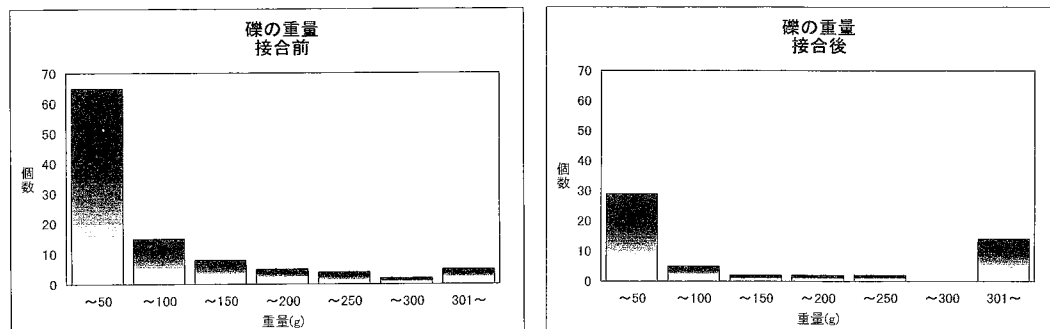


図7 礫の重量

表3 礫観察表

	個数	平均重量	赤化	タール付着
接合前	104	72.3g	103	0
接合後	47	153.7g	46	0

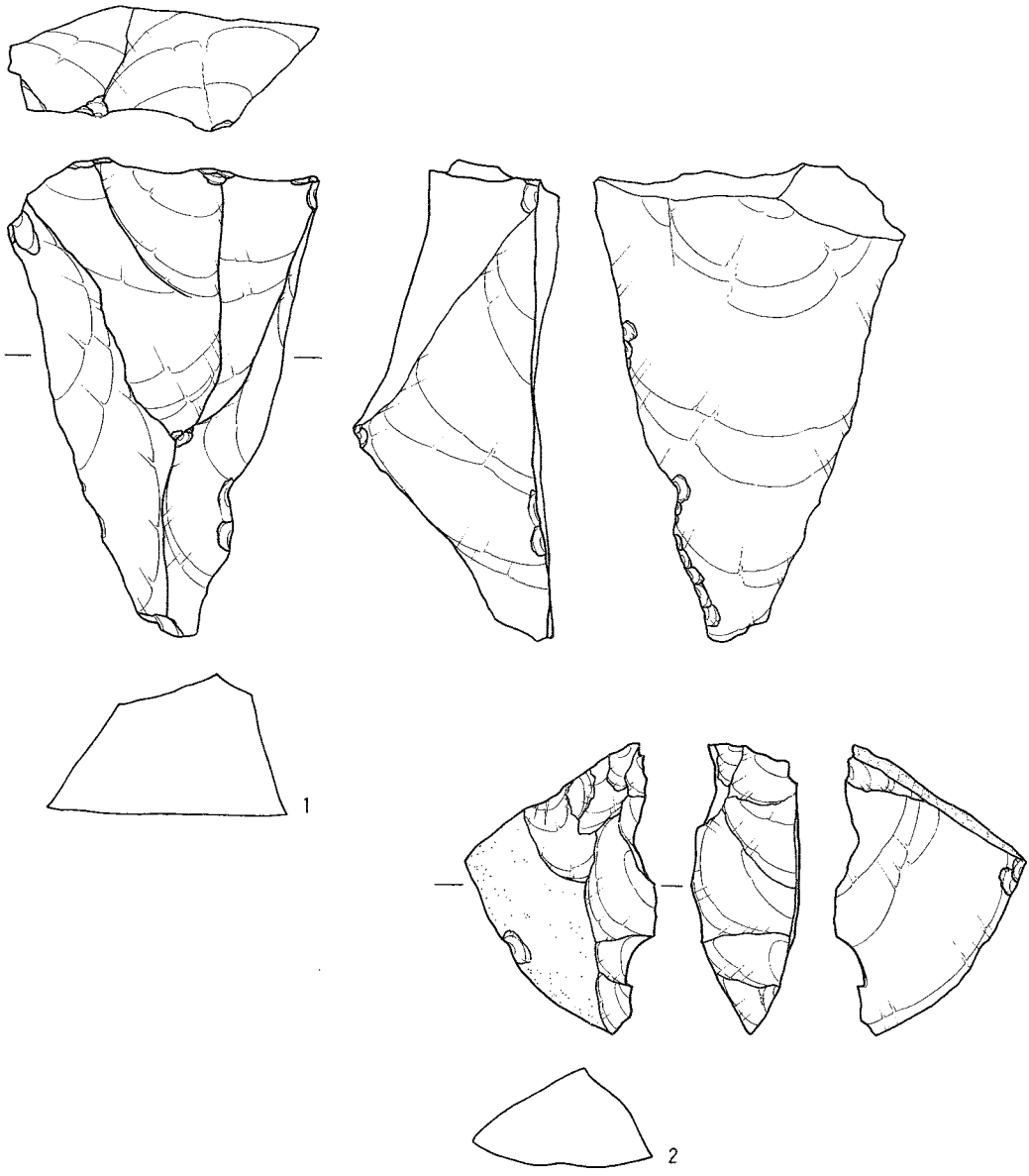


図8 出土石器

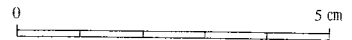


表4 石器観察表

No	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
1	剥片	珪岩	7.6	4.9	3.0	81	PL.9-1
2	剥片	珪岩	4.7	3.1	1.8	21	PL.9-2

V 縄文時代

縄文時代は早期前葉撚糸文期、後葉条痕文期、中期初頭五領ヶ台期、中期後半加曾利E期の遺構・遺物が検出された。確認された遺構は住居址1軒、炉穴13基、土坑9基、ピット23基、倒木痕3基で、出土した土器片のほとんどが早期撚糸文期または条痕文期の所産であろうと推定される。

撚糸文期の遺構はB5グリッドに確認されたSI30がある。脆弱な坑底、壁と攪乱された覆土から住居と断定するには至らなかったが、類例との検討から住居である可能性は高いと思われる。SI30の出土土器は、やや広く撚糸を施文するなど、撚糸文終末期の土器様相を示している。

条痕文期の遺構としては炉穴群がある。該期の遺跡と同様、作り替え、拡張などの行為の結果、重複して確認された例が多く、早期後葉の中のある期間、活動していたと考えることができる。土坑、ピットは遺物がほとんど出土せず、年代は不明である。また、形態、配列等にも規則性はみられなかった。

遺物は包含層中（Ⅱ層）、遺構内より土器が59点、石器が2点確認された。土器は包含層中から確認されたものが多く、その出土地点はB5、B6、C5、C6、D6グリッドなど調査区の東南部に偏在している。土器の時期は、遺構内出土のものも含めて中期初頭（図28-5）および後半の土器がそれぞれ1片ずつ確認された他は、早期前葉撚糸文系土器および後半条痕文系土器であった。また、縄文時代草創期に特徴的な胎土を有する土器細片もみられ、隣接する情報教育棟地点（仮称）の出土例からも、当該地付近で草創期段階の活動が広がりをもつ可能性も考えられる。撚糸文系土器はいわゆる稲荷台段階に比定される土器が出土するが、典型的な様相を呈する一群（図15-1,6、図28-1）と、それより後出的な特徴がみられる一群（図15-4,5,7、図28-2,3）が認められる。量的には後出的な一群が多く検出された。石器はSF23より磨石が1点、包含層中から石鏃が1点出土したのみである。

東京大学駒場構内遺跡の縄文時代における人間の活動址としての中心は早期にあるが、先述のように草創期段階からその足跡が確認できる。その後、早期撚糸文期後半に集落が経営される。これは本地点で確認されている住居址および隣接する情報教育棟地点で検出された集石遺構、または土器の出土状況から活動が行われたことがわかる。「Ⅶ.考察」の項を参考にされたいが、早期後半条痕文期には炉穴が多数確認され、活発な活動の痕跡が確認できた。前期以降では後期まで土器が散見される程度である。

1. 住居址

SI30（図10） C5グリッドに位置する。攪乱を受け、遺構の遺存状態はかなり悪い。規模は南北230cm×東西240cmで、楕円形に近い不定形を呈する。壁は攪乱、削平で西側の一部のみ確認された。床面の状態は、中央部付近の一部に硬化している面が確認されたが、全体的には軟かく、やや凹凸もみられた。壁は緩やかに立ち上がり、高さは最大で20cmを計測する。ピットは4基確

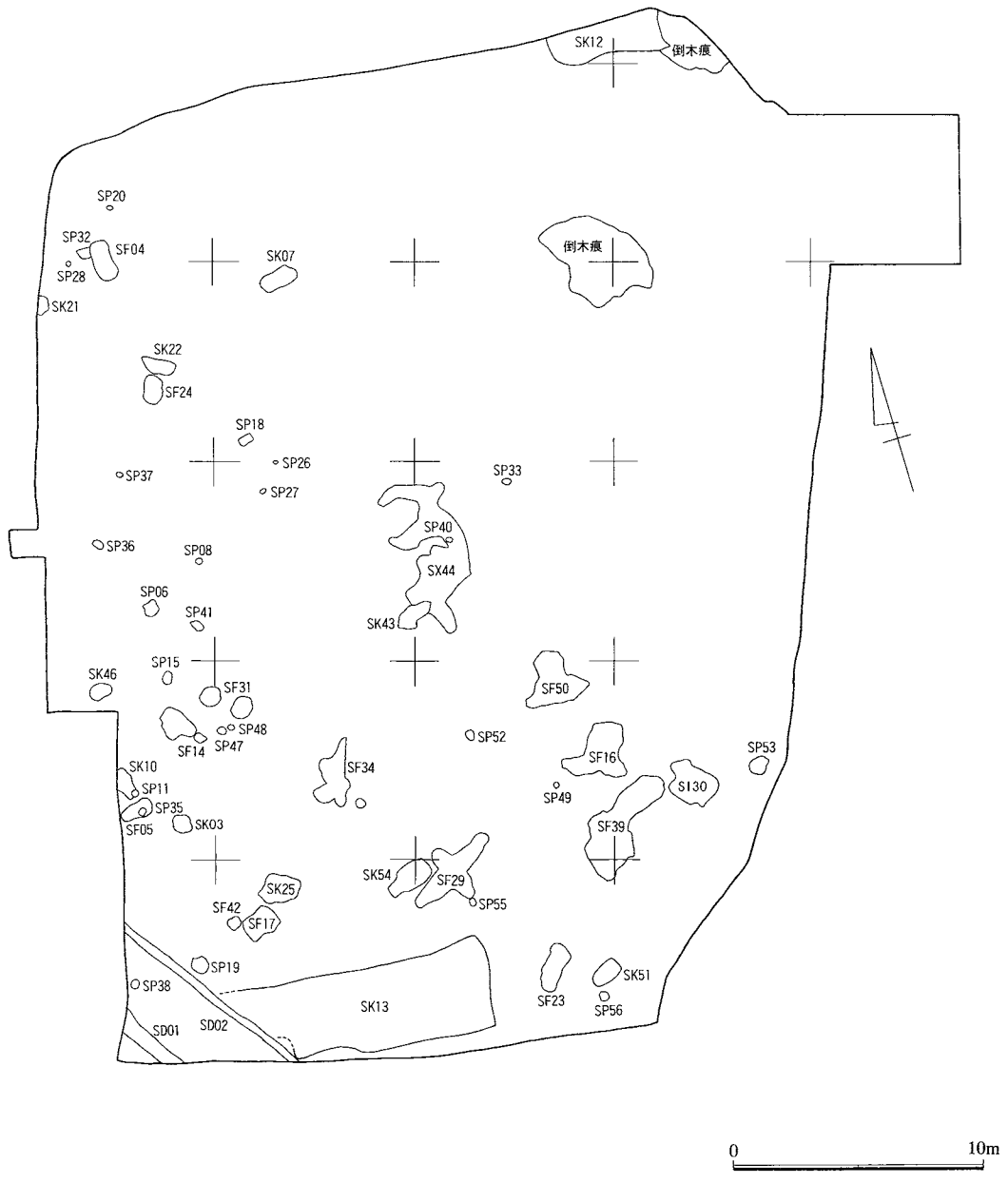


図 9 全体図

認められたが、いずれも明確な掘り込みを有するものではなく、形態も不整形である。炉址等は確認されなかった。本遺構は、攪乱・削平で全体の様子が復元できなかったが、状態、規模などが該期の不整形のものとされた一群に類似していることから住居として位置づけた。

遺物は土器片が3点(図10-1・2)、礫が9点覆土中から出土した。土器は1が胎土および撚糸文が粗に施文されることから、早期前葉撚糸文末期、2は不明である。

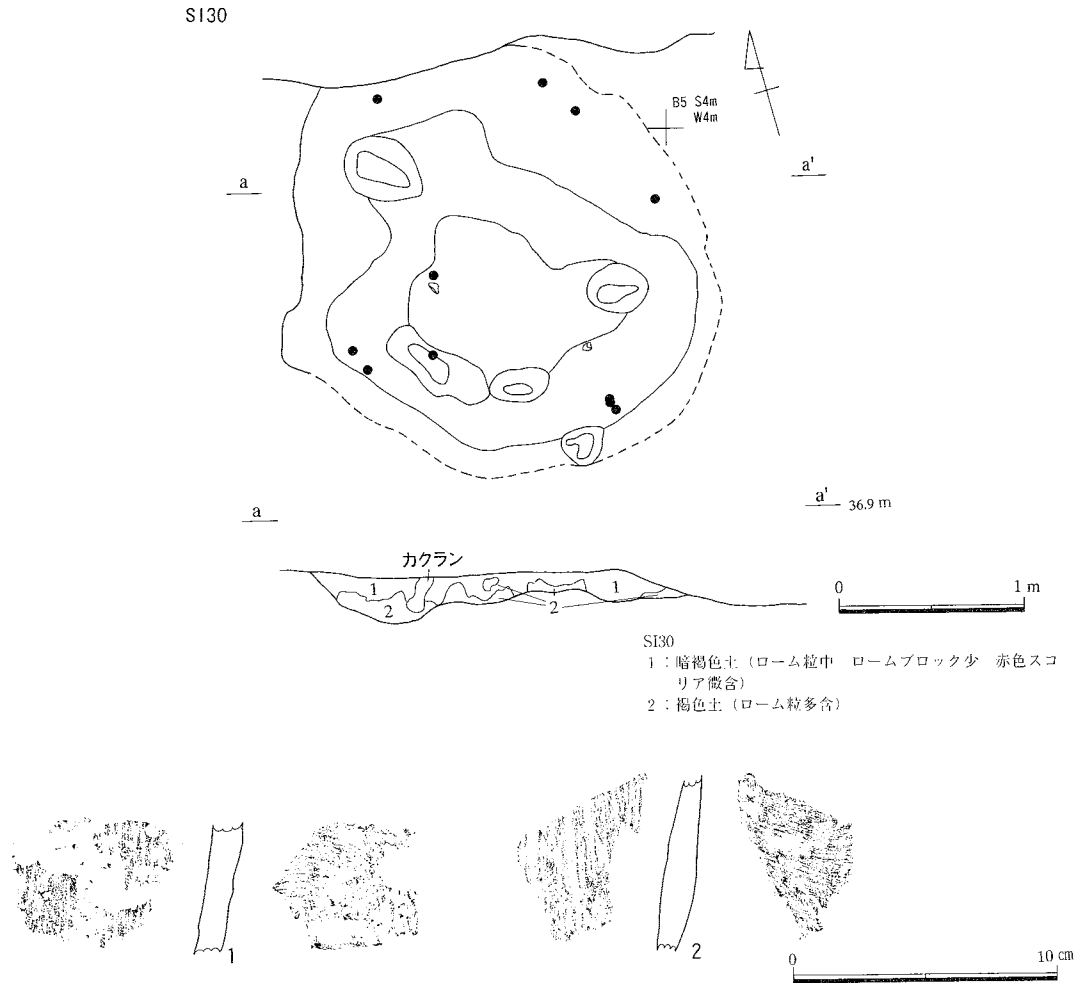


図10 SI30

表5 SI30出土土器観察表

No	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	胴部	繊維の痕跡有	外面撚糸文	PL.12-1
2	深鉢形土器	胴部		外面条痕文	PL.12-2

2. 炉穴

炉穴は重複したものが8基、単独のものが5基の合計13基確認された。SF04とSF24の2基をのぞいて調査区の西側に偏在する（図9）。調査区南側は旧地形の舌状台地の突端から縁辺部にあたり、標高は37.0～36.6mである。

S F 0 4（図11） 炉穴が集中する調査区南側からやや外れて、本遺構は標高がやや高い調査区北西E2・E3グリッドに位置している。単独の炉穴で、平面形は長径167cm×短径88cmの長楕円形を呈する。深さは炉部で確認面より32cmを計測する。主軸は真北から175°で、南側に炉部、北側になだらかに立ち上がる足場を配する。燃焼部の焼土は坑底から約10cm上に位置し、厚さは10cmを測る。これは荒掘りの後、足場や炉部を構築したためと考えられる。足場の北端中央には直径約20cm、深さ40cmのピットが確認された。このピットは近接するSP28と覆土の状態が近似しており、柱が想定される位置に他のピットは確認されなかったもののSF04に付帯する上屋等の柱穴である可能性も考えられる。

遺物は覆土上層から焼礫片が1点出土した。

S F 0 5（図11） E5グリッドに位置する。単独の炉穴で、平面形は長径140cm×短径65cmの長楕円形を呈する。確認面からの深さは最大28cmを計測する。主軸は真北から81°で、東側に炉部、西側に足場を配する。燃焼部は坑底から15cm上に構築され、焼土の厚さは5cmを測る。本遺構もSF04と同様に荒掘りの後、足場と炉部を構築したためと考えられる。重複するSP35はSF05の燃焼部を切って構築されている。

遺物は出土しなかった。

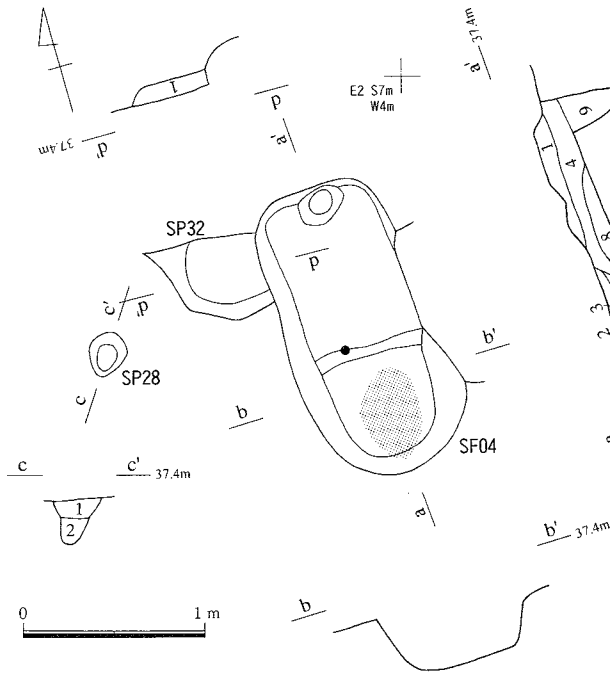
S F 1 4（図12, 31） E5グリッドに位置する。重複する2基の炉穴（A、B）で、遺存状態は比較的良好である。古い炉穴（B）の足場を軸にして炉部を東に36°振り、新しい炉穴（A）に作り替えている。

Aは長径204cm×短径70cmの長楕円形を呈する。確認面からの深さは最大で46cmを測る。主軸は真北から145°で、南側に炉部を、北側に足場を配する。炉部の南にある掘り込みは煙道の可能性が強い。燃焼部の焼土は厚さ20cmを測る。足場には炉部からかき出されたとと思われる焼土が散布している。

Bは長径92cm×短径54cmの長楕円形を呈する。確認面からの深さは最大40cmを計測する。主軸は真北から181°で、南側に炉部、北側に足場を配する。足場の大部分はAによって破壊されていた。燃焼部の焼土は坑底の約10cm上に厚さ8cmで確認され、直下の層は熱を受けて硬化している。

遺物はAの覆土から土器小片1点と礫3点が出土した。

SF04 SP28 SP32



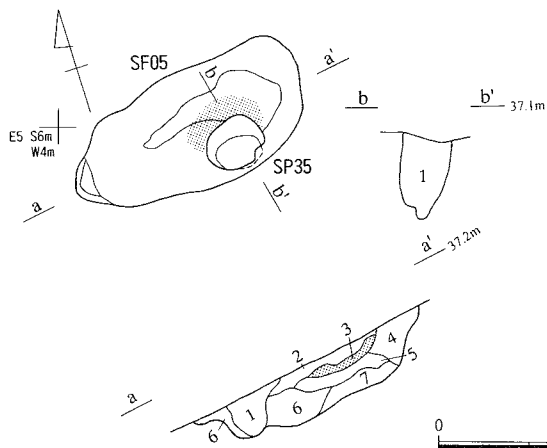
SF04

- 1 : 褐色土 (焼土粒・炭化物粒微含)
- 2 : 褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含)
- 3 : 茶褐色土 (焼土粒・焼土ブロック・炭化物粒多含)
- 4 : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒微含)
- 5 : 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成 ローム粒極多含)
- 6 : 淡褐色土 (被熱ローム層 焼土粒・炭化物粒少含)
- 7 : 褐色土 (ローム粒多 焼土粒・炭化物粒少含)
- 8 : 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒・炭化物粒微含)
- 9 : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒微含)

SP28

- 1 : 暗褐色土 (炭化物粒微含)
- 2 : 暗褐色土 (炭化物粒微含)

SF05 SP35



SP32

- 1 : 暗褐色土 (炭化物粒少含)

SF05

- 1 : 暗褐色土 (ローム粒中)
- 2 : 暗茶褐色土 (ローム粒中 焼土粒微含)
- 3 : 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒微含)
- 4 : 黄褐色土 (ほぼロームで構成 黒色・赤色スコリア微含)
- 5 : 褐色土 (ローム粒多 焼土粒微含)
- 6 : 黄褐色土 (ほぼロームで構成 黒色・赤色スコリア含)
- 7 : 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)

SP35

- 1 : 暗茶褐色土 (ローム粒中 ロームブロック・焼土粒少含)

図11 SF04, SF05, SP28, SP32, SP35

SF14

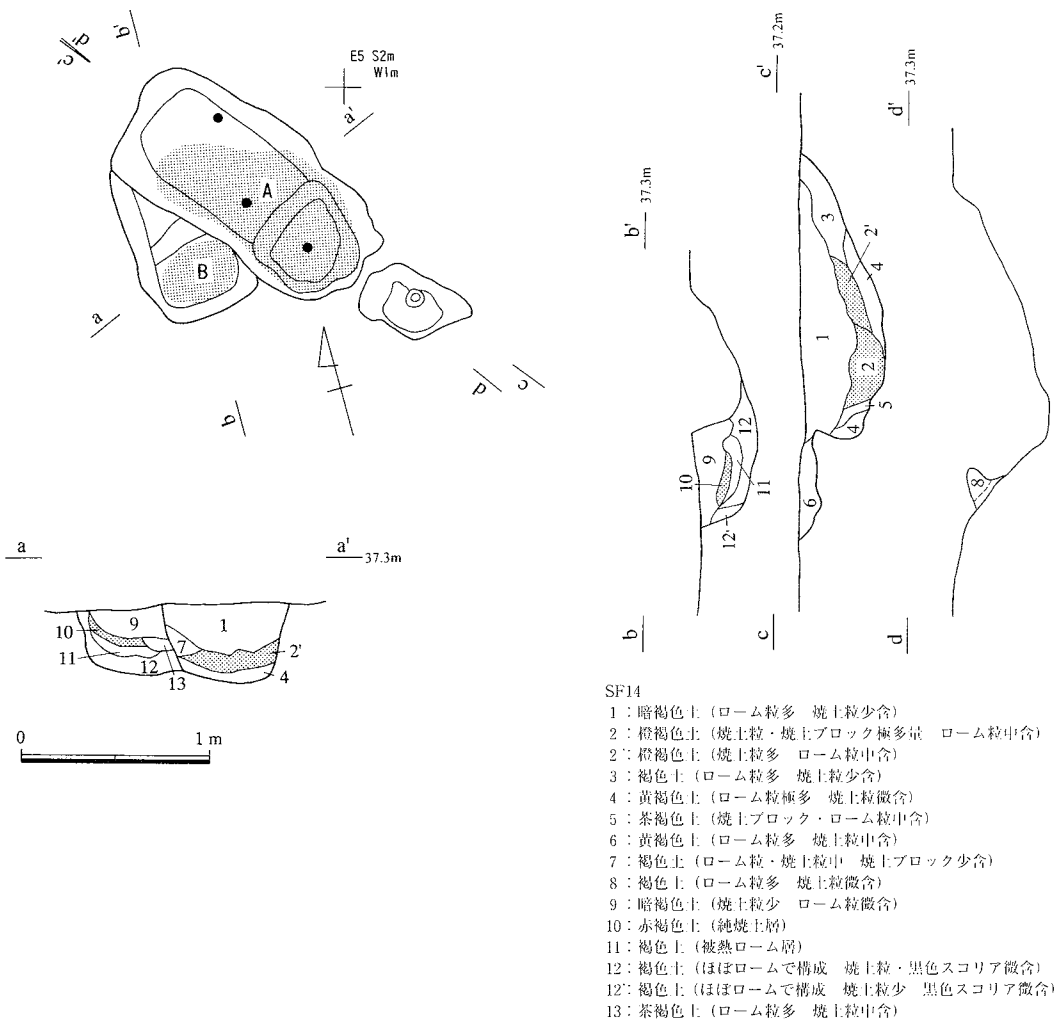
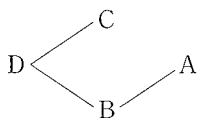


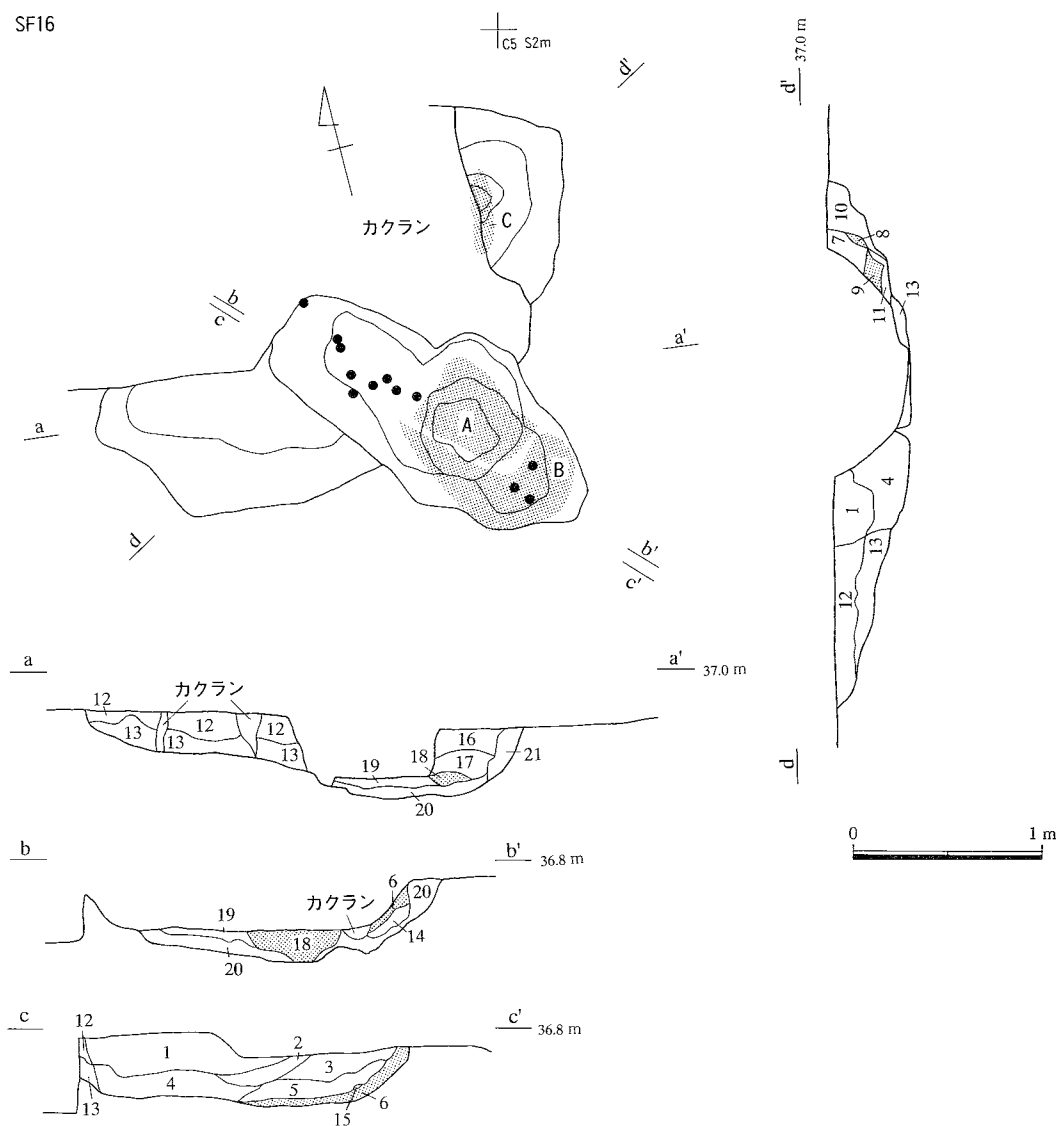
図12 SF14

S F 1 6 (図13, 31) C5グリッドに位置する。南北228cm×東西280cmの範囲に不定形を呈する。燃焼部3ヶ所 (A~C) とA・Bの西側に位置する炉穴の足場と推定できる落ち込み (D) 1基の計4基によって構成される。炉穴群中央に近代以降の攪乱を受け、遺構の遺存状態はかなり悪い。

炉穴の新旧関係は以下の通りである。



SF16



SF16

- 1: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土小ブロック少 炭化物粒微含)
- 2: 橙褐色土 (焼土粒中 ローム粒少 ロームブロック微含)
- 3: 褐色土 (焼土粒少 ローム粒微含)
- 4: 暗褐色土 (ローム粒中 焼土粒少 炭化物粒微含)
- 5: 暗褐色土 (焼土粒多 焼土小ブロック中 炭化物粒・ローム粒少含)
- 6: 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成)
- 7: 暗茶褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 8: 橙褐色土 (焼土粒中 被熱ロームブロック・焼土ブロック・ローム粒少含)
- 9: 赤褐色土 (焼土粒極多 焼土ブロック少 ローム粒微含)
- 10: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒少含)

- 11: 黄褐色土 (被熱ローム層)
- 12: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 炭化物粒・焼土粒微含)
- 13: 褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒多 焼土粒少 黑色スクリア微含)
- 14: 褐色土 (被熱ローム層 焼土粒中含)
- 15: ロームブロック
- 16: 暗茶褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒多 焼土粒少含)
- 17: 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒中 炭化物少含)
- 18: 赤褐色土 (純焼土層)
- 19: 暗褐色土 (焼土粒多 ローム粒中含)
- 20: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)
- 21: 暗褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)

図13 SF16

Aは全体が確認できた炉穴である。主軸は真北から137°で、平面形は長径136cm×短径90cmの長楕円形を呈する。確認面からの深さは約40cmを計測する。東側に炉部、西側に足場を配する。Bの掘り込みを利用し、やや後退しながら新たにAの坑底を作り替えている。

BはAに破壊され、炉部の一部のみ確認された。燃焼部の焼土は厚さ5cmで、炉部坑底から東壁にかけて広範囲に検出された。

Cは西側に攪乱を激しく受け、炉部の一部のみ確認された。全体の様子は不明。

Dは東側をA、Bに破壊され、北側は攪乱を受けている。燃焼部は確認されなかったが、位置関係からCと1基の炉穴であった可能性もある。

遺物はAから土器片1点、礫10点（焼礫1点を含む）、Bから土器片1点、礫2点が出土した。

S F 1 7（図14） D6グリッドに位置する。単独の炉穴で、平面形は長径148cm×短径114cmの瓢箪形を呈する。確認面からの掘り込みの深さが最大25cmと浅いので、上部は削平されたと考えられる。主軸は真北から70°で、東側に炉部、西側に足場を配する。燃焼部の焼土は厚さ10cmを測り、足場にかき出したと思われる焼土粒や焼土ブロックが散布していた。

遺物は出土しなかった。

S F 2 3（図14, 15） C6グリッドに位置し、標高は36.6m付近である。平面形は長径196cm×短径80cmの長楕円形を呈し、燃焼部は北側と南側の2ヶ所確認された（A, B）。確認面からの深さが最大22cmと浅いため、炉穴上部は削平されたと考えられる。

新旧関係はA→Bである。

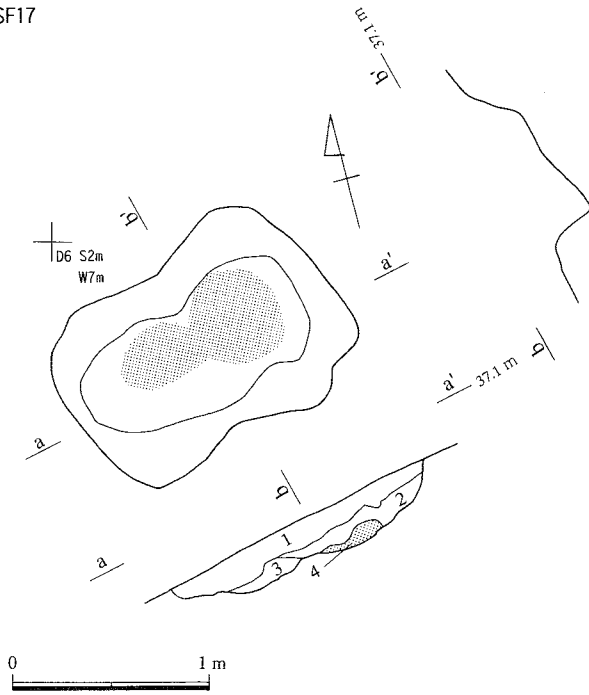
Aの主軸は真北から34°である。北側に炉部を配し、南側はBに破壊されていた。

BはAの炉部を180°振って作り替えている。主軸は真北から214°で、南側に炉部、北側に足場を配する。第1層でロームブロックが斑状に堆積している。壁が崩落したか、人為的に埋めもどしたのかは不明だが、短期間のうちに埋まったと考えられる。燃焼部の状態は、Bは堅固な焼土ブロックが5cmの厚さで確認されたが、Aは焼土粒のみで焼土ブロックはみられなかった。

遺物はAから土器片が23点（図15-1～7）、礫が2点、Bから磨石1点（図15-8）が出土した。本遺跡の炉穴における最大の遺物出土量である。土器は図15-1, 6が早期前葉, 4, 5, 7が早期前葉の末, 2, 3が早期後葉で、遺構の年代は早期後半と推察される。磨石は全面に使用された形跡が窺える。

S F 2 4（図16） 本遺構は調査区北西側のE3グリッドに位置し、近くの炉穴はSF04のみである。単独の炉穴で、平面形は長辺110cm×短辺70cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは24cmを計測する。主軸は真北から23°で、明確に炉部、足場と区別しにくいのが、燃焼部は北側に偏在している。燃焼部は坑底から6cm上に構築され、焼土の厚さ12cmを測る。荒掘りの後、炉部や足

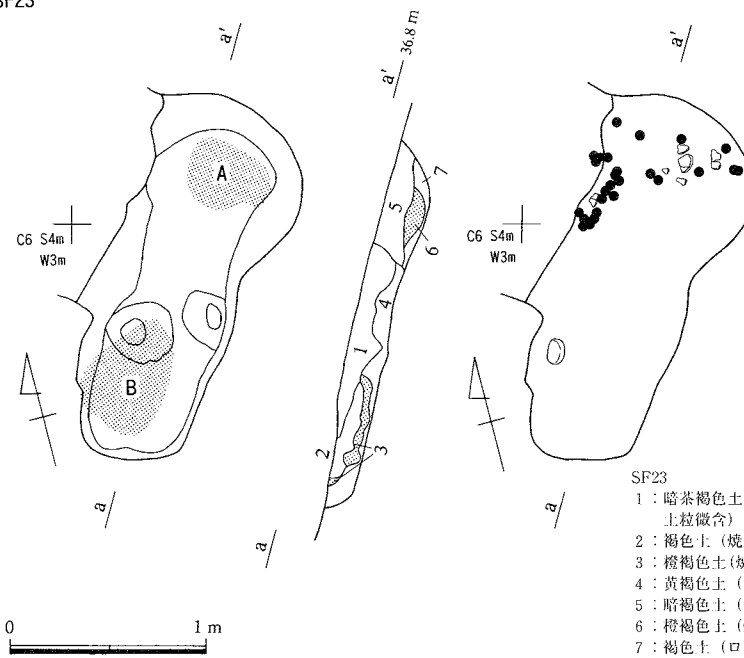
SF17



SF17

- 1 : 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
- 2 : 橙褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 3 : 茶褐色土 (焼土ブロック・焼土粒・被熱ロームブロック少含)
- 4 : 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒中 炭化物粒微含)

SF23



SF23

- 1 : 暗茶褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒中 焼土粒微含)
- 2 : 褐色土 (焼土粒多 ローム粒中 炭化物粒微含)
- 3 : 橙褐色土 (焼土ブロック・焼土粒多 ローム粒少含)
- 4 : 黄褐色土 (ローム粒多 焼土粒少含)
- 5 : 暗褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 6 : 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒少含)
- 7 : 褐色土 (ローム粒極多 炭化物粒微含)

図14 SF17, SF23

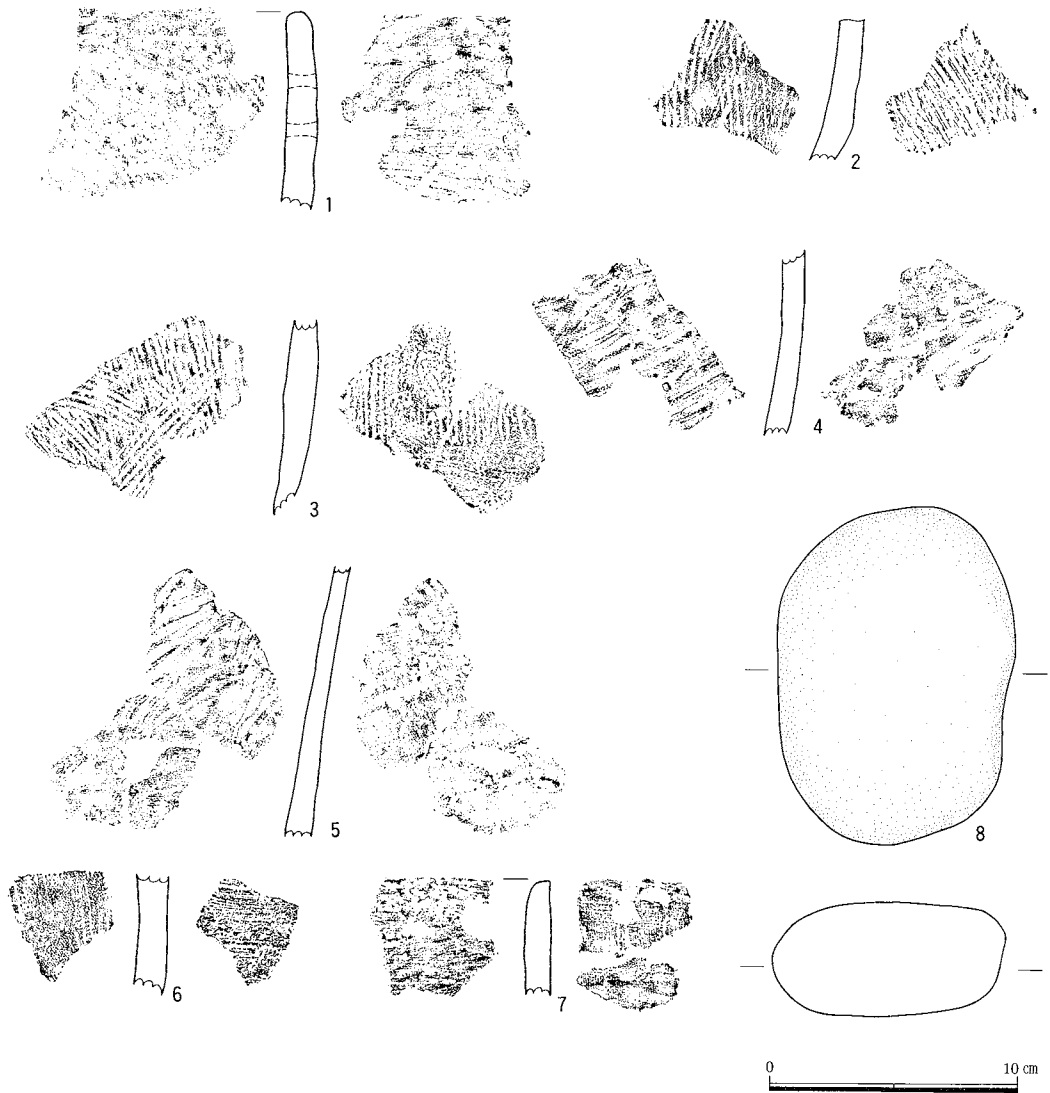


図15 SF23出土遺物

表6 SF23出土土器観察表

No	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	口縁部	小石を含む	多面撚糸文	焼成後せん孔2 PL.10-1
2	深鉢形土器	胴部	小石を含む	内外面条痕文	外面にスス附着 PL.10-2
3	深鉢形土器	胴部	白色粒子を含む	多面条痕文	PL.10-3
4	深鉢形土器	胴部	黒褐色を呈する	多面条痕文	外面にスス附着 PL.10-4
5	深鉢形土器	胴部	小石を含む	内外面条痕文	PL.10-5
6	深鉢形土器	口縁部	砂粒を含む	多面撚糸文	PL.10-6
7	深鉢形土器	胴部	砂粒を含む	多面条痕文	PL.10-7

表7 SF23出土石器観察表

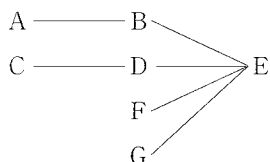
No	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
8	磨石	花崗セン緑岩	13.6	9.5	4.6	1045	PL.9-4

場を構築したものと考えられる。また、SF24の北側に位置する土坑が1基確認された（SK22）。本遺構との関係は不明である。

遺物は出土しなかった。

S F 2 9（図16,17,31） C5・C6グリッドに位置する。平面形は410cm×242cmの十字形を呈し、燃焼部は7ヶ所確認された（A～G）。

新旧関係は以下の通りである。



Aの規模は長径は北東側に作り替えが行われ不明、短径は70cm、確認面からの深さは、最大34cmを計測する。主軸は真北から238°で、南西側に炉部を配し、北東側はBに作り替えられている。燃焼部の焼土は厚く堆積し、北壁から炉部一面に広がっている。

Bの規模は長径は不明であるが、短径は86cm、確認面からの深さは最大46cmを計測する。南西側に炉部を配し、北西側はEによって切られている。BはAの同軸上で、後退しながら作り替えを行っており、BはAの坑底を掘り下げて構築されている。

Cは北西側をDに破壊され、炉部の一部のみ確認された。遺存している規模は南北60cm、東西60cm、深さ36cmを計測する。主軸は159°で、北西側に足場を有していたと考えられる。燃焼部は荒掘りの後、坑底が構築されており、焼土は厚さ15cmを測る。

DはCと同軸上に後退して作り替えを行っている。規模は長径184cm、短径100cm、確認面からの深さは最大42cmを計測する。主軸は339°で南側に足場を有する。燃焼部の焼土は北壁まで広がり、厚さ12cmを測る。

Eは最も新しい炉穴で、ほぼ円形を呈している。規模は径80cm、深さは確認面から約50cmを計測する。足場は確認できなかったが、足場をもたない炉穴としては坑底が深すぎるため、燃焼部の位置関係から東側に足場があった可能性も考えられる。

Fはほぼ円形を呈する浅い炉穴で、径は66cmを測る。主軸は339°で、北側に炉部を構築している。堆積状態からおそらく断面図30層はDに伴うものであろうと推定されるが、その上層の29層がFに伴うものかDであるか判断できなかった。

Gは長楕円形を呈する炉穴で、遺存規模は長径約150cm、短径は80cm、確認面からの深さは最大40cmを計測する。主軸は真北から241°の方角で、南側に炉部、北側に足場を配する。燃焼部の焼土は炉部の中心よりやや西寄りに確認された。

すべての燃焼部において堅固な焼土ブロックが堆積しており、その直下の層は熱を受けて硬化している。また、SF29の周囲にはSP55を含め、小ピットが4基確認された。これらが土屋など

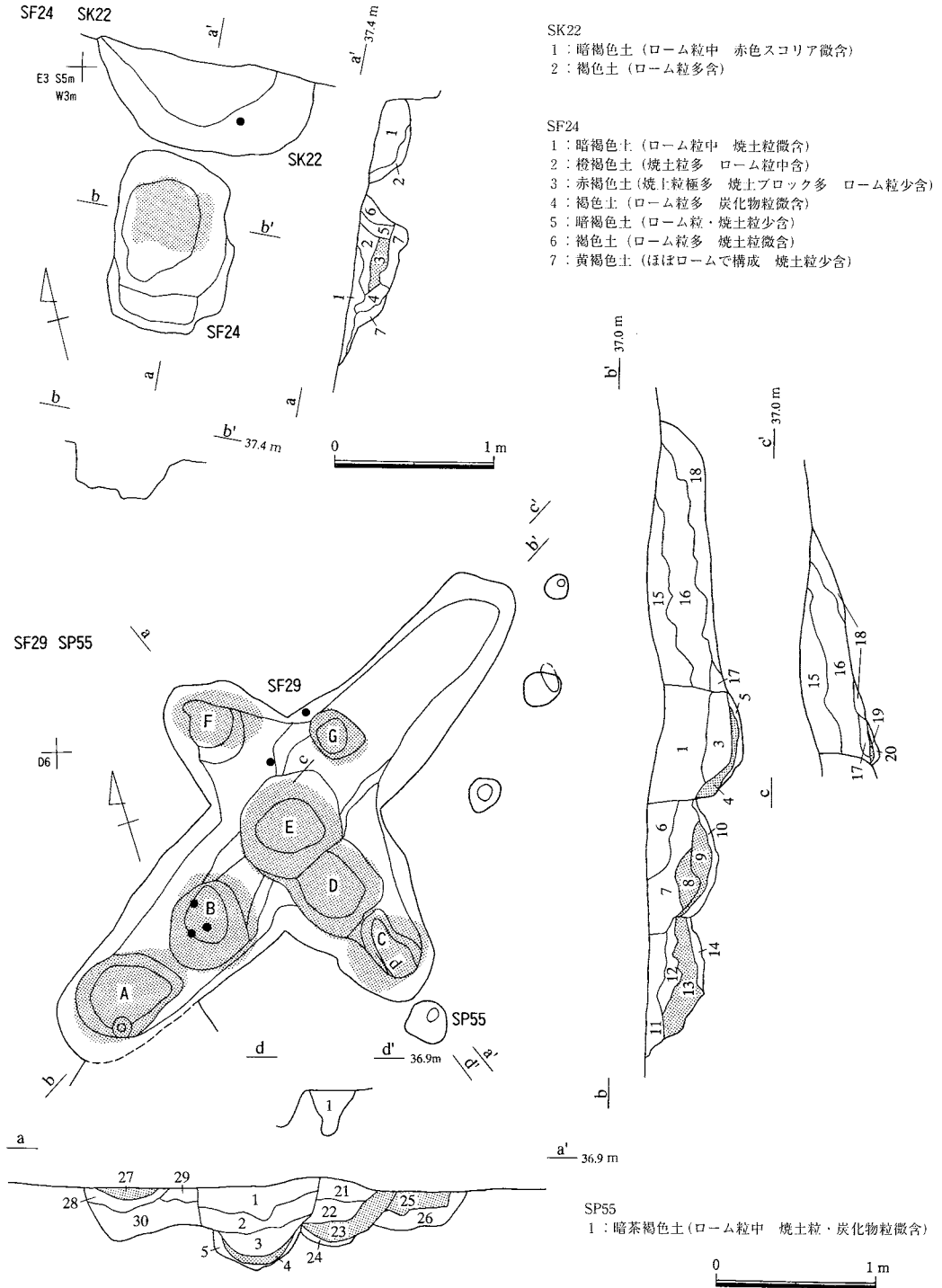


図16 SK22, SF24, SF29, SP55

第II部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

SF29

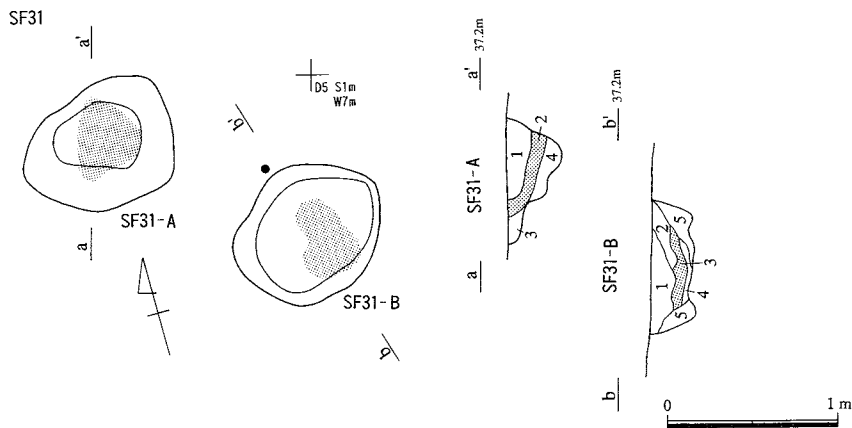
- 1: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少 炭化物粒微含)
- 2: 茶褐色土 (ローム粒中 ロームブロック・焼土粒少 炭化物粒微含)
- 3: 橙褐色土 (焼土粒多 焼土ブロック少含)
- 4: 赤褐色土 (純焼土層)
- 5: 褐色土 (被熱ローム層)
- 6: 暗茶褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒・炭化物粒少 焼土粒微含)
- 7: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少 炭化物粒微含)
- 8: 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒少含)
- 9: 橙褐色土 (ローム粒極多含)
- 10: 褐色土 (被熱ローム層)
- 11: 褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 12: 褐色土 (ローム粒・焼土粒中含)
- 13: 赤褐色土 (焼土粒極多 炭化物粒微含)
- 14: 褐色土 (被熱ローム層)
- 15: 褐色土 (ローム粒多 焼土粒少 炭化物粒微含)
- 16: 暗茶褐色土 (ローム粒中 焼土粒微含)
- 17: 褐色土 (ローム粒多 焼土粒中含)
- 18: 黄褐色土 (ほぼロームで構成)
- 19: 赤褐色土 (純焼土層)
- 20: 褐色土 (被熱ローム層)
- 21: 茶褐色土 (焼土粒中 ローム粒少 炭化物粒微含)
- 22: 茶褐色土 (焼土粒少 焼土ブロック微含)
- 23: 赤褐色土 (純焼土層)
- 24: 褐色土 (被熱ローム層)
- 25: 橙褐色土 (焼土粒極多含)
- 26: 黄褐色土 (ほぼ被熱ロームで構成)
- 27: 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成 暗褐色土少含)
- 28: 褐色土 (被熱ローム中 焼土粒・ローム粒少含)
- 29: 暗褐色土 (ロームブロック斑状 焼土粒微含)
- 30: 褐色土 (ローム粒極多 ロームブロック多 炭化物少 焼土粒微含)



図17 SF29出土遺物

表8 SF29出土土器観察表

NO	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	胴部			内外面擦痕 PL.11-1
2	深鉢形土器	胴部			内外面擦痕 PL.11-2



SF31-A

- 1: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土粒中 炭化物粒微含)
- 2: 赤褐色土 (焼土粒・焼土ブロック極多 ローム粒少含)
- 3: 褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 4: 黄褐色土 (被熱ロームブロック・ローム粒極多含)

SF31-B

- 1: 暗茶褐色土 (焼土粒少 ローム粒微含)
- 2: 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒微含)
- 3: 赤褐色土 (焼土粒極多 焼土ブロック少含)
- 4: 茶褐色土 (被熱ロームブロック)
- 5: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)



図18 SF31

表9 SF31出土土器観察表

NO	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	胴部	繊維?を含む	外面条痕文	PL.11-3

の付帯施設の遺構であるかの判断はできなかった。SF29では最も新しいEが中央にあり、遺構の構築順序の把握を困難にしている。後退、反転、回転など複雑な構築状況があった可能性も考えられる。

遺物はBから土器片2点(図17-2)、焼礫1点、Fから土器片1点(図17-1)、Gから焼礫1点が出土した。土器の年代は1は不明だが、2は早期後葉である。

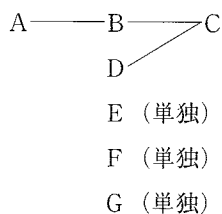
S F 3 1 (図18) D5・E5グリッドに位置する。燃焼部が2ヶ所確認された(A, B)。確認面におけるAおよびBの周囲には焼土が散っており、確認時には炉穴の切り合いもしくは作り替えであろうと推定されたが、遺存状態が悪く、確認するには至らなかった。

Aの平面形はややいびつな円形を呈し、規模は90cm×80cm、深さは最大34cmを計測する。燃焼部の焼土の一部が確認面まで達する。

Bの平面形は楕円形で、規模は95cm×82cm、深さは最大26cmを計測する。燃焼部は坑底から3cm上に構築され、焼土の厚さは8cmを測る。燃焼部の焼土の状態はA, Bとも焼土粒・ブロックがしまりなくポロポロの状態で堆積し、その直下の層は被熱して硬化している。

遺物はBのすぐ脇から土器片が1点(図18-1)出土し、年代は早期後葉である。

S F 3 4 (図19) D5グリッドに位置する。南北304cm×東西196cmの範囲に燃焼部が7ヶ所確認された(A~G)。近代以降の攪乱を受けており、規模、主軸、切り合いなど全体の様子を復元できた遺構は少なかった。重複が確認できた炉穴はA~Dで、E, F, Gは攪乱、削平のため確認するには至らなかった。新旧関係は以下のとおりである。



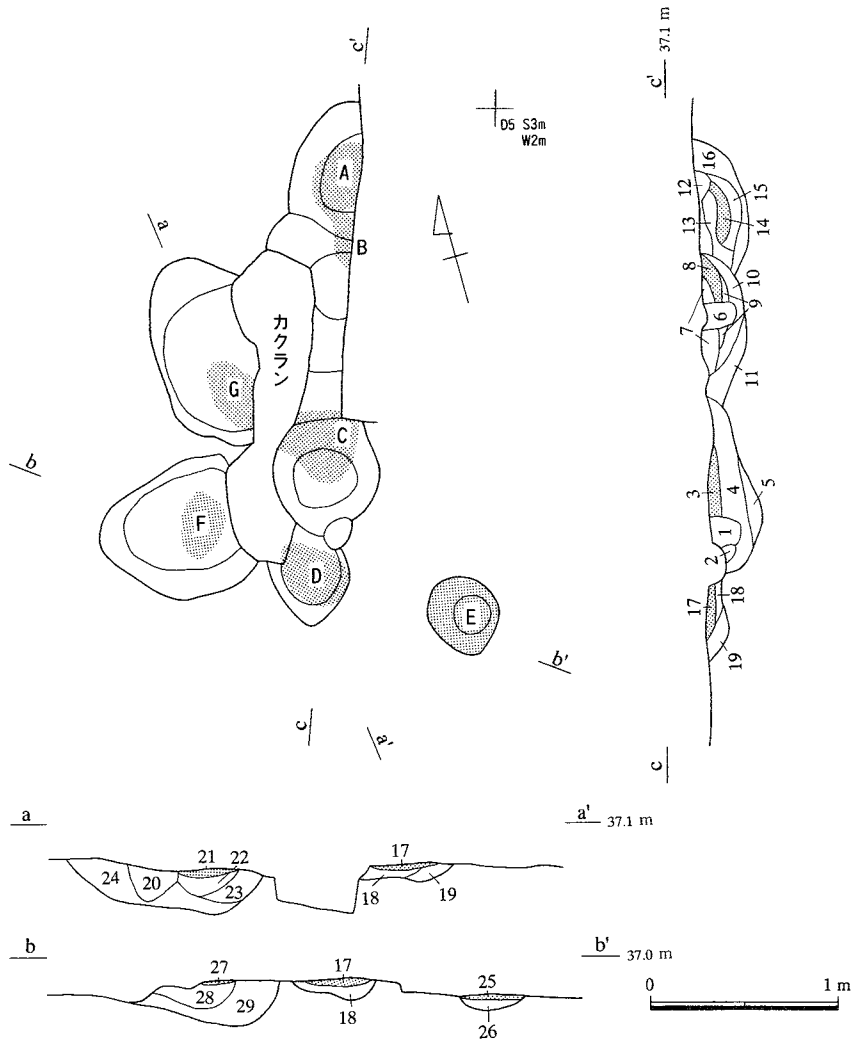
Aは一番北に位置する炉穴で、北側はBに作り替えられ、東側は攪乱を受けている。燃焼部は坑底から10cm上に位置し、焼土は厚さ8cmを測る。

Bは攪乱により西側と東側が破壊され、南側はCによって破壊されているため、中央部分のみ確認された。燃焼部は坑底から12cm上の位置に構築され、焼土は北壁から炉部中央にかけて広がっている。Aの南側の掘り込みを利用し、Bに作り替えている。AとBの坑底のレベルはほぼ同じである。

Cは南側に炉部を配し、燃焼部は炉部の北側、坑底から22cm上に構築されている。

Dは西側は攪乱を受け、北側はCに作り替えられている。新しいCの坑底はDよりレベルが低い。

SF34



SF34

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1: 赤褐色土 (焼土粒・炭化物粒多含) | 16: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 炭化物粒微含) |
| 2: 褐色土 (焼土粒・炭化物粒少) | 17: 暗赤褐色土 (焼土粒多含) |
| 3: 暗赤褐色土 (焼土粒多 炭化物粒中含) | 18: 褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含) |
| 4: 褐色土 (焼土粒微含) | 19: 褐色土 (ローム粒極多 炭化物粒微含) |
| 5: 褐色土 | 20: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 炭化物粒少含) |
| 6: 黒褐色土 (炭化物粒多 焼土粒少含) | 21: 赤褐色土 (焼土粒・焼土ブロック・炭化物粒多含) |
| 7: 褐色土 (焼土粒少含) | 22: 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含) |
| 8: 暗赤褐色土 (焼土ブロック・焼土粒・炭化物粒極多含) | 23: 褐色土 (ローム粒中 炭化物粒少含) |
| 9: 黄褐色土 (被熱ローム層 炭化物粒少含) | 24: 黄褐色土 (ほぼロームで構成) |
| 10: 褐色土 (ローム粒極多 炭化物粒少含) | 25: 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒中含) |
| 11: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 炭化物粒微含) | 26: 褐色土 (焼土粒・炭化物粒中含) |
| 12: 暗赤褐色土 (焼土粒・炭化物粒多含) | 27: 赤褐色土 (焼土粒・炭化物粒多含) |
| 13: 赤褐色土 (焼土粒・炭化物粒多含) | 28: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 炭化物粒微含) |
| 14: 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成 ローム粒中含) | 29: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒・炭化物粒微含) |
| 15: 黄褐色土 (被熱ローム層 ほぼロームで構成 炭化物粒少含) | |

図19 SF34

Eの平面形は40cm×35cmの楕円形を呈する。上部は削平され、炉部のみ確認された。

Fの主軸は真北から94°で、西側に攪乱を受けている。平面形は楕円形を呈し、規模は攪乱のため長径は不明だが、短径74cm、深さは最大24cmを計る。東側に炉部、西側に足場を配する。燃焼部の遺存状態も悪く、焼土の含まれる層が一部確認されたのみである。

Gは楕円形を呈し、主軸は真北から171°である。南側に炉部、北側に足場を有する。燃焼部は坑底から20cm上に構築され、厚さ4cmの焼土の層が検出された。この焼土層上部は削平されており、より厚く堆積していた可能性も考えられる。

燃焼部の状態はAとBで焼土ブロックが検出され、その直下の層は熱を受け硬化している。その他の炉穴からは焼土粒を多く含む層のみで焼土ブロックはみられない。

遺物は出土していない。

S F 3 9 (図20, 21, 図31, 表10) C5・C6グリッドに位置する。南北340cm×東西340cmの範囲に、二つの重複した炉穴群で構成される。燃焼部は9ヶ所確認された(A～E, F～I。FとHの間に、土層断面で確認された燃焼部があり、その燃焼部が伴う炉穴をIとする)。

炉穴群は大きく2つに分かれ、二者の間には時間的断絶があると考えられる。新旧関係は以下の通りである。

A ——— B ——— C ——— D ——— E
F ——— H ——— I ——— G

A～Cは同軸上(真北から64°)を後退しながら作り替えが行われ、坑底は新しい炉穴ほど深い。

D・EもA～Cと同軸上に構築されている。図20の9層はCに伴うものと考えられ、DとEの坑底は9層の上面の可能性が高い。土層の堆積状況から窺える構築順序は一連の作り替えではなく、古いA～CとD～Eでは時間的断絶があると考えられる。

EはDの足場を利用し、作り替えを行っている。炉部のみ検出され、足場は確認されなかった。

Fの主軸は真北から54°で、東北側に炉部、南西側に足場を有する。燃焼部は坑底から15cm上に構築され、焼土の厚さは8cmを測る。

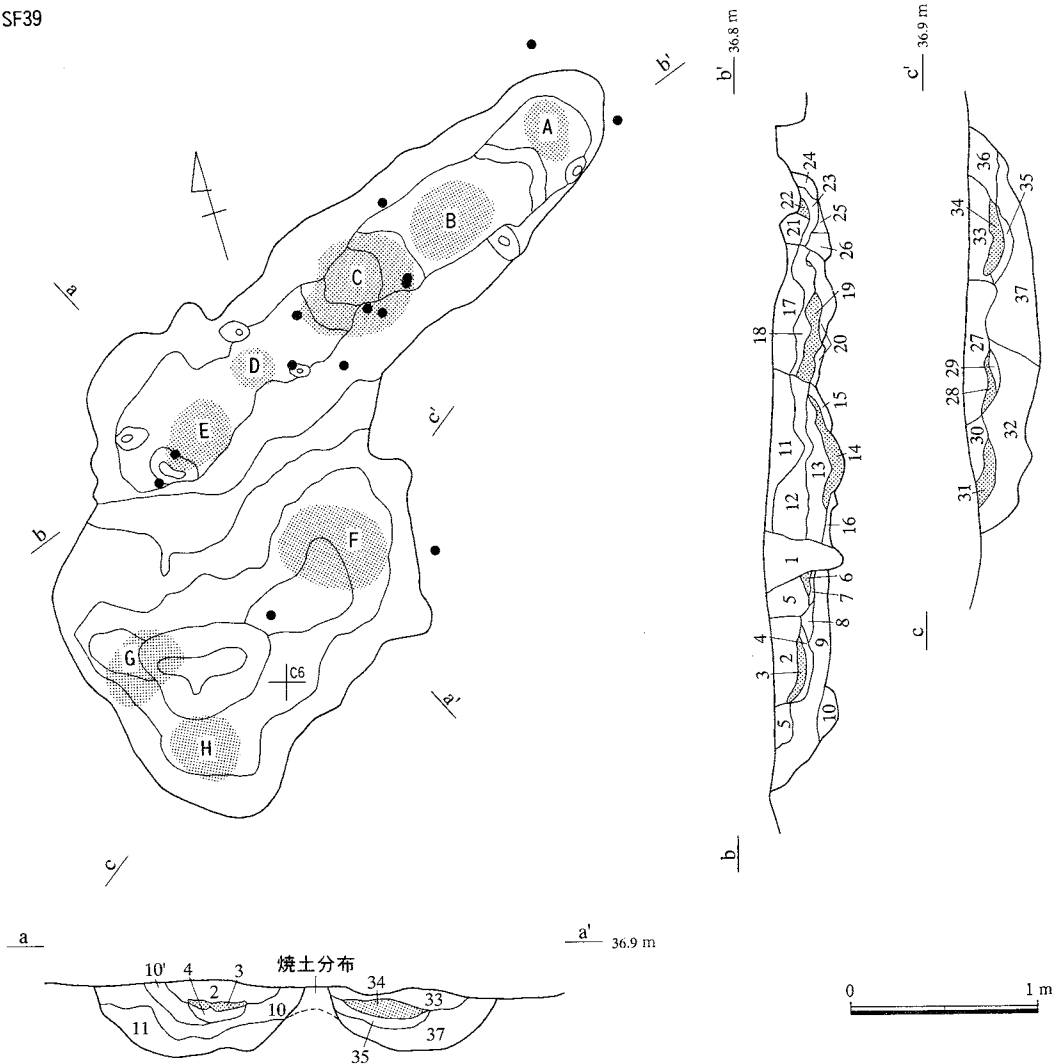
Gは一番新しい炉穴で、燃焼部・足場とも周囲の炉穴群とは独立して存在していた。時期差があると思われる。

HはFの足場を共有し、炉部を180°振って作り替えている。燃焼部は坑底より18cm上に構築され、焼土は厚さ8cmを測る。

IはFとHの間に位置し、燃焼部の平面形は確認できなかったが、土層断面から燃焼部が確認され、南西側に炉部を配する炉穴である。Hの掘り込みを利用し、Iの炉部に作り替えている。

燃焼部はすべて純焼土またはほぼ焼土が確認され、B, D, E, F, では燃焼部直下の層が熱を受けて硬化している。

SF39



SF39

- | | |
|--|---|
| <p>1: 暗褐色土 (焼土粒・炭化物ブロック少含)</p> <p>2: 茶褐色土 (焼土粒中・ローム粒少含)</p> <p>3: 赤褐色土 (純焼土層)</p> <p>4: 褐色土 (被熱ローム層)</p> <p>5: 暗茶褐色土</p> <p>6: 赤褐色土 (純焼土層)</p> <p>7: 褐色土 (被熱ローム層)</p> <p>8: 茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)</p> <p>9: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)</p> <p>9': 黄褐色土 (9よりやや暗)</p> <p>10: 黄褐色土 (焼土粒・黒色スコリア微含)</p> <p>11: 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含)</p> <p>12: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土粒・炭化物粒少含)</p> <p>13: 橙褐色土 (焼土ブロック・焼土粒・炭化物粒中)</p> <p>14: 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成 炭化物粒多含)</p> <p>15: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒・炭化物粒中)</p> <p>16: 黄褐色土 (ほぼロームで構成)</p> <p>17: 暗褐色土 (焼土粒中 焼土ブロック・炭化物粒少含)</p> <p>18: 橙褐色土 (焼土粒・焼土ブロック多 炭化物粒中)</p> | <p>19: 赤褐色土 (ほぼ焼土で構成 炭化物粒多含)</p> <p>20: 褐色土 (被熱ローム層 焼土粒・炭化物粒中)</p> <p>21: 暗赤褐色土 (焼土粒・炭化物粒中)</p> <p>22: 赤褐色土 (純焼土層)</p> <p>23: 褐色土 (炭化物粒少含)</p> <p>24: 黄褐色土 (炭化物粒少含)</p> <p>25: 暗茶褐色土 (ローム粒多含)</p> <p>26: 褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含)</p> <p>27: 暗茶褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒多 焼土粒少含)</p> <p>28: 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒少含)</p> <p>29: 茶褐色土 (焼土粒少 炭化物粒微含)</p> <p>30: 暗茶褐色土 (ロームブロック斑状 ローム粒多 焼土粒微含)</p> <p>31: 橙褐色土 (焼土粒多 焼土ブロック・被熱ロームブロック少含)</p> <p>32: 褐色土 (ほぼロームで構成)</p> <p>33: 暗茶褐色土 (ローム粒中 炭化物粒・焼土粒少含)</p> <p>34: 橙褐色土 (焼土粒多 ローム粒少含)</p> <p>35: 褐色土 (被熱ローム層)</p> <p>36: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒少含)</p> <p>37: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒少含)</p> |
|--|---|

図20 SF39

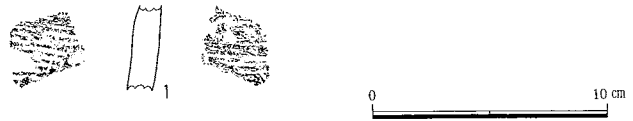
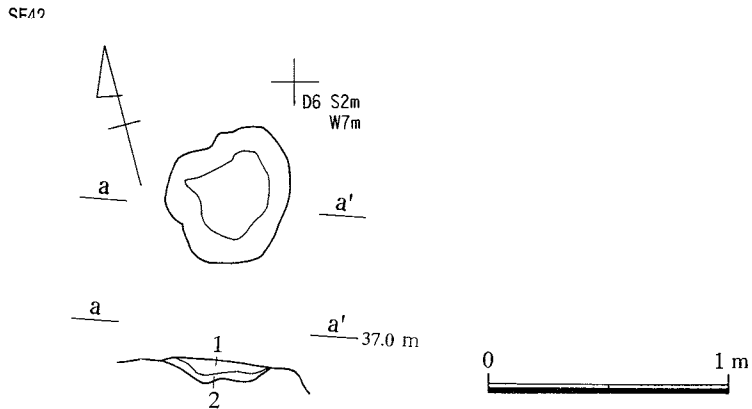


図21 SF39出土器物

表10 SF39出土土器観察表

NO	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	胴部	砂粒を含む	外面条痕文	外面にスス付着 PL.11-4



SF42

- 1：暗茶褐色土（焼土粒・焼土ブロック・ローム粒少含）
- 2：褐色土（ほぼロームで構成 焼土粒微含）

図22 SF42

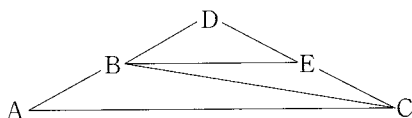
遺物はA脇から土器片1点（図21-1）礫1点，Cから土器片4点，礫が4点，Eから礫2点，F脇から礫1点，Iから土器1点が出土した。これらの土器は早期後葉条痕文系土器群である。

S F 4 2（図22） D6グリッドに位置する。単独の炉穴で，平面形は不整形を呈し，規模は60cm×50cm，確認面からの深さは最大10cmを測る。上部がかなり削平され，焼土が含まれる層のみ確認された。

遺物は出土しなかった。

S F 5 0（図23,31，表11） C5グリッドに位置する。南北270cm×東西222cmの不整形の範囲に，重複する炉穴が5ヶ所確認された（A～E）。

新旧関係は以下の通りである。



Aは一番北に位置する炉穴である。北側に炉部を配し、南側はB、Cに破壊されている。

Bは南側に炉部、北側に足場を配する。Aの足場を軸にし、炉部を反転してBに作り替えたと考えられる。炉部の南壁はC、D、Eによって削平されている。

Cは一番新しい炉穴で、足場は構築されていない。

Dは東側に炉部を配し、西側はEに破壊されている。Bの足場を軸に東に振り、構築しているものと推定される。

Eの主軸は真北から80°で、東側に炉部、西側に足場を有する。Dの足場を利用し、同軸上に後退してEを構築している。

燃焼部の状態はCは純焼土で構成され、その他は焼土粒が多い層が確認された。燃焼部直下の層は熱を受けて硬化していた。

遺物はBから礫4点、Cから土器片1点(図23-1)、Dから礫1点、Eから土器片1点、礫5点出土した。土器の年代は不明。

3. その他の遺構

本遺跡において炉穴以外で性格がわかるものは少なく、SX44を含む倒木痕3ヶ所のみである。

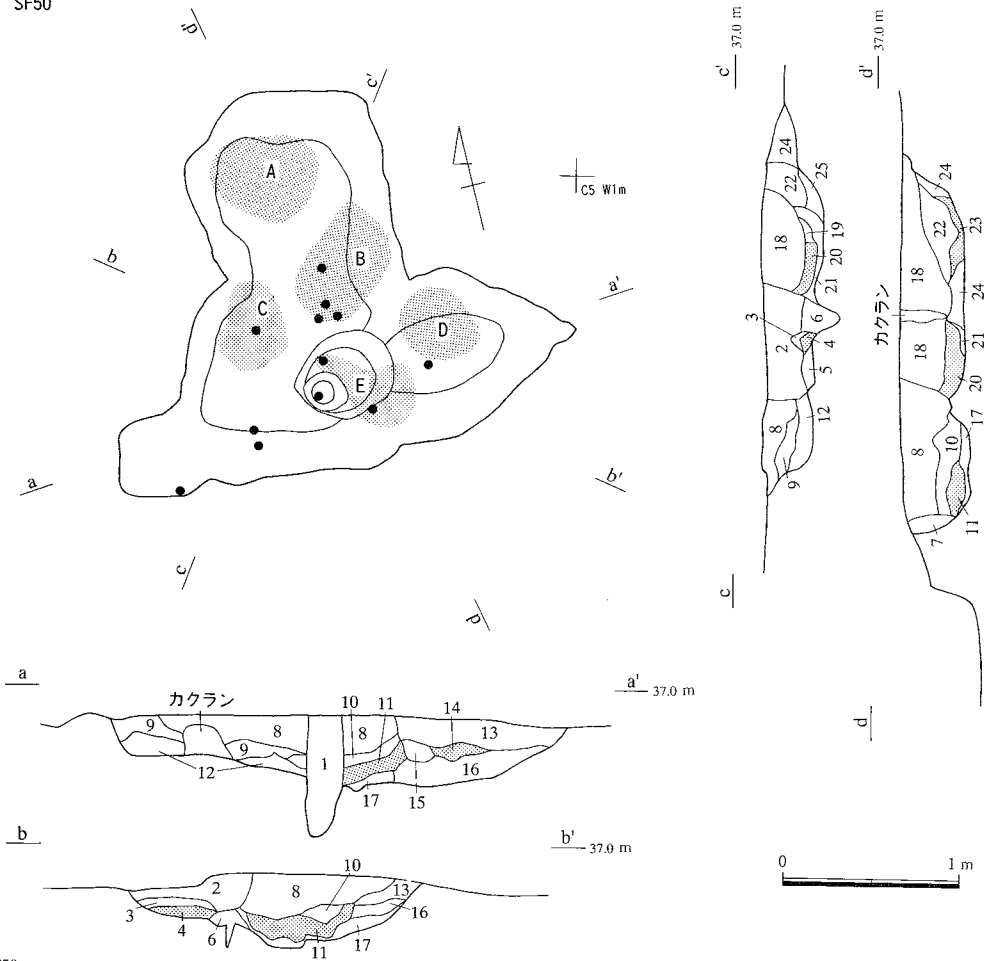
土坑・ピット(図24~27) 調査区南西側に偏り、小ピットが23基確認された。規則的な配置をしているものは特になく、遺物の出土もなかった。覆土の状態から縄文時代のものと推定される。

SX44(図28) C4・D4グリッドに位置する。南北630cm×東西275cmの範囲で不整形を呈する。坑底は凸凹が激しく、覆土の堆積状態等から倒木痕と考えられる。

遺物の出土はなかった。

遺構外出土遺物(図29・30) 遺構外出土した遺物は土器片20点、石鏃1点、礫13点が出土している。土器は小片が多く全体の様相がわかるものは少ない。これらの多くは調査区南東側、本遺跡基本層序Ⅱ層中から出土している。土器の年代は早期前葉撚糸文系土器が最も多く、条痕文系土器がこれに次いでいる。その他には、中期初頭、中期後半の土器が1点ずつ出土している。また、草創期の土器と思われるものも検出された。1~3は早期前葉、4は不明、5は中期初頭である。また、図30の石鏃は橙褐色を呈している。(佐藤 律子)

SF50



SF50

- 1: 黒褐色土 (ローム粒少含)
- 2: 茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
- 3: 橙褐色土 (焼土粒中合)
- 4: 赤褐色土 (純焼土層)
- 5: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)
- 6: 褐色土 (ローム粒極多 焼土粒少含)
- 7: 褐色土 (ローム粒中 焼土粒微含)
- 8: 暗茶褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 9: 茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
- 10: 茶褐色土 (焼土粒中 ローム粒少含)
- 11: 赤褐色土 (焼土粒多含)
- 12: 褐色土 (ほぼロームで構成)
- 13: 暗褐色土 (ローム粒中 焼土粒少含)
- 14: 橙褐色土 (焼土粒極多 焼土ブロック少含)
- 15: 暗茶褐色土 (ローム粒多 焼土粒微含)
- 16: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)
- 17: 褐色土 (被熱ローム層)
- 18: 暗褐色土 (ローム粒 焼土粒少含)
- 19: 橙褐色土 (焼土粒中 ローム粒少含)
- 20: 赤褐色土 (焼土粒極多 ローム粒・焼土ブロック少含)
- 21: 褐色土 (被熱ローム層)
- 22: 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
- 23: 橙褐色土 (焼土粒多含)
- 24: 褐色土 (被熱ローム層)
- 25: 褐色土 (ほぼロームで構成 焼土粒微含)



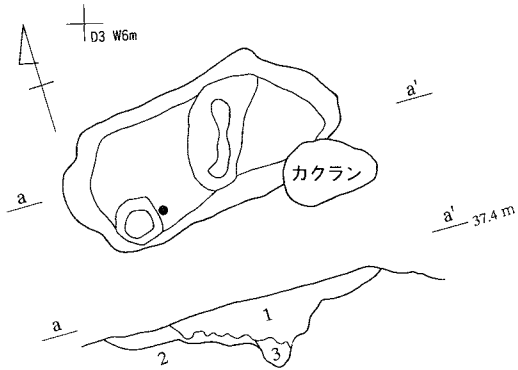
図23 SF50



表11 SF50出土土器観察表

NO	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	胴部			外面に擦痕 PL.11-5

SK07



SK07

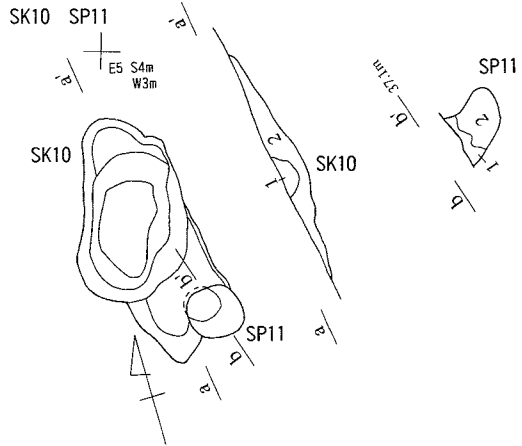
- 1: 暗茶褐色土 (ローム粒中 焼土粒・炭化物粒微含)
- 2: 黄褐色土 (ほぼロームで構成)
- 3: 茶褐色土 (ローム粒中含)

SK10

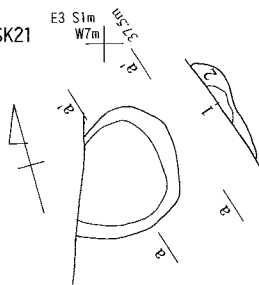
- 1: 暗褐色土 (ローム粒少 炭化物粒微含)
- 2: 茶褐色土 (ローム粒多 黒色土粒少含)

SP11

- 1: 暗褐色土 (ローム粒微含)
- 2: 暗褐色土 (ローム粒少 炭化物粒微含)



SK21



SK21

- 1: 暗褐色土 (ローム粒中 黒色スコリア少含)
- 2: 褐色土 (ローム粒多 黒色スコリア微含)

SK25

- 1: 暗茶褐色土 (ローム粒中 黒色スコリア微含)
- 2: 黄褐色土 (ほぼロームで構成 赤色スコリア微含)

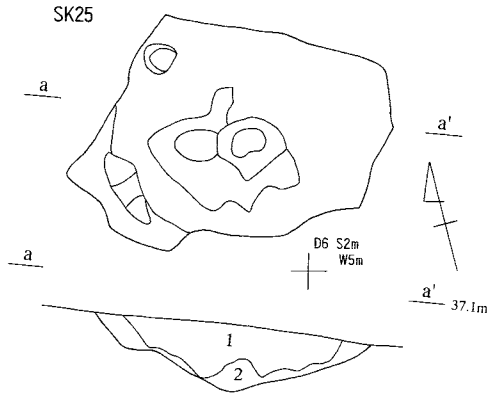


図24 土坑(1) SK07, SK10, SP11, SK21, SK25

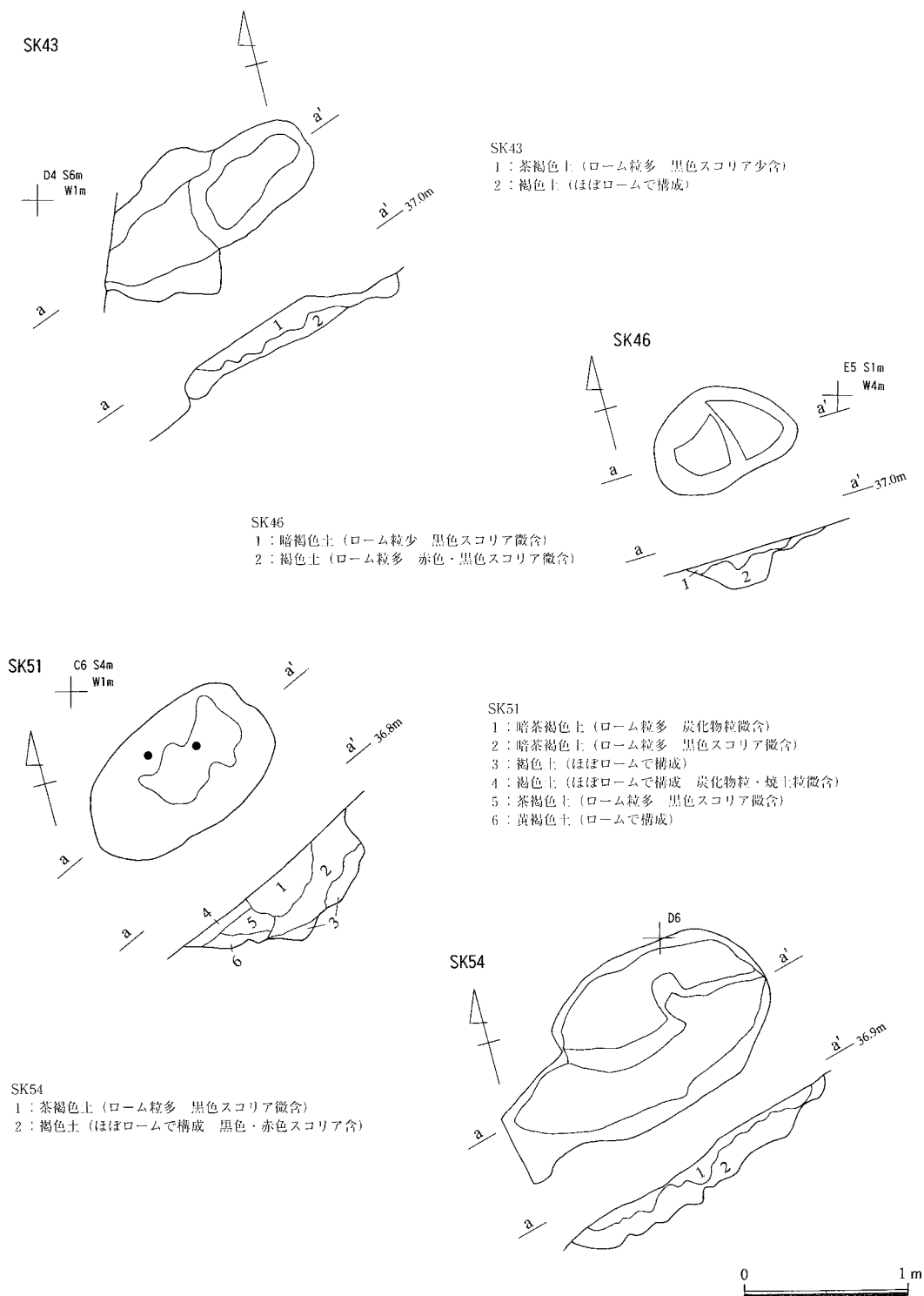


図25 土坑(2) SK43, SK46, SK51, SK54

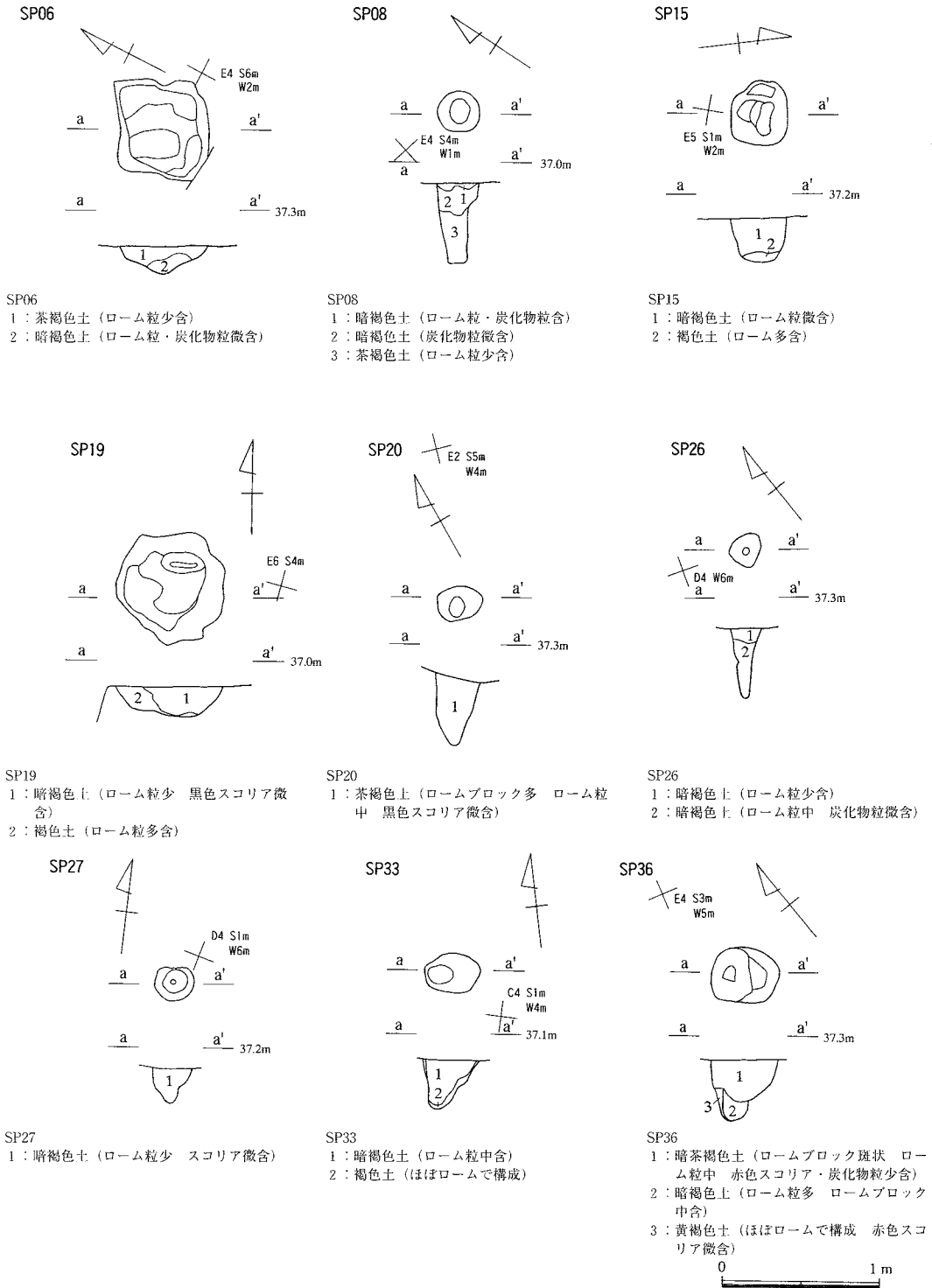


図26 ピット (1) SP06, SP08, SP15, SP19, SP20, SP26, SP27, SP33, SP36

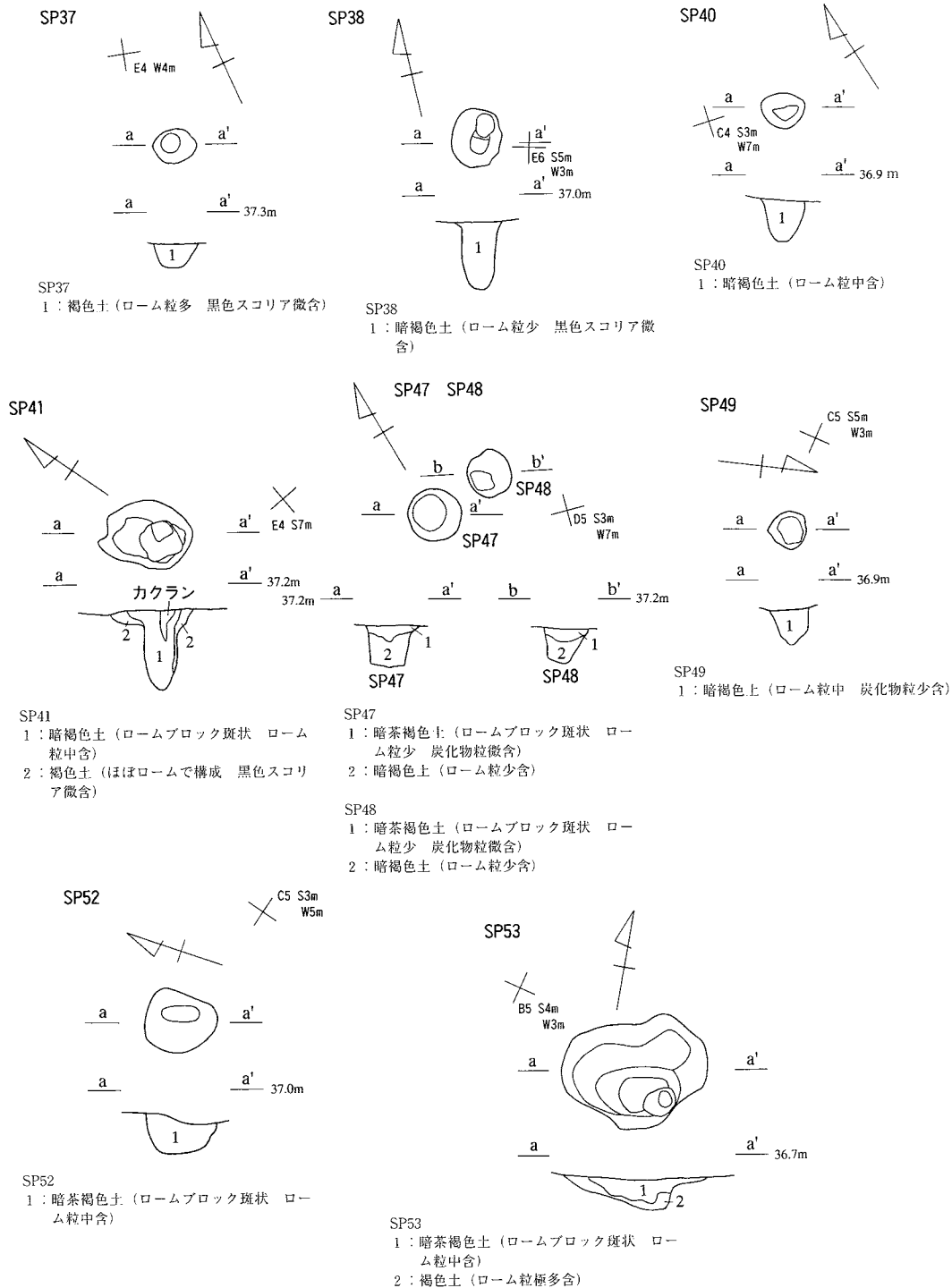
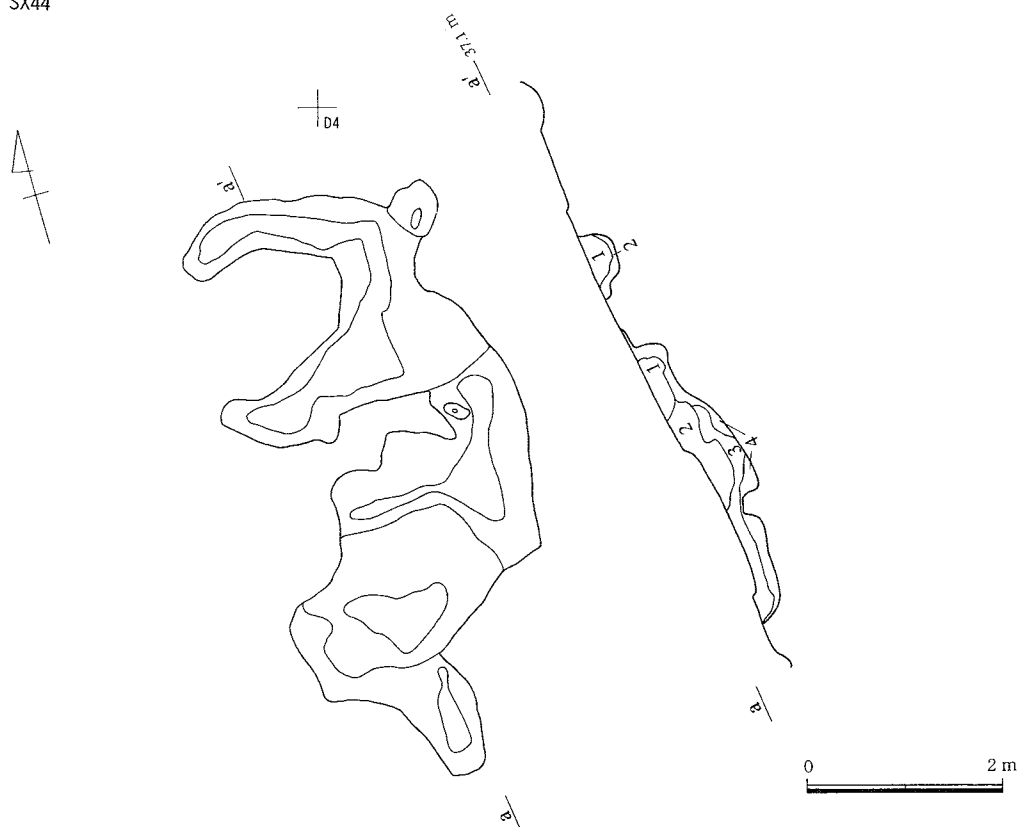


図27 ピット (2) SP37, SP38, SP40, SP41, SP47, SP48, SP49, SP52, SP53

SX44



SX44

- 1: 黒褐色土 (ローム粒少含)
- 2: 茶褐色土 (ローム粒少 黒色スコリア・ロームブロック微含)
- 3: 暗褐色土 (ローム粒多 ロームブロック少含)
- 4: 黄褐色土 (ほぼロームで構成)



図28 倒木痕 (SX44)

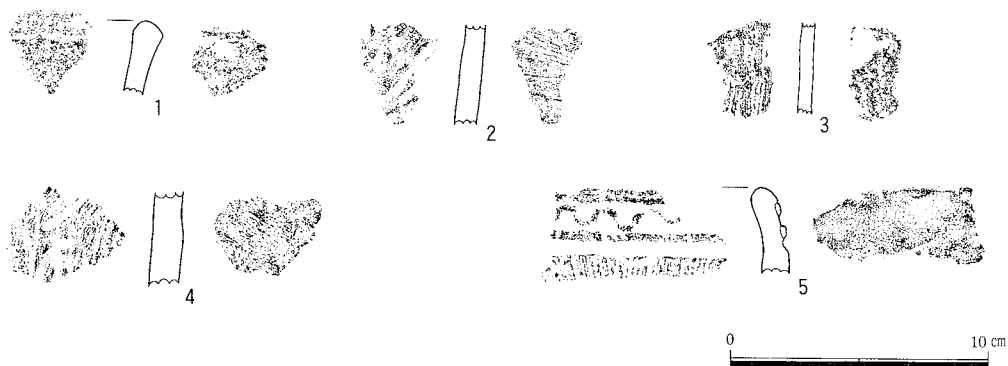


図29 遺構外出土土器

表12 遺構外出土土器観察表

NO	器形	部位	胎土	文様	備考
1	深鉢形土器	口縁部	緻密		B-3 Grid PL.12-3
2	深鉢形土器	胴部	繊維の痕跡有		E-5 Grid PL.12-4
3	深鉢形土器	胴部	白色粒子を含む	擦糸文	F-5 Grid PL.12-5
4	深鉢形土器	胴部			D-6 Grid PL.12-6
5	深鉢形土器	口縁部	砂粒を含む	隆起帯, 沈線	B-3 Grid PL.12-7

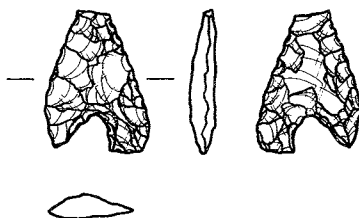


図30 遺構外出土石器 (S = 1/1)

表13 遺構外出土石器観察表

No	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
1	石鏃	珪岩	1.8	1.3	0.3	C-5 Grid PL.9-3	

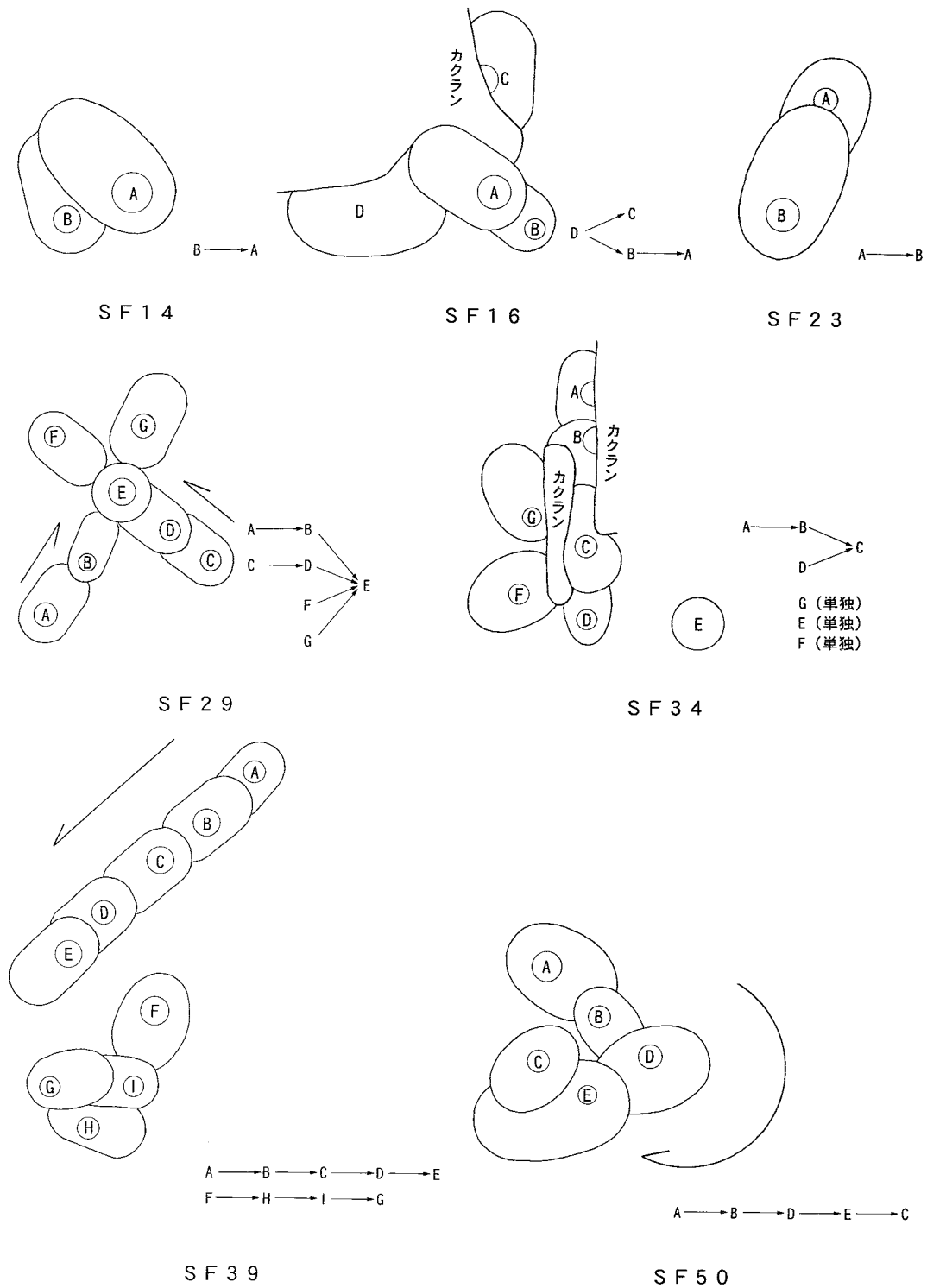


図31 炉穴の重複状況 (模式図)

Ⅵ 歴史時代

歴史時代の遺構として、平安時代の火葬墓 1 基、近世～近代の溝 2 基、土坑 2 基、ピット 1 基が検出された。

1. 平安時代

SK03（図32，表14） E5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径84cm×短径74cm，確認面からの深さは最大60cmを測る。

土坑には、土師器の甕が1点出土した。甕は、中心よりやや北側、坑底から約6cm浮いて、正位の状態で確認された。甕内からは炭化物を多く含む暗褐色土とともに骨粉と思われる白色粒が多量に検出され、火葬蔵骨器と考えられる。また、墓壙坑底付近は炭化物が充填されていた。甕のほかに蓋や副葬品などは検出されなかった。

出土した蔵骨器は、口縁部が「コ」の字状を呈する、いわゆる武蔵型土師器甕である。胴部上位に最大径を有し、底部は小さい。調整は外面の胴部上位は横方向、中位から下位には斜方向から縦方向のヘラ削りが施されている。頸部と口縁部は横方向にナデられている。

遺構の年代は蔵骨器から9世紀後半と考えられる。

（佐藤 律子）

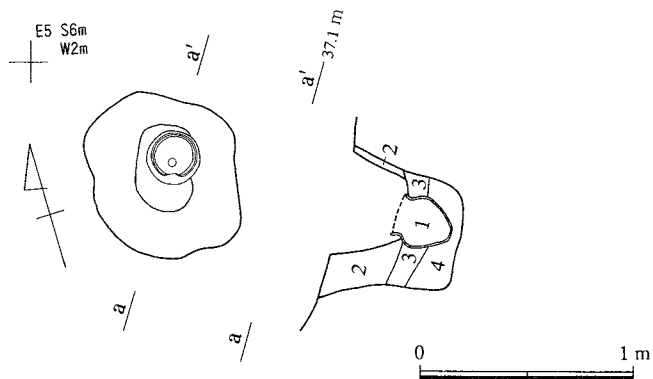
火葬墓について

本遺跡の周辺地域では、目黒区内の東光寺裏山遺跡、新宿区戸山3丁目では単独で、大田区馬込北久保遺跡、馬込仲井遺跡、久原小学校内遺跡、世田谷区諏訪山遺跡では数基の火葬墓が検出されている。蔵骨器はすべて9世紀の土師器甕で、東光寺裏山遺跡例を除き、口縁を下にした逆位の状態で確認された。甕の周辺は本例同様、木炭や灰が充填されているものが多く、久原小学校遺跡と戸山3丁目では須恵器杯の蓋が検出されている。副葬品としては久原小学校遺跡で釵子、諏訪山遺跡では鉄板が埋納されている。

SK03では単独で検出され、蔵骨器は正位に置かれていた。須恵器蓋や副葬品などは検出されなかったなど、東光寺裏山遺跡例と近似している。また、地理的にも近い。これまで検出された火葬墓の分布は東京都内では多摩川流域に偏在する。目黒川流域では本遺跡の火葬墓が初めての検出例である。

（佐藤 律子）

SK03



SK03

- 1: 暗褐色土 (骨粉極多 炭化物・木片多含)
- 2: 褐色土 (ローム粒極多 ロームブロック多 炭化物粒少含)
- 3: 茶褐色土 (ローム粒極多 炭化物粒中含)
- 4: 炭化物層 (炭化物で構成)

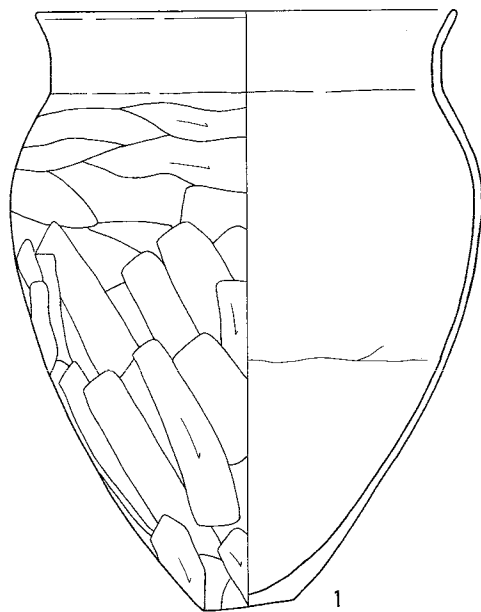


図32 SK03

表14 SK03出土土師器観察表

No	胎質	分類	法量(cm)			備考
			口径(a)	底径(b)	器高(c)	
1	土師器	甕	19.6	4.0	28.0	口縁部横ナテ胴部削り武蔵型土師器甕 PL.8

2. 近世～近代

SD01・02（図33） SD01・02は調査区の南西隅D6・E6グリッドに位置している溝である。溝は南東－北西方向に軸を有し、現在の建物や区画の軸とは大きく異なっている。確認面での規模は、SD01が幅約70cm、長さ約4m、深さ40cm、SD02が幅約50cm、長さ12m、深さ40cmを計測する。覆土はSD01・SD02共にローム粒を含むさらさらの黒色土で、畑の耕作土と推定される。また、SD02は溝底には掘削あるいは溝さらい時の際についてと考えられる鋤痕が明瞭に認められた。壁はやや凹凸がみられた。

遺物はSD01・SD02共に出土していない。

調査区壁面の土層堆積状況の観察からSD01・02の切り込み面は本遺構の確認面よりやや高い位置にあったと推定され、遺構の形態、覆土の状況より畑の区画溝であろうと考えられる。SD01とSD02が同時期に存在したかは不明であるが、同時期に存在したものであれば、両溝間は道であった可能性もあるだろう。ただ、切り込み面付近での精査では硬化面等は確認できなかった。

現在の建物や区画軸は、明治7(1874)年4月に設立した内務省農事修学場の農場として利用されて以降、変化しておらず、おそらく本遺構はそれ以前の畑の区画溝であろうと推定している。

SP18（図34, 表15） 本遺構は確認面でわずかに確認されたのみで、全体の様子は窺えなかった。平面形は長方形を呈しており、東西方向に主軸を有する。規模は長辺約50cm、短辺30cm、深さは3cmを計る。遺構の中央には底径12cmのかわらけが正位で確認された。上部が削平されていたため断定はできないが胞衣皿である可能性もあろう。年代は現在の建物の主軸と一致していることから近代以降のものであろうと推定できる。

遺物はかわらけが1点出土している。これは胎土、成形が江戸遺跡で出土するかわらけに近似し、底部は左回転糸切り離し痕が観察できる。

SK12（図9, 35, 表16） SK12は調査区の北東隅B1・C1グリッドに位置している。遺構は北半が調査区域外にあるため全体の様子は窺えなかった。規模は東西4.6m、南北1.8m、深さは1mである。覆土はロームブロックが多く混じる黒色土で、遺物が多く含まれていた。

遺物

1, 2はいわゆる統制陶器である。1は瀬戸・美濃系の粗製の染付磁器碗で、ゴム版で文様が施されている。昭和の10年代にゴム版が主文様の装飾技法として使用されていたことがわかる資料であろう。高台裏には型で「岐101」が浮文されている。「岐」は岐阜県輸出陶磁器工業組合連合会、101番は西南部陶磁器工業組合に所属する笠原町の各務甚三郎の窯屋である¹⁾。2は瀬戸・美濃系の染付磁器碗である。文様は手描きで、呉須は三種の濃淡、花には円子、竹の節や葉脈にはイッチンを使用している。高台裏の「品155」はゴム版が用いられている。「品」は品野陶磁器

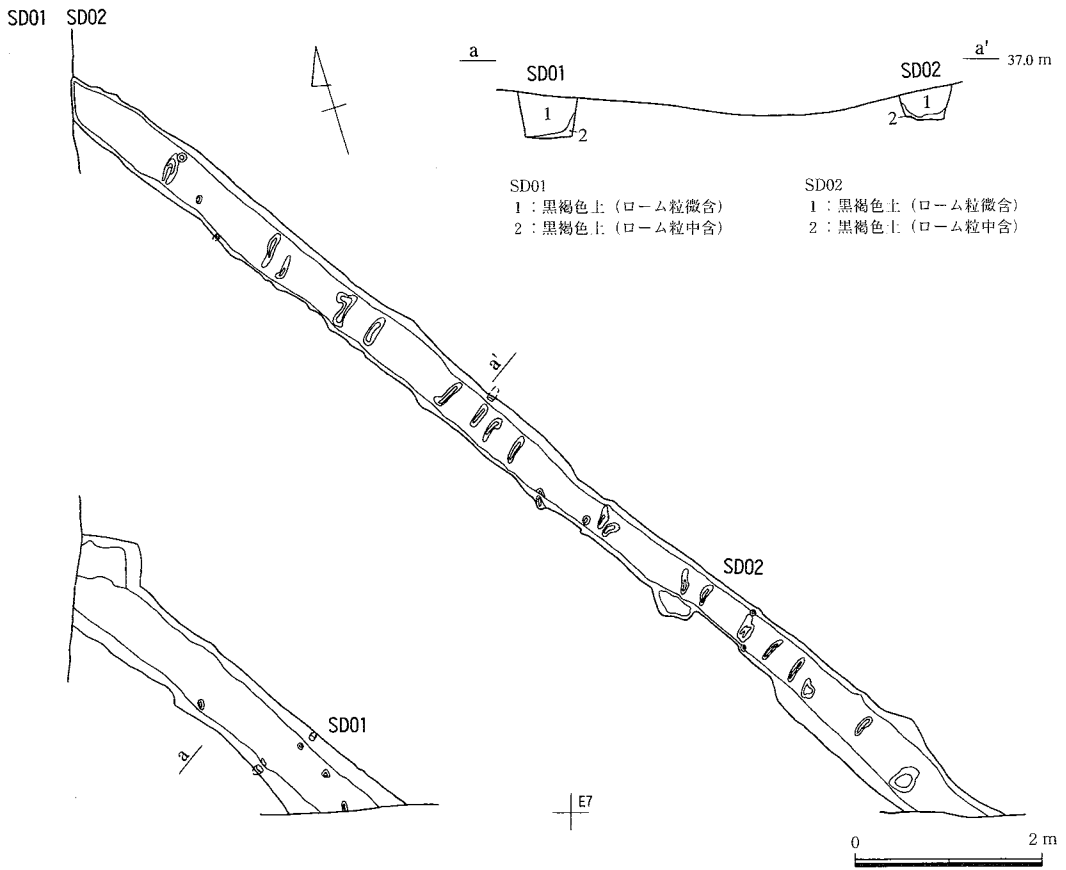


図33 SD01, SD02

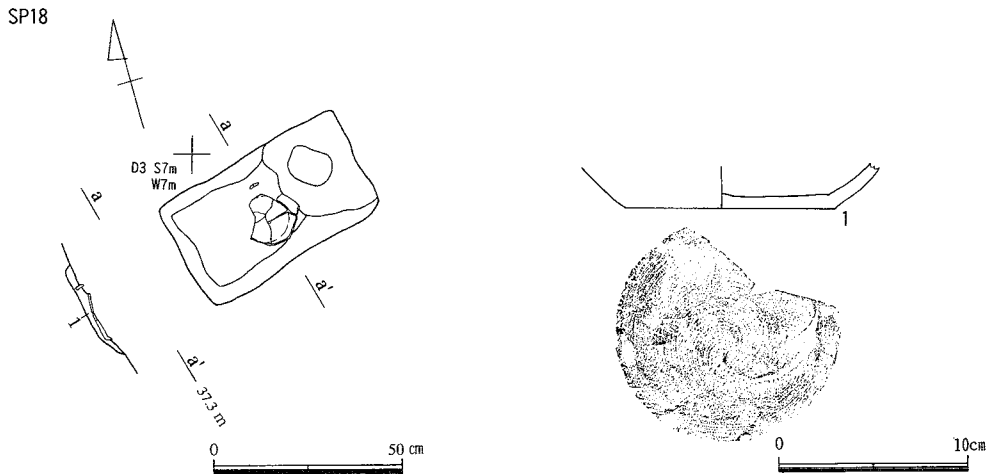


図34 SP18

表15 SP18出土土器観察表

No	胎質	分類	法量(cm)			備考
			口径(a)	底径(b)	器高(c)	
1	土器	かわらけ		12.0		左回転系切り離し痕

工業組合で、155番の窯屋は不明である。3は瀬戸・美濃系の色絵磁器碗である。ゴム版で鈴の縁を描き、その中に赤、青、黄の絵具で上絵付をしている。絵柄、分量から子供用と推定される。4は九谷系の色絵磁器碗である。腰部の黒色絵具による圏線以上には、薄黄色の地を貼り付け、四方襷は黒色、菊花は赤絵具で輪郭をとった後、それぞれ紫、黄絵具で上絵付を施している。口唇部には金で口鏤を回している。銘は赤絵具で描かれている。5～7は瀬戸・美濃系磁器小坏である。5は白磁である。6は染付で、ゴム版（鳥）と手描き（列点）を併用して文様を描いている。7は器面には鉄釉、見込み色絵である。器面体部下半には「勇」字の陰刻がされている。見込みには「…那事变記念」と上絵付されている。「…那事变記念」は昭和12(1937)年廬溝橋事件が発端となった日華事变のことであろう。これは鉄兜形の小坏であり、通常、軍隊を退役する際に記念品として属していた部隊を金文字などで書き、贈られるものである。桜形、銃形、飛行機形などをした高台が多く付いている。8、9は瀬戸・美濃系染付小皿である。9は一部をへこませている。竹が染付されているが、葉はイッチンで縁取られている。10～12は瀬戸・美濃系の磁器蓋である。10は急須の蓋で、酸化コバルト、円子、イッチンで花文が描かれている。11は呉須とイッチンで草花文が描かれている。12は白、赤、緑絵具および金で上絵付されている。13～15は磁器カップである。13は色絵で、赤、黄で、銘は赤絵具で上絵付されている。14は白磁で、口唇部は釉剥ぎした後、金彩を施している。底部には「日本陶器會社 RC NORITAKE NIPPON TOKI KAISHA」と酸化クロムで上絵付されている。日本陶器會社は正式名「日本陶器合名会社」で、現在の「株式会社ノリタケカンパニーリミテド」である。また、RCは「Royal Crockery（高級磁器）」の略である。底部の銘款は同社発行『ノリタケ 陶磁器の素材開発の変遷と裏印の歴史』によると明治45(1912)年以降に国内用のティーセット、コーヒーセットに使用されたものである。生産された年代については同社資料室の鈴木啓志氏より大正期の製品であろうとの御教示を得た。また、コーヒーカップやティーカップなどハンドル付きの製品は焼成時におけるハンドル方へのへたり防止のために「伏せ焼き」で焼成しており、口唇部の釉剥ぎは窯詰め法によるものであるとのことである。15は5客組である。口唇部は釉剥ぎ後、金彩している。器面は銅版で風景が染付されている。16は瀬戸・美濃系色絵磁器玩具である。団扇童子である。絵具の剥落が激しく、全体の様子は窺えないが、緑、黒、金で上絵付されている。17は灰釉陶器碗である。器面はやや白濁した灰釉に、ヘラ状工具による搔落としによって草花文が施されている。生産地は不明。18は瀬戸・美濃系色絵陶器湯呑碗である。粗い貫入のはいる白濁した釉に黒、橙、緑で草花文が上絵付されている。19はインクまたは顔料の容器と思われる、軟質磁器蓋物である。身の器面には「P.」の染付がみられる。蓋および身には赤色顔料が多量に付着している。板橋区加賀一丁目遺跡、大橋遺跡などで類例が見られる。

以上、遺物群を概観したが、「支那事变記念」や第二次大戦中の統制下に生産されていた「統制番号」のついた陶磁器などがみられ、本遺構の製品は戦時期の購入または入手していることがわかる。また、昭和29(1954)年以降爆発的に普及したジュース缶、昭和31(1956)年以降の180ml

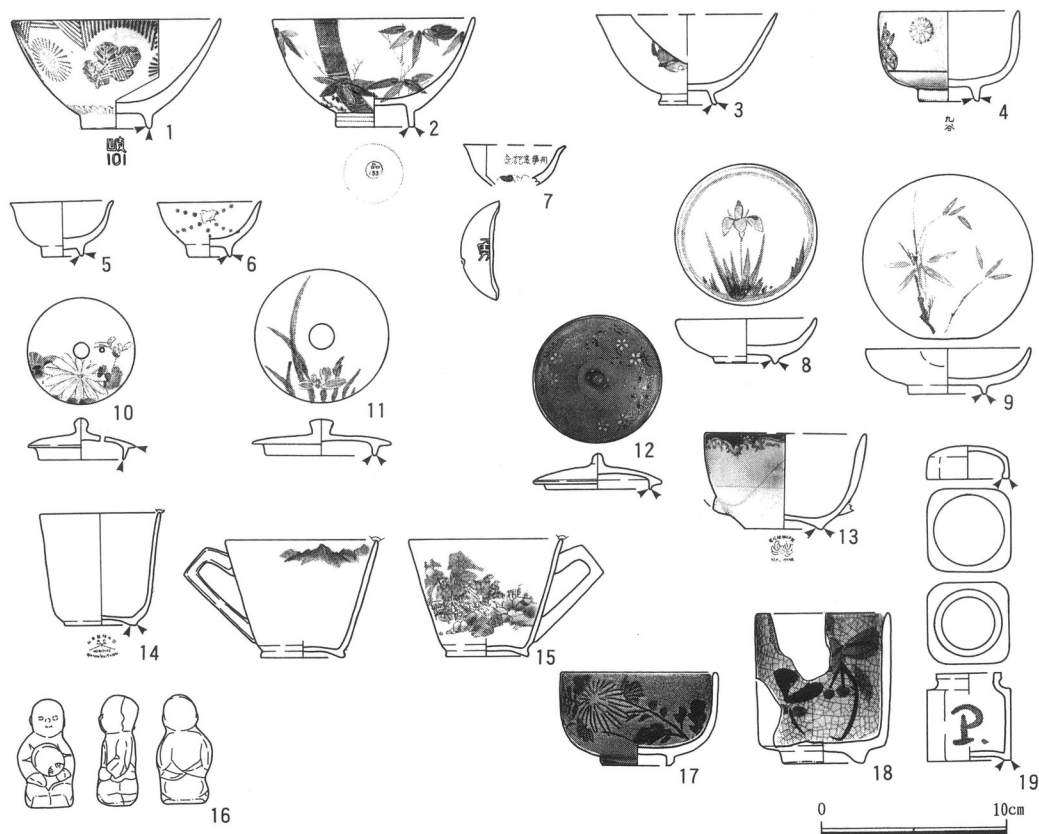


図35 SK12出土遺物

表16 SK12出土遺物観察表

No	胎質	分類	法量(cm)			備考
			口径(a)	底径(b)	器高(c)	
1	磁器	碗	11.4	3.8	5.9	西洋コバルト ゴム版 高台裏「岐101」陽刻 PL.14-1
2	磁器	碗	11.2	4.2	5.9	西洋コバルト 染付 高台裏「品155」ゴム版 PL.14-2
3	磁器	碗	9.8	3.2	4.9	色絵 上絵付
4	磁器	湯呑み	7.6	3.2	4.9	色絵 上絵付 高台裏「九谷」朱 PL.14-3
5	磁器	坏	5.5	2.2	3.0	
6	磁器	坏	5.6	2.2	3.0	西洋コバルト ゴム版
7	磁器	坏	5.6	-	-	見込み手杖「□那事変記念」 外側鉄釉「□勇」陽刻 PL.14-5 PL.14-6
8	磁器	小皿	7.6	3.2	2.4	西洋コバルト
9	磁器	小皿	9.0	4.3	2.5	西洋コバルト イッチン
10	磁器	蓋	5.8	4.4	2.3	西洋コバルト イッチン
11	磁器	蓋	7.6	6.0	2.0	染付 イッチン
12	磁器	蓋	7.0	5.6	1.9	白、赤、金、緑絵の具で上絵付
13	磁器	カップ	(8.8)	4.2	5.2	高台裏「菊花硬質磁器 KIKUHANA」 PL.14-4
14	磁器	カップ	6.5	3.8	6.1	高台裏「日本陶器会社 RC NORITAKE」 PL.14-7
15	磁器	カップ	8.3	4.6	6.4	西洋コバルト 銅板
16	磁器	人形	2.5	-	6.0	表面に緑色の絵の具が付着
17	陶器	湯呑み	8.5	3.7	5.1	掻き落とし
18	陶器	湯呑み	7.3	4.3	8.2	上絵付 高台裏銘 PL.14-8
19	陶器	蓋物	3.5	4.5	4.8	染付 外面「P.」 PL.14-9
		蓋	3.8	4.5	1.8	

規格の牛乳瓶などが出土していないことなどから、おそらく東京大学に編入される昭和24(1949)年以前に居住者が廃棄したものと推定される。

SK13 (図9, 36~38, 表17) 本遺構は調査区南端C6・D6グリッドに位置している土坑である。平面形は東西方向に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西8m、南北3.5m、深さ0.9mを計る。やや凹凸のある坑底から、壁は角度を有して立ち上がる。また、西壁には幅2mの溝が本遺構に伴って構築されており、西側に延びている。遺物は遺構の南西端付近坑底よりやや浮いた状態で多く確認されている。

遺構の性格は不明である。

遺物

1~6は瀬戸・美濃系染付磁器碗である。1は吹墨と手描き、3、5は手描き、2、4は型紙摺りで施文されている。6は外面がクロム青磁で、桐、鳳凰が上絵付されている。銘は「陶玉□製」である。陶玉園は四代加藤五助(1839~1905)が家業を継いだ文久三(1863)年以降使用されたものである。五助は瀬戸の陶工で、青磁釉上に白盛の浮上文様を描く技法や厚手平奈良茶碗などを創始した人物として知られる。7は瀬戸・美濃系染付磁器碗の蓋である。8~13は瀬戸・美濃系磁器皿である。8は染付で、口縁の一部に鉄釉が掛け分けられている。9はいわゆる壽文皿。木型打込みで、象形化された壽字が陰刻されている。10はヨーロッパ陶器の影響と思われるもので、やや軟質の磁器である。口唇部、見込みの圏線、花文は金で描かれている。目跡は畳付にピン状のものが3ヶ所認められる。11は木型打込みによる楼閣文に地呉須の濃みを染め付けている。口唇部は口鏽が施される。12、13は見込み型紙摺り、外面手描きで施文されている。14は肥前系染付磁器皿である。文様は全て手描きで施文されている。15は瀬戸・美濃系青磁皿である。青磁に酸化クロム、円子、白盛で草花文を描いている。高台内のみ透明釉で、銘は「宝玉園精製」。宝玉園は瀬戸の加藤仙八の窯屋である。16は瀬戸・美濃系色絵磁器湯呑碗である。赤、金、白土で菊花文を上絵付している。17は瀬戸・美濃系染付磁器急須である。18は瀬戸・美濃系染付磁器醤油差しである。19~21は瀬戸・美濃系磁器醤油差しの蓋と思われるものである。21は青磁である。22は瀬戸・美濃系青磁土瓶である。身、蓋とも青磁に酸化クロム、酸化コバルト、白盛で草花文を描いている。23はボンチャイナ風のプリントウエアである。生産地は不明。24は鉄釉鉢で、イッチンで草文様が描かれている。胎土、成形、施文技法などが飯能焼の特徴に類似している。25、26は土瓶である。いずれも白化粧土を塗り、上から酸化コバルトを用いて文様を描いている。26は益子の根古屋大塚窯、大西国右衛門窯などに胎土、成形、施文技法が類似している。大西窯は明治元年創業、明治中葉には廃業したとされている(伝承では明治15年)窯である。27は瀬戸・美濃系柿釉灰釉流しの甕である。28~30は江戸在地系土器である。28は焙烙で、外面にはスガが多く付着している。29は底部左回転の糸切り離しである。30は基石形土製品。31は京都系土器五徳である。「ふかくさ」と楕円圏の中に「清和堂」の刻印が押されている。32はガラス

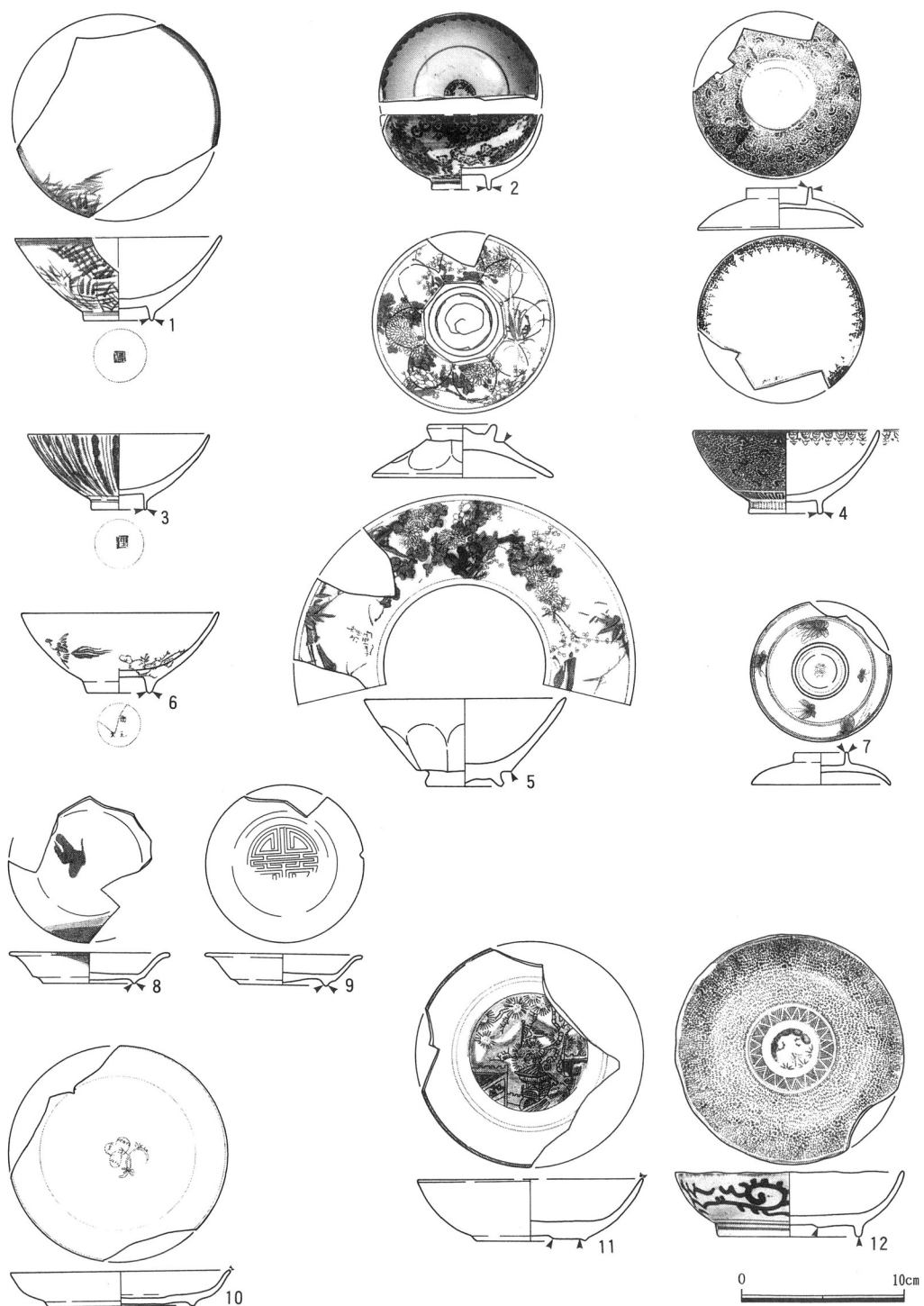


図36 SK13出土遺物(1)

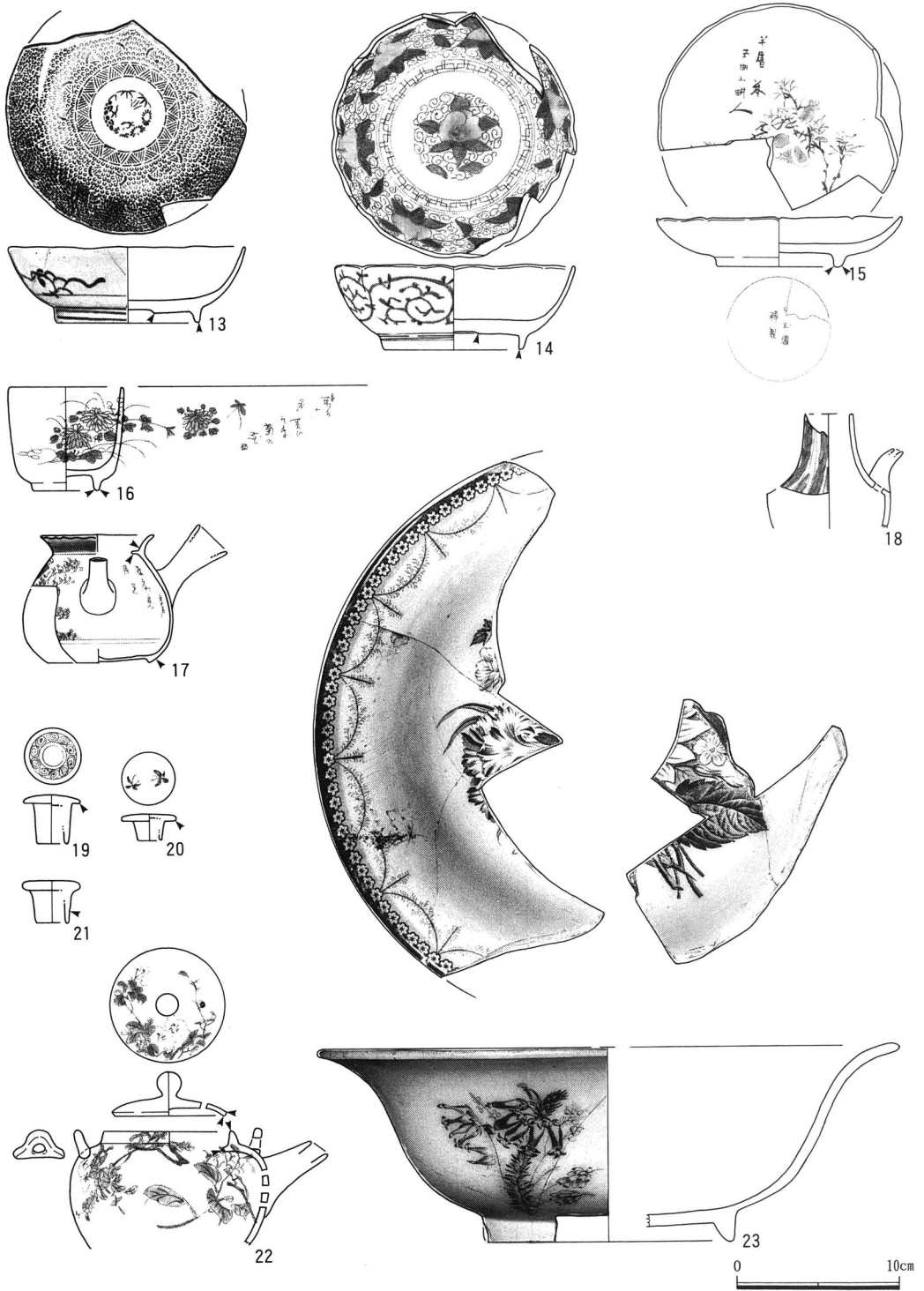


図37 SK13出土遺物（2）

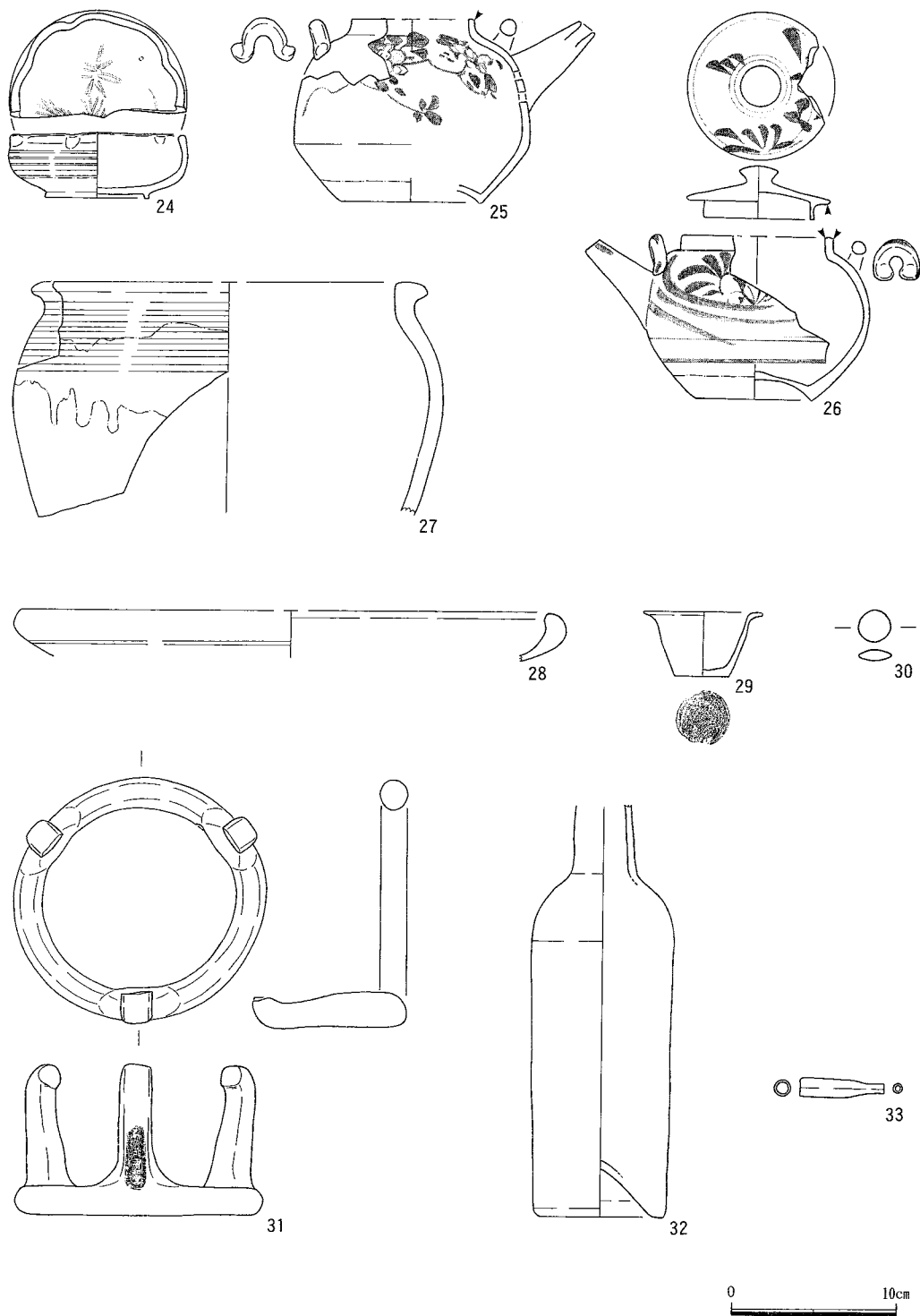


图38 SK13出土遺物(3)

表17 SK13出土遺物観察表

No	胎質	分類	法量(cm)			備考
			口径(a)	底径(b)	器高(c)	
1	磁器	碗	12.8	4.3	5.2	西洋コバルト 染付 高台裏銘有 PL.14-10
2	磁器	碗	10.0	3.6	4.1	西洋コバルト 型紙摺
3	磁器	碗	11.3	3.3	4.7	西洋コバルト 高台裏銘有 PL.14-11
4	磁器	碗蓋	11.6	4.5	5.1	西洋コバルト 型紙摺
5	磁器	碗	12.5	4.6	5.4	西洋コバルト
		蓋	11.2	4.1	3.2	
6	磁器	碗	12.2	4.0	4.9	クロム青磁 高台裏「陶玉」製銘 PL.14-13
7	磁器	蓋	8.6	3.3	2.0	西洋コバルト 染付 つまみ内銘有 PL.14-14
8	磁器	型皿	9.8	5.8	1.9	西洋コバルト 鉄釉掛け分け
9	磁器	型皿	9.7	5.2	1.9	詩文皿
10	磁器	皿	13.5	8.9	2.1	見込みに金彩で草文
11	磁器	皿	14.0	6.6	3.8	刻印に呉須
12	磁器	皿	14.0	8.5	4.0	西洋コバルト 見込み型紙摺 外面染付
13	磁器	皿	14.6	8.7	4.7	西洋コバルト 型紙摺
14	磁器	皿	14.8	8.4	5.1	染付
15	磁器	皿	15.2	7.7	3.0	クロム青磁 高台裏「室玉園精」製銘 PL.14-15
16	磁器	湯呑み	7.0	3.9	6.4	イッチン 金彩 西洋コバルト 染付
17	磁器	急須	6.8	6.2	7.9	
18	磁器	水注	(2.8)	-	(7.0)	西洋コバルト 染付
19	磁器	蓋	3.5	1.9	3.0	西洋コバルト 染付
20	磁器	蓋	3.3	1.4	1.6	西洋コバルト 染付
21	磁器	蓋	3.5	2.0	2.6	クロム青磁
22	磁器	上瓶	7.8	-	(7.6)	クロム青磁 注口用胴部穿孔7
		蓋	6.7	-	2.6	
23	陶器	皿	36.0	15.2	11.9	西洋コバルト プリントウエア
24	陶器	鉢	10.6	6.3	3.8	鉄釉
25	陶器	土瓶	7.8	8.7	11.1	白泥の上に西洋コバルト 注口用胴部穿孔3
26	陶器	土瓶	9.2	7.1	9.9	白泥の上に西洋コバルト 注口用胴部穿孔3
		蓋	8.8	7.1	3.1	
27	陶器	鏝	(24.0)	-	(14.2)	柿釉灰釉流し
28	土器	焙烙	(32.6)	-	(2.9)	
29	土器	植木鉢	7.2	3.3	3.9	底部に左回転の糸切り跡
30	土器	碁石形土製品	2.0	-	0.6	表面にスス？が付着
31	土器	五徳	15.0	-	9.1	側面に「ふかき清和堂」刻印 PL.14-16
32	ガラス	ワインボトル	-	7.6	25.5	
33	金属	煙管(吸口)	1.0	0.7	5.1	銅製

製のワイン瓶である。透明感の少ない黒色を呈し、ガラスの中には気泡が多く認められる。33は銅製のキセルの吸い口である。図示したもの以外では萬古系焼締め急須、備前系ぺこかん徳利、瀬戸・美濃系染付磁器段重、淡路系黄釉磁器蓮華、瀬戸・美濃系磁器爛徳利、笠間・益子系山水土瓶、行平鍋、瓦質火鉢、瓦質竈等が出土している。

SK13の出土遺物は組物が多いのが特徴である。3は7個体以上、4は蓋が10個体、身が5個体以上、8は2個体以上、9は11個体以上、19は2個体、20は2個体、21は2個体、26が6個体確認されている。年代的には後述するように遅くとも明治20年代に下限が押さえられる資料であると推定される。該期の地図に明瞭な線引きがないので判然としないが、当時は農学校に隣接した農家の耕作地であった可能性が高い。しかし、遺物群には被熱もなく、また、該期の農家の一般的な生活什器の中に当然存在すべき灯明具、搦鉢、仏神具、玩具などの器種が欠落していることが指摘でき、農家の日常的な廃棄行為の結果とは言い難い。特に碗や醬油差しなど飲・食の饗膳具類が多いのは、農学校で使用されたものを境界付近に廃棄した可能性が高い。

年代的位置づけについて考えてみたい。明治10年下限と考えている東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院給水設備棟地点AL37-1や明治10年代の廃棄と推定している御殿下記念館地点7号遺構との比較をしてみると、SK13には例えば3の蕎麦手茶碗、9の壽文皿、31の五徳、淡路系磁器蓮華など両遺構と同様のものがみられる。しかし、両者にはAL37-1には型紙摺りや銅版転写の製品はみられないが、7号遺構では銅版転写はみられないものの型紙摺りが認められる等の相違があり、SK13は7号遺構の様相に近似している。美濃では型紙摺りは明治15年、銅版転写は明治20年から開始されたとされており、両者の有無から、本遺構の遺物群の廃棄年代は明治10年代後半～20年代の前半であると考えてよいであろう。

また、本遺跡からも出土しているが、幕末から近代にかけて流行した「〇〇軒」、「〇〇堂」、「〇〇園」などの雅号や屋号が書かれた遺物が見られ、その中には著名な陶工（窯屋）の製品も多く見られる。以下、遺跡で確認されている瀬戸・美濃の主な陶工の号を列記してみた。

号	陶工	出土地点（銘款）
清泉舎	加藤重輔	
陶玉園，清陶園	加藤五助	東大数理SK13（陶玉園製）
春水軒	加藤才兵衛	
楽志園	加藤吉兵衛	
奇陶軒，榊山	川本榊吉	東大御殿下7号（奇陶軒榊吉製）
真陶園，山半	川本半助	東大御殿下7号（大日本半介製），紀尾井町SR22（山半造）
清榮軒	加藤繁十	駒込鰻縄手御先手組91号遺構（清榮軒繁十）
宝玉園	加藤仙八	東大数理SK13（宝玉園精製）
早梅堂	加藤善治	
友玉園	加藤友太郎	
陶楽園	加藤空左衛門	
還情園，池紋	加藤紋右衛門	
白雲堂	加藤周兵衛	
菱 勘	加藤勘四郎	
清美堂，青美堂	加藤廉吉	
篁居園	高島徳松	

（堀内 秀樹）

註

- 1) 桃井 勝氏からご教示。

Ⅶ 研究

1, 東京大学駒場構内遺跡数理学研究科Ⅱ期棟地点の炉穴について

佐藤 律子

はじめに

本遺跡から、13基の炉穴が検出されている。炉穴は縄文時代早期に関東地方を中心に確認される遺構である¹⁾。その性格は主に火を用いた食物調理に関連する施設と考えられている。炉穴は単独で検出されることもあるが、2基以上の炉穴が重複した状態で確認される場合も多い。本遺跡でも重複した炉穴が8基、単独の炉穴が5基検出されている。炉穴の重複するという現象は頻繁な移動の結果生じたものであるか、定住化への傾向を示すものであるかは評価が分かれるところである。ここでは炉穴の形態や重複関係の分析を通して、該期の定住について考えたことを記してみたい。

1. 炉穴の形態

炉穴は基本的に炉部と足場を有する楕円形の掘り込みと理解されている（飛ノ台貝塚調査分科会1939）。足場は人の作業場所と考えられるが、炉部と僅かなスペースのみで、足場を持たないものを炉穴に含めるかどうかについては定説化されるにいたっていない。本遺跡でも、炉部の反対側に人の作業場としては狭すぎるスペースしか持たないものも多く検出されている。それらにも炉穴の特徴の一つである作り替え・重複が見られることから炉穴の中に含まれると考えた。

炉穴は簡単な上屋施設があったとしても基本的に屋外炉と認識されている。屋外の地表面で火を焚くと風の影響を受けるが、炉穴のように一段低い穴の中で焚くと風に熱を奪われることなく、効率よく熱を維持・上昇でき、また火力のコントロールがしやすいなどの利点がある。種田氏が指摘するように（種田1972）縄文早期は石器の種類や出土量の増加などから生活の改良・発展があったと考えられる。調理を中心として火の使用方法も多角化したと推察され、炉穴が作られるようになったと考えられる。

本遺跡の炉穴の形態には様々なバリエーションが認められ、以下のように分類できる。

I類：平面形が長楕円形で、炉部と足場を有する炉穴。

II類：平面形が楕円形で、片側よりに炉部を配する炉穴。

III類：平面形は円形に近く、炉部のみで足場を持たない炉穴²⁾。

IV類：Iに煙道を有するもの。

本遺跡で確認された炉穴のうち、I類はSF04, SF14A, SF16A, SF23B, SF29G, SF50E, II類はSF17, SF24, SF34B・C・F・G, III類はSF31A・B, SF34E, SF42, IV類はSF14Aが該

当する。

I類は、炉部の反対側に人間の作業場と考えられる足場を有するものである。本遺跡で検出例が一番多く、重複した状態で確認されるものが多い。作業場所が設置されているため、燃料の補充や焼土の掻き出しなどがしやすく、長時間及び複数回の使用に対応できる構造である。山本氏と森氏は足場を持つ炉穴は、住居としての機能をもつと指摘している（山本1979, 森1982）。住居そのものであったかどうかは不明だが、長時間・複数回の使用に耐えることから、調理の他に暖房や照明など様々な目的で使われたと考えられる。

II・III類は、炉部の他に作業場所としては狭すぎるスペースしかもたない、あるいは完全に足場をもたないものである。SF34を除き、単独で検出されている。作業場がないということは長時間の使用には不向きだが、作るときの労力が少なくすむという利点がある。

IV類は、煙道を有する炉穴であるが、本遺跡においてIVの可能性が考えられる炉穴はSF14A 1基のみなので検討するには事例が少なすぎ、今回の分析の対象外とした。

炉穴の形態は、足場をもたないものから足場を持つもの、再び足場を持たないものへと変遷をたどることが指摘されている（上田1990）。本遺跡においても、単独で検出され、短期間の使用と考えられるII・III類から、重複して検出され、使用頻度が高かったと考えられるI・IV類になり、使用頻度が下がり、再び容易に作れるII・III類へとという変遷をたどったことが推察される。

炉穴が衰退する理由は堅穴住居との関係が考えられる。住居や住居内の炉が普及することにより、炉穴の機能の一部は住居内の炉にとって代われ、炉穴の使用頻度は低くなる。したがって、長期間対応できる炉穴を構築する必要が減少し、まず足場がなくなり、次いで炉穴自体も消滅したと推察される。

2. 燃焼部の状態

本遺跡における炉穴は、燃焼部の焼土および火床の状態からは図39に示した通り4つに分類することができる。

α 類：焼土はブロック状に厚く堆積し、下の層が被熱によって硬化しているもの。

β 類：焼土の堆積は α 類ほど顕著ではないが、下の層は被熱によって硬化しているもの。

γ 類：焼土はブロック状に厚く堆積するが、下の層の硬化がそれほど顕著ではないもの。

δ 類：焼土の堆積、下層の硬化とも顕著ではないもの。

焼土そのものは掻き出しが行われたことも考えられるので²¹、燃焼部の使用回数は下層の被熱状況がもっとも反映されると考えられる。したがって、焼土ブロックと硬化ロームが検出された α が一番多く使用され、 β 、 γ 、 δ の順に使用回数が少なくなると推測される。これを炉穴の形態と対応させると α ・ β に足場付の炉穴（I類）が多く、 δ に足場なしの炉穴（II・III類）が多い²²。したがって、燃焼部の状態からみても、足場を有する炉穴は足場なしの炉穴に比べて多く使用されていたと推察される。また、焼土ブロックや硬化ロームの形成にはかなり長時間火を焚

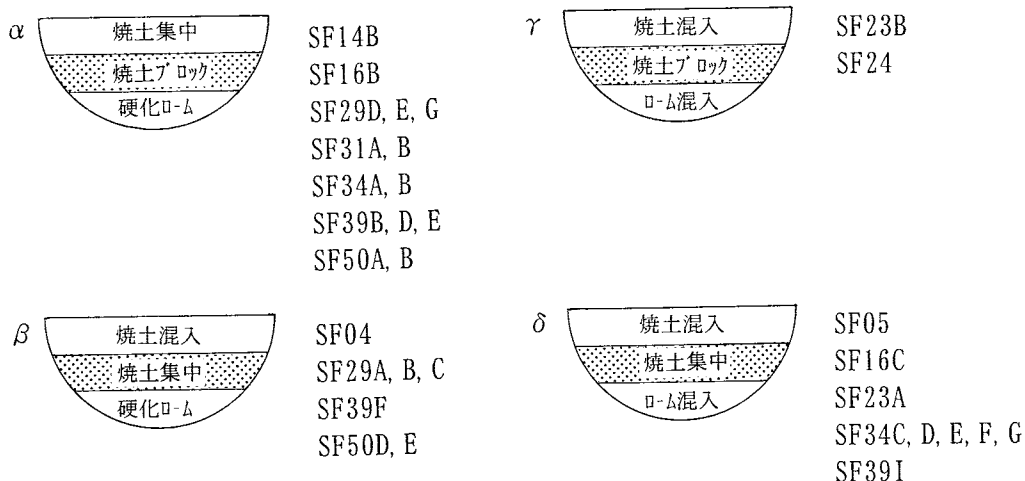


図39 燃焼部の状態

いている必要があると考えられ、 $a \cdot \beta$ はかなり長期間使用されたと考えられる。

3. 炉穴の作り替え・重複

先に述べたとおり、炉穴の特徴としていくつもの炉穴が重複して検出されるということがあげられる。これは複数の炉穴が同時に存在したのではなく、重複もしくは作り替えの結果に生じたもので、時期差があると理解できる。本遺跡でも8ヶ所の燃焼部が確認された炉穴群をはじめ、8基の重複した炉穴が検出されている。本遺跡では規則性が認められるものも多く、次のように分類できた。

a類：足場を軸にし、炉部を45°ほど振って新しい炉穴に作り替える。

b類：炉部を180°反転させて作り替える。

c類：足場を軸にし、炉部を90°ほど振って新しい炉穴に作り替える。

d類：同軸上で後退しながら作り替えを行う。

e類：他の炉穴と規則的な重複をしないもの。

本遺跡では、a類はSF14A・B、b類はSF23A・B、SF29D・F、SF34B・C、SF39F・H、c類はSF29B・D、d類はSF16A・B、SF29A・B、SF29C・D、SF34A・B、SF34C・D、SF39A・B・C、SF50A・B、e類はSF39C・D、SF39E・F、SF39I・Gと分類できる。

炉穴の作り替えにおいて「継続的」な使用と時間的断絶がある「断続的」な使用があることはすでに指摘されている（森1982，上田1985）。両者を区別することは難しいが、規則的な重複をしないものや、埋没土が流入するものなどが後者と推察され、先述した形態分類e類がこれにあ

たると考えられる。

継続的な使用において作り替えが行われた理由は、炉穴の耐用期間が過ぎたためや季節ごとの風の変化などがあげられている。

炉穴内で火を焚くと炉部の壁が焼けて崩落し、炉部に焼土が堆積したと考えられる。実際、焼土を掻きだした形跡も見られるが、炉部の壁は脆弱化し、新たに炉穴を作る必要が生じたのではないだろうか。この場合、炉部のみ作り替えればいいので、足場は再利用し、主軸をわずかに振って炉部を作り替える（a類）、旧炉穴の足場を炉部に作り替える（d類）などのパターンになると考えられる。このタイプは主軸方向が全く同じか、振れていてもわずかなので、季節風の変化が起こらない同一季節内における作り替えであろうと推察される。また、本遺跡ではこのタイプは2～3基の重複が多く確認されており、連続使用しているかの議論はあるが、同一季節内に1～2回の作り替えが必要な程度の耐久度であると推察される。

前述のように、炉穴は風の影響を受けないように地面を掘り込んだと考えられる。しかし火を焚いたときに発生する煙は風の影響を受け、風向きによっては作業を行うことが困難になる。また、関東では大きく見ると半年ごとに風向きが変わり、夏は南風、冬は北風が吹く。風向きが炉穴の主軸方向を決める要因の一つになると考えられる。新井三丁目遺跡においても同一掘り込み内で燃焼部を作り替えるθ型のものは、季節ごとの風向きの変化によるものと指摘されている（小林1988）。本遺跡では、b・cのように主軸方向の変わる炉穴の作り替えには南北方向のものが多く、季節ごとの風向きの変化が影響していたと考えられる。したがって、その炉穴が2つ以上の季節にまたがり、使用されていた可能性が強い。

断続的な使用による重複の理由は、回帰的移動の結果であると指摘されている（上田1985，森1982，小林1991）。使用の断絶の要因は、その間そこで火を使用していない、つまりその場所を離れていたと考えるのが自然であろう。また、同じ場所に重複することから移動は、同一集団による回帰的なものと考えられる。本遺跡において時間的断絶があったと考えられる炉穴は、その数も少なく、断絶後も再び継続的に使用されている。さらに、全く同じ場所に新しい炉穴を作っているということは、少なくとも旧炉穴が確認できるほどの痕跡が認められたはずであり、移動していても長期間に及ぶものではないと推察される。

4. まとめ

炉穴について今まで述べたことを再確認する。

1. 炉穴は生活の改良・発展に伴い火の使用が多角化したため作られるようになった。
2. 作り替えが行われた理由は炉穴の耐用期間が過ぎたため、季節ごとの風の変化の影響（以上継続的使用）、回帰的な移動の結果（断続的使用）などが考えられる。
3. 継続的な炉穴の作り替えの中には同一季節内に行われたものと、2つ以上の季節にまたがって行われたものがある。

4. 同一季節内の炉穴の作り替えの回数は1～2回程度と推察される。
5. 炉穴使用の断絶があったとしても長期に及ぶものではないと推察される。

以上のことから、本遺跡に見られる炉穴およびその重複は、移動はあったにしても長期に及ぶものではなく、その場における生活の継続性を示すもので、定住化の傾向を示唆していると考えられる。

最後に住居との関係について触れてみたい。小林氏は集落を炉穴と竪穴住居のセットで構成されるものとし、炉穴群のみものはキャンプサイトと分類している（小林1991）。本遺跡では、調査範囲が限られていたためかもしれないが、住居と考えられるものは検出されていない。しかし、継続的な作り替えが行われていた炉穴群であれば、炉穴が使用されている間、その周辺が生活の拠点であったと考えられ、痕跡の残りにくい住居があった可能性も考えられる。

註

- 1) 炉穴は北は青森県から南は鹿児島県まで検出されているが、依然として分布の中心は関東地方にある。
- 2) SF14AとSF17で焼土の掻き出しが行われた痕跡が認められる。
- 3) Ⅲに分類された炉穴SF31A・B, SF34E, SF42は上部がかなり削平された状態で検出されたため、欠損してしまっただが、足場を有していた可能性も考えられる。

2, 炉穴をめぐる覚え書き 一火・穴・場所一

草野 尚詩

はじめに

『何故炉穴は重複するのか。』炉穴を考察する上で最も注目すべき特徴の一つが、この“重複”だろう。これまで数ある炉穴研究においても、多くがこの問題に紙面を費やして来た。そこでは、この重複の要因を、単に炉穴の構造的特質（たとえば崩落し易い、雨水が溜まり易いなど）から考察するのみならず、それらを営む社会集団の生活形態（領域や移動も含めて）まで議論が及んでいる。その背景には、炉穴の検出される諸条件や時代的特性が、大きな要因として存在している。たとえば、炉穴の多くが、南関東の海岸丘陵上に立地し、早期後半に特異的に出現する遺構である事や、当該期の住居址検出例の少なさと裏腹に、陥穴とともに検出遺構の大多数を占めるという特徴がある。しかも、そのほとんどが重複を伴って確認されている。この事は、炉穴の重複が当時の生活形態、中でも空間利用の直接的反映である事を示唆しているからに他ならない。しかし、この重複の理由に関しては、幾つかの解釈が呈出されているものの、いまだ明解な意味付けがなされるに至っていない。そこで、この覚え書きでは、炉穴が持つ重複という特性に着目し、個々の機能や効率という合理的視点とはやや異なる“行為”や“意識”といった角度から検討したいと考えている。最終的には結果に投影された当事者の心理的側面を、読み解く事が出来ればと考えている。

1, 炉穴を読み解く三つの視点

ここで扱う炉穴の形態的定義を、「足場状の平坦部を有する掘り込みの一方にある最深部に、燃烧区域を設けた、長楕円形の土坑状遺構」と定めたい。炉穴の確認例の中には、円形のものや、焼土址のみの検出例や、足場がはっきりとしないものも含まれるが、これらの細部にはここではあえて割愛する。なぜなら、とりあえず概念的定義を典型例に限定する事で、炉穴個々の形態差や機能分類ではなく、あくまでもその“まとめり”に主眼を置いて考察を展開するのが、本稿の主旨だからである。

以下、先学の炉穴研究の成果をふまえつつ炉穴の性格を、①火（目的）、②穴（形態）、③場所（空間）の三方向から検討し、最期に重複の問題に焦点を絞り込んでいきたいと思う。その際、この三方向の視点は単なる並列ではなく、それぞれ複合的なものであることをここに明記しておきたい。

①火—目的と性格—

最初の発見以来、「炉穴は屋外調理施設である」という解釈は、今日まで引き継がれている。

(飛ノ台1939)以来、この考え方は、機能や使用目的の解釈に多少の違いはあるものの、炉穴を性格付ける基本的な視点として定着して来た(佐藤1984等)。これを可能にしたのは、常に炉穴に伴う大量の“焼土”であろう。文字通り“炉穴”(ファイアーピット)という名称もここに由来しているのは言うまでもない。

被熱し赤化した多量の焼土—これはまさにこの遺構の大きな特徴である。この焼土は、その場所における“火”の使用を意味するだけでなく、炉穴の機能を考察する上でも十分な材料を提供している。実際の検出例から見られる通り、多くの焼土は相当の厚みを持って堆積している。また、多量の焼土粒を含む土壌が焼土下及びその周囲に見られる場合も多く、更には焼土周辺の壁土の被熱が極端である事が多い。これらの検出例から炉穴は一回のみの使用を基本とする焚火的な遺構ではなく、何度も(再)利用される、長期使用型の屋外炉として解釈されて来た。(種田1972・塚田1966)しかも、燃焼部に確認される焼土は、廃棄時に残された“最終使用時”のもので、使用中に何度も“焼灰”の掻き出し行為があったと推察される例も多く見られる。(森1982)そして、これらの特徴から、新炉穴造営時には、旧炉穴から焼土を持ち込み充填する事で、新炉部を形成し、熱効率をより高めたという見方さえある(森1982)。

この様に、炉穴は、火の連続使用を機能の基本とする遺構として捉えられ、その使用目的は、屋外炉として、調理のための利用を中心に、採光、採暖、調理用の焼石の製造などの、複合的燃焼施設として理解されている(小林1991)。

しかし、この焼土の堆積、つまり炉部だけでは、炉穴の性格を語る事は出来ない。それは、“足場”と思われる平坦な台状部をそなえた掘り込み、という形態全体が、炉穴の機能を指し示しているからである。言い換えれば、“穴”であること自体が重要なのである。そこで、次にこの形態、すなわち“穴”としての炉穴を検討することにした。

②穴—形態と機能—

焼土が堆積する一方が深く、反対側が平坦な台地状になって浅くなり、穴全体が常に長楕円形を示す。この形態的特徴は個々の炉穴を考察する上で、その機能面の解釈に多大な影響を与えて来た。前節でもふれた、屋外炉、いわゆる“カマド”的機能を中心とした調理施設という類推も、この形状に負うところが大きい。その際、片側の焼土部分を炉部(燃焼部)とする事はもちろん、反対側にある台状部を足場と考える事で、穴全体を人ひとりがしゃがみこんで作業する空間を持つ構造物として捉えられている。更に、燃焼部の真上には天井部分がありそこから伸びる煙道の煙出口に土器を置き、食物の過熱に利用した、とも推測されている。(安孫子1985)又、この煙道部が確認できない炉穴も多く見られることから、燃焼部の直接利用から煙出口を用いた間接利用への変化という、構造面の時期的推移を読む見方もある(安孫子1985)。いずれにせよ、炉穴は人が中に潜って作業することが前提になっていることには相異はない。

では、なぜ“穴”なのだろうか。ここで、少し素朴に考えてみたい。炉穴が屋外炉としての機能を持つ施設であれば、これほど深く、大きな穴を掘らなくても、火は使用できたであろうし、

それこそ継続的な利用も可能であったに違いない。確かに、継続使用に耐え、風除けなどの燃焼効率を考慮すればある程度の掘り込みを持つ必然性はあっただろう。だがしかし、人が坐り込んで十分に作業ができるような、半地下式耐久構造物を構築する理由としては、それだけではややもの足りない。なぜならこれほどの穴を掘り続けるには、相当の労力を要したはずだ。だとするならば、その労力に見合うだけの、何かしら別の要因をこの“穴を掘る”こと背景に見出し得るのではないか。この点に関して、当時の自然環境から、穴を深く掘る必然性を読み取る向きもある。すなわち、縄文海進が進行して行く気候温暖化の過程で、湿潤多雨の天候が多くなり、それらの風雨から炎を守るために、地表から炉部を地下に移した、というものである。その際、季節風に対処するために燃焼部の位置を作り換えたことが、炉穴の掘り直し、つまり重複につながるという意見もある（小林1988）。更に、炉穴の内外にまま見られる小穴を手掛かりに、炉穴を被う上屋根が存在し、風雨除けの機能を果たしていたという解釈もある。（小林1991）その上、この上屋根は単なる風雨除けではなく、炉穴を中心とした住居施設としての機能も備えていたと、考える見方さえある（山本1979）。

確かに、炉穴内（特に足場部分）や炉穴周辺で上屋根の存在を推測させる小穴の検出例も数多い。だが、以上の様な環境因を含む構造的解釈をもってしても、これだけの深さを持つ“穴”を掘る理由の説明としては、まだ不十分だろう。しかも、現段階で確認できる穴の深さや形状は、当時よりかなり浅く小さいはずである（重久1986）。だとすれば、むしろ、当時の人々が何らかの理由で深く穴を掘るという行為に執着していたとは考えられはしないだろうか。要するに、穴を掘るという“行為”そのものが重要ではないか、ということである。

そこで、少し視点をかえたところで、この時期に特徴的なもう一つの遺構、いわゆる陥穴と呼ばれる土坑に着目してみたい。なぜならこの土坑は、使用目的や機能の違いによる。形態こそ異なれど人ひとりが中に潜れるような、深い穴を掘る技術と、その行為自体という点では、両者に共通性が見出しうる。しかも、構築される立地条件や、単独よりも複数のまとまりとして存在する事が多いという事実も、この二つの土坑の精神的有機性をうかがわせる材料となるからだ。

同一空間に繰り返し掘られる深い穴——。これは何を意味するのだろうか。深く掘られた穴は、いずれは自然の営為で埋まるにしても、あえて埋め戻さない限りは、継続的な利用を可能にする。しかも、その穴を掘る労力と維持の手間を考えれば、長期使用を前提に掘りこまれた事が推測できる。つまり、“穴”という構造物と、その穴が掘られる“場所”という条件には密接な関係が生じるのである。たとえば、陥穴の場合、その場所は動物という狩猟対象の行動範囲や、その生態に合わせて選択されることだろう。この選択は、その場所が動物の集まる所、あるいは移動の道筋という条件が機能するかぎり継続する。この事が、ある一定の場所に穴を掘る行為の“反復”へとつながり、結果的に多数の穴が同一の空間に存在することになる。この“反復”が指し示す事は、広域な空間移動によるものではなく、ある空間に一定の目的を持つ行為を継続的に繰り返すということである。そこでは、その反復を支えるだけの条件が備わっていなければならない。

それが陥穴の場合、狩猟対象の集まる場所となる。つまり、こちらが移動しなくても、待つてさえいれば、獲物が手に入る、という狩猟方法の採用である。そこには待つという心理的時間経過を、その場所の条件によって保証するという意識が存在する。すなわち、待つ事が移動するよりも、獲物を獲得する率が高いという、経験的確信である。この事は、広範囲を移動する労力より、一定の場所への労力集中を選択する十分な理由となる。したがって、その場所が機能する限り“獲物を獲る穴”を“掘る”という目的行為は、幾度となく反復され、結果的にはその行為の“痕跡”（陥穴）が同一の機能を持った構造物として、多数存在することになるのである。

ここで改めて炉穴に話題を引き戻すなら、言うまでもなく、この様な選択が炉穴を掘るという行為にも働いていたと考えられる。それは、言うなれば、炉穴を造営し続ける場所への執着である。場所への執着が行為への執着へと向かう時、“反復”は成立する。それは、穴を掘り続けるという行為が、その場所への思い入れと表裏の関係にある事を現している。一方、この場所への執着に対し、前にもふれた自然条件との関連から、開けた立地条件あるいは風向きを考慮した場所を選択する事が、その理由である、という見方もある（小林1991）。しかし、それだけでは説明しきれない場所への思い入れ、こだわり、すなわち執着がある事は上に述べた通りである。この点が、炉穴の重複に深く関わることは、想像に難しくないだろう。

そこで、次に、行為への執着と場所へのこだわりが織り成す反復の痕跡、すなわち炉穴の重複という現象が呈示する、意味の解説へと移りたいと思う。

③場所—空間と領域—

炉穴の重複に関する見解は、先にもふれた様に、当時の自然環境を前提にした、早期末の様相ともいえるような社会構成を想定して成される事が多い。ここでは、炉穴が主に分布する。南関東の旧海岸地帯を中心とした事例をもとに、次の様な指摘が成されている。①海進によって後退する海岸に沿った台地の縁辺部に展開、②炉穴、陥穴、住居の組み合わせと、各単独又はいずれか二種の組み合わせで展開される遺構群、③住居検出例の少なさ、及び検出住居における大多数の無炉住居と、少数の有炉住居の併存、④炉穴の重複の様相から、継続使用と断続使用を想定し、移動一回帰に伴う再利用の可能性を示唆、⑤数少ない伴出遺物（土器）から、条痕文系土器群を使用した社会集団を想定（種田1972）これらの社会的背景のもとに、個々の炉穴が重複する直接的な理由として、旧炉穴の崩落に伴う新進炉穴の造り換えが主な要因とされる。あるいは、先にもふれた、季節風への積極的対処の結果とも解釈されている（上田1985）。いずれにしても、炉穴は常に重複を伴って確認される事が多いという、特殊な事情が、色濃く投影されている。

ここでもう一度、冒頭の問いに立ち返ることになる。—炉穴はなぜ重複するのか—。そこで、まず第一に個々の重複の直接的要因である、造り換えに関して検討してみたい。炉穴の造り換えにはいくつかの方法が指摘されており、それぞれが一つの型を持つとされる。その方法として、①足場を共有して、炉部を左右いずれかにずらす。②炉部を前進し、旧炉部を埋めて足場にする。③旧炉部を埋めて後退し、更に深く掘り込んで、新炉部と足場を形成する。④旧炉部を埋めて足

場と炉部を反転あるいは180度ずらす。⑤足場、炉部とともに旧炉穴に隣接する形で新設する。などの類型がなされている（森1982）。

これらの類型は、炉穴の再構時における、省力化の手段として用いられた旧炉穴の再利用が、結果的に複雑な重複関係を生み出したものと、解釈されている。すなわち、崩落した燃焼部を廃棄して、（あるいは風向きを配慮した意図的な放棄で）末掘部分に新燃焼部を形成する一方で、足場部分を共有させる。または、崩落部分を埋め戻して足場を形成し、旧足場部分をさらに掘り込むことで、新燃焼部とする。これらは、燃焼部分の強度を保ちながらも、掘削行為の省力化を謀るためだとされる。しかし、この解釈は特に③の重複関係の十分な説明にはなっていない。なぜなら、燃焼部の強度という点では、後退する造り換えは不利になるからである。ここで当報告書の炉穴群を例に出すなら、確認された炉穴群のうち、SF16, 24, 34, 39, 50, が③の様相を顕著に示している。中でも、SF29は、旧足場部分に炉部を新設しながら、2つの方向から後退し、最後にその中央部分に一番新しい炉穴を形成するという重要関係が確認されている（図31参照）。この様な重複関係は、たしかに掘削の省力化を得られたとしても、炉部の強度という点では有効な方法とは言えず、機能性に着目した合理的解釈とはまた別の視点が必要とならざるを得ない。

ここでようやく、炉穴の継続あるいは断続的利用の問題に絡んだ、“反復”そして“場所”の意味が浮上して来る。確かに、炉穴の重複状況を、継続—断続使用の痕跡を示すものとして、集団の回帰いわゆる循環的移動の類型をそこに読み取る事も可能だろう（斎藤1991）。炉穴を取りまく空間が野営地的場所であると言われる由縁もここにある。だが、継続的な造り換えや断続的な再利用にしても、なぜ以前の炉穴と同一の空間を選択したのだろうか。確かに、炉穴を造営するに適した空間を選べば、必然的に同一の場所に辿り着く事も考えられようし、旧炉穴の一部使用は、労力の省力化にもつながるだろう。しかし、集団移動の過程で炉穴に適した場所を、他に見出す事は可能であろうし、その新たな場所に頑丈な炉穴を造ることもできたはずだ。にもかかわらず、同じ場所を何度も掘り返して、造り換えていく背景にはその“場所”への何らかの執着心とも言える意識が、集団内に存在したとは考えられないだろうか。これまでも、この点に関連して、炉穴の継続性を「家族無き血縁共同体の共同利用」（塚田1966）あるいは、「共同体内部における家族単位での継続的共同利用の場」（十菱・鈴木1984）という見方はされてきた。確かにこれら使用形態の社会構造的要因を問う視点もあるだろう。しかし、ここではその場所に継続的に炉穴を造営するという“行為の反復”こそ最も注目すべき事であると、あえて主張したい。先に、この“反復”はその場所に対する何らかの執着がなせるものと書いた。では、その執着とは一体何か。それは、おそらく空間占有意識の萌芽とも呼ぶべきものだろう。つまり、日常生活の中心となる調理施設としての空間を、半地下式の耐久構造物として築造し、それを何度も反復する。そのためには、その造営空間が、一定以上の継続性を備えた、時間意識の延長線上に捉えられなければならない。この継続的時間意識の内部では、その“場所”が一定の時間幅を持つ存

在となることで、自らの占有空間であるという意識が生じて来る。その意識の背景には、立地の好条件とともに、自らが、その“場所”を最初に選んで、利用するという土地に対する自覚的意識化と、それを自分達専用の場所にしたいという“占有（なわばり）”の発想が存在する。さらにこれらが、時間の観念を伴って強く結合したその時こそ、その“場所”は移動過程で任意に選んだ場所ではなく、必然的な選択を持って決定された場所であるという、一種の“所有観念”が成立した事を意味している。そして、この成立の意識過程に、象徴的意味合いが付与されれば、この観念はますます強固なものとなる。言い換えれば、土地に対する占有意識の萌芽とも呼べるべき表現が、この炉穴の重複に現れていると考えられるのである。この事態は、当時の居住形態とも密接に関連している。調理を中心とした昼間の活動空間としての炉穴と、炉を持たない、夜間の寝場所としての住居という、二つの異なる役割を持つ場所の併用が、当時の生活空間を構成していたことだろう。その場合当然の事ながら、炉穴を囲む空間が活動の中心に据えられ、寝るための小屋（住居）はその周囲に配置される。おそらく、生活空間を移動する事を前提とした当時の生活形態では住居の方がむしろ、可動性のある構造物であった可能性が高い。しかし、炉穴は、反復を伴う行為の連続性の結果、恒常的な施設として常にそこに在り続けるこの生活空間の分裂が後に、一カ所の機能的空間へと統合された時、生活空間としての総合的機能を備えた“住居”が完成する。この住居の完成によって、かつて活動の中心であった炉穴は姿を消し、住居を中心とした空間構成へと変容していくのであろう。更に、炉穴の変せんから、造形的な集落が形成されるまでの過程を、類推するならば、以下ような流れとしてとらえておきたい。

この時、炉穴が掘られていた場所は、構造物が存在しない機能無き空間へと変貌をとげる。その一方で、生活の中心としての住居は存在し続け、この変化の過程に、“空白域”を抱えた集落が出現する。だが、それが後に定着集落へと移項して行く時、この“何も無い空間”（遺構空白域）は、共同体の意志を結合する、“意味で満たされた空間”つまり、常に変容していく“意味”を産出し続けながら、ゆえに“空間”として存続する“場”へと変質するのである。以上を整理して言い換えるなら、定着（定住）観念の成立過程における、意識変化の途上で、炉穴の上に、観念としての上屋（家）を持ち込むことで、活動空間が結合し、いわゆる住居となる。一方、何も無い唯の場所となった炉穴は、村の家々と人々の意識を統合する“場”へと変化する。そして、村落の中心というまさに、“空間占有”及びそれを取り囲む、領域の象徴としての、“広場”（共有空間）となって、新たな意味（宗教的象徴性も含め）のもとに蘇るのである。

この様にして、炉穴の重複はその後の“空間占有意識”（土地所有観念）の拡大に大きな役割を果たしたと言えるだろう。事実、炉穴の終末とほぼ時を同じくして、いわゆる“定着”の様相が現れた集落形成が多くなる。その過途期に、炉穴を通した、土地への意識拡大、つまり執着と占有への指向が、後の定着社会を準備した、一つの要因として見ることができる。換言すれば、さしづめ、炉穴の重複とはその場所において、多大な意味を孕んで営まれた、“時代の証”であったと言えよう。

おわりに

いささか抽象論に走り過ぎたようだ。とはいえ、本稿で呈示した、時間・空間意識を媒介とした行為論的視点と、それによる行為の具体的痕跡（結果）である“場所”の分析は、遺構解釈における一つの方向性を示しうるものと考えたい。そして、それが決して実証性とは相反することなく、有効な手段たりうるか否かを検討していく事が、まずは、本稿以降の課題と心得ている。

最期に、浅学の筆者に原稿執筆の機会を与えて下さり、尚かつ様々な御指導をいただいた堀内秀樹氏、多くの資料・図版の便宜をはかって下さった、佐藤律子氏に、深く感謝の意を表します。また、武藤康弘氏、建石 徹氏には貴重な御教示をいただいた。その他関係諸氏も含め、厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 兩宮瑞夫1993「縄文時代の定住生活の出現および定住社会に関する史的諸問題」『古文化談叢』第29集
- 安孫子昭二1984「炉穴・焼土」『小山田遺跡群』Ⅳ
- 石井 寛1990「炉穴の重複に関する所見と問題提起」『山田大塚遺跡』
- 石井 寛1977「縄文社会における集団移動と地域組織」『港北ニュータウン調査研究集録』2
- 市川市教育委員会1974『美濃輪台遺跡－A地点（貝塚）』
- 市川市教育委員会1975『美濃輪台遺跡－B地点』
- 今村啓爾・石川和明1973『霧ヶ丘』
- 今村啓爾1985「縄文早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』80
- 上田 寛1990「荒川流域における「炉穴」の様相」『富士見市遺跡調査会研究紀要』6
- 小葉一夫1991「「住居形式」論からの視点 ―縄文前期の集団領域解明に向けて―」
- 桐生直彦・川口正幸1980「炉穴」『藤の台遺跡』Ⅱ
- 小林謙一1988「縄文時代早期後葉の新井三丁目遺跡」『新井三丁目遺跡』
- 小林謙一1991「縄文早期後葉の南関東における居住活動」『縄文時代』2
- 斎藤 進1991「炉穴の時代」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』10
- 佐藤明生1984「「炉穴」研究ノート」『貝塚』33
- 佐藤宏之1989「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族史 渡辺仁教授古希記念論文集』
- 佐藤宏之1990「縄文時代狩猟の民族考古学」『特集 考古学の新しい流れ』『現代思想』90' 12月号
- 十菱駿武・鈴木克彦1984「炉穴の研究」『考古風土記』第9号
- 縄文時代研究プロジェクトチーム1995「神奈川における縄文文化の変遷Ⅱ 早期後半～前期初頭期 条痕文土器花積下層末期の様相」『神奈川の考古学の諸問題Ⅱ』 神奈川埋蔵文化財センター
- 種田斉吾1972「茅山式期における炉穴の予察」『なわ』9
- 寺畑滋夫1988「炉穴」『堂ヶ谷戸遺跡』Ⅲ
- 東光寺裏山遺跡調査会1997『東光寺裏山遺跡』

第Ⅱ部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

飛ノ台貝塚調査分科会1939「下総飛ノ台貝塚調査報告」『考古学』10-4

富士見市遺跡調査会1985『貝塚山遺跡発掘調査報告書』-第2地点-

森 幸彦1982「炉穴の形態と機能に関する考察」『多聞寺前遺跡』I

山本輝久1979「炉穴について」『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15

山本輝久1992「神奈川県下における集落変遷の分析」『神奈川県埋蔵文化財センター かながわの考古学』2集

山本輝久1987「縄文社会と移動」『集団移動』論をめぐる研究の現状とその問題点について』『神奈川考古』23

3. 「統制番号」のついた陶磁器について

堀内 秀樹

東京大学駒場構内遺跡大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点SK12からは、戦争に関連する遺物が多く確認された。このなかで図35-1・2はいわゆる「統制番号」のついた陶磁器類である。「統制番号」が賦されている陶磁器を一般的に「統制陶器」と称している。しかし、この「統制番号」は正式には「生産者別標示記号」と呼ばれ、「統制陶器」は統制下において生産された防衛食、金属代替の陶磁器など、全ての陶磁器類を指すものであるから、これらの用語の使用には注意しなければならないだろう。生産地においても慣用的に「統制番号」とは称するが、「統制陶器」とは呼んでいないようである。

「統制番号」は陶磁器類の釉下、釉上に多くはゴム版などで書かれているもの、もしくは、型で浮文にされている。「岐101」や「品155」などは所属組合名とそれに所属する生産者に付けられた番号である。例えば1の「岐101」は、妻木の美濃中碗組合が母体となり、昭和5(1930)年に設立された岐阜県輸出陶磁器工業組合連合会(以下、「岐工連」と略す)の「岐」とそれに所属する「101」の番号を与えられた生産者の製品である。岐工連は、素地生産者を主体とする組合連合で、特に買い手である加工業者に対して、生産、販売、製造権、考案権の保護等の監督統制を行う機関であった。所属する組合は西南部(滝呂)陶磁器工業組合、妻木陶磁器工業組合、下石陶磁器工業組合、駄知陶磁器工業組合、土岐津陶磁器工業組合、瑞浪陶磁器工業組合、恵那陶磁器工業組合の7組織である。岐工連は後に法律改正によって、内地向けの業者をも包含する組織として「岐阜県陶磁器工業組合連合会」と改称した。番号の101番は西南部陶磁器工業組合に所属する岐阜県笠原町の各務甚三郎の窯屋である¹⁾。また、2の「品155」は昭和5年設立の品野陶磁器工業組合とそれに所属する155番を与えられた窯屋の製品ということになる。この「統制番号」の解釈についての誤認がかなり見られるようであるが、文字は組合名であって県や市町村などを表記しているものではない²⁾。また、番号は組合(組合連合会)ごとに1番からふられている。この番号は昭和16年10月に企業の整理統合を通達した「陶磁器工業整備要綱」以前に決定されていたもので、先述の岐工連では1000番以上の番号までみられる。従って、各地の史料は残っていないが、組合を越えてランダムに番号を付与していたといった事実はないと思われる。考古資料の中では管見の限り「岐」は1321(加賀一丁目遺跡)、「品」が155(東京大学駒場構内遺跡)、「波」が44(大橋遺跡)、「瀬」が788(加賀一丁目遺跡)、「相」が8(郵政省飯倉分館構内遺跡)、「有」が8(加賀一丁目遺跡)、「肥」が28(加賀一丁目遺跡)、「万」が82(加賀一丁目遺跡)などで、いずれも下記に示した昭和16年頃の日本陶磁器工業組合連合会(以下、「日陶連」と略す)の史料に記された製造業者数の範囲内である³⁾。以下の史料によると統制機関である日陶連の傘下には58組合、7038製造業者の登録がある。

○東海地区

- ・瀬戸 - 1137
- ・常滑 - 258
- ・三河陶管 - 161
- ・岐工連 - 1337 (西南部331, 妻木123, 下石159, 駄知141, 土岐津380, 瑞浪100, 恵那103)
- ・岐阜加工 - 550
- ・犬山 - 12
- ・日本顔料 - 87
- ・品野 - 251
- ・愛知陶管 - 161
- ・名古屋 - 226
- ・三重県 - 162
- ・三河土器 - 302
- ・名古屋転写 - 7

○北陸地区

- ・石川県 - 5
- ・金沢九谷 - 116
- ・江沼九谷 - 61
- ・九谷窯元 - 42
- ・能美九谷 - 291
- ・珪藻土コンロ - 12

○近畿地区

- ・関西 - 6
- ・信楽 - 170
- ・伊賀焼 - 21
- ・奈良県 - 22
- ・京都 - 586
- ・丹波 - 61
- ・神戸加工 - 90

○関東・東北

- ・会津 - 57
- ・益子 - 36
- ・横浜 - 36
- ・東京電磁気 - 16
- ・相馬 - 21
- ・平清水 - 9

○中国・四国

- ・山口陶炆器 - 21
- ・出雲陶器 - 22
- ・讃岐西部 - 140
- ・讃岐三豊 - 13
- ・伊予 - 11
- ・岡山県 - 62
- ・讃岐東部 - 50

○九州地区

- ・肥前本部 - 113 (元有田)
- ・長崎陶器 - 9
- ・折尾瀬 - 40
- ・肥前陶土 - 113
- ・東洋陶器 (単独)
- ・肥前支部 - 69 (元藤津)
- ・波佐見 - 42
- ・佐賀錦付 - 53
- ・野間焼 - 13

○その他

- ・天竜 - 27
- ・日本焼石膏 - 10
- ・沖縄 - 49

日陶連は、昭和6年に愛知の常滑陶器工業組合、品野陶磁器工業組合、瀬戸陶磁器工業組合、岐工連の10組合が参加して連合会を設立した。その後、昭和8年までに、食器素地の他、タイル、磚子、衛生陶器、陶管などほとんどの素地製品を網羅した組合連合体となった。一方、素地統制の進展によって問屋（加工業者）は完成品の統制の実施を要請し、名古屋陶磁器工業組合を始めとして、瀬戸、岐阜など上絵付組合の加入をみた。

この史料に記載されている生産地は、江戸時代から窯業が経営されていた地域以外の場所や、

窯屋の数も大きく増加していると推定される場所も多くみられる。例えば、愛知陶管・三河陶管は陶・土管，常滑はタイル，名古屋，神戸，横浜は上絵加工業，信楽は火鉢・土瓶，三重や石川は萬古，九谷など近代に評価を得た窯場，会津は碓子，平清水は衛生陶器など近代の中でそれに適合した製品を生産した窯場が隆盛している様子が看取できる。上記のうち発掘調査で統制番号の確認されている組合は瀬戸（瀬，セ），常滑（常），岐工連（岐），相馬（相），肥前（肥），波佐見（波），有田（有），萬古（万）など少量にすぎず，他がどのような略号を使用しているかは不明である。

昭和13(1938)年，国家総動員法により，物資，生産，労働などあらゆる分野に統制が実施された。窯業生産もその例外ではなく，酸化コバルト，酸化クロム，唐土，鉛など顔料に使用する原料の多くを輸入品に依存し，石炭など戦時における最重要原料を多く使用している窯業は，その統制機関である日陶連が所属組合から割り当てられた供給，生産を行わざるを得なかった。こうした中で，小規模経営の統合理化や製造業者に番号をつけ，管理体制の強化をはかった。この統制番号が陶磁器につけられた年代については確認できていないが，岐阜県陶磁器工業協同組合連合会（前述の「岐阜県陶磁器工業組合連合会」を母体に戦後に設立された組合）所蔵の「生産者別表示記号」の制定は昭和16年3月となっており，日陶連の母体が岐工連であることを考えれば，他地域もそれを大きくさかのぼることはないであろう。また，昭和16年10月に政府より出された「陶磁器工業整備要綱」では生産計画とともに企業の整理統合が通達され，先に記した生産者数が約1～2割程度に整備されている¹⁾。これは「昭和16年12月末日迄に関係府県庁において具体案書を樹て，昭和17年2月末日までに実施完了せしめること」とされ，瀬戸，品野では昭和17年1月には1526工場あったものが176工場に，岐阜では2051工場あったものが190工場に整備された。したがって，これ以降の生産者別標示記号の使用は調査しなくてははいけないであろう。

この生産者別標示記号は日本が戦争による産業統制のもと義務づけた番号であるが，これとは別に終戦後，昭和23年アメリカ軍に命令によって岐阜県陶磁器工業共同連合会が賦した「工場記号番号」がある。番号は「生産者別標示番号」とほぼ同様であるが，昭和16年から23年の間に廃業または新規加入者があり，改めて番号を与えている。この「工場記号番号」が戦前のように製品に付与することを義務づけられたものかは不明である。従って，出土陶磁器類の番号が必ずしも日本の統制経済下におけるものでない可能性もある。

註

- 1) 桃井 勝1999より。
- 2) 例えば常滑陶器工業組合は常滑町の生産者のほか西浦町，鬼崎村の生産者が含まれる。
- 3) 板橋区加賀一丁目遺跡からは「岐2119」と報告されたものがあり，実見してはいないが報告を見る限りでは数字の先頭の「2」がやや細長く捻れており，「岐1119」の可能性もあると推定される。また，「有」，「万」は「有田」と「萬古」と思われるが，史料には有田は「肥前本部」，萬古は「三重」となっている。頭文字を略号

にする例が多いことを考えると「肥」は肥前支部と肥前陶土, 「三」は三河陶管と三河土器と混同するおそれがあり, 前身の組合名(肥前本部では有田陶磁器工業組合)を冠する略号を使用していたものと推定される。いずれにせよ略号については現段階で確認されている以外のものも含めて, 今後調査の必要があろう。

- 4) 時間的な順序として窯屋に統制番号が与えられた後に整備統合が行われていることから, 天内氏の「…産地名はランダムな形で現れる…」はあてはまらないであろう。

参考文献

- 天内克史1988「統制経済下における陶磁器生産の一様相」『村上徹君追悼論文集』
- 有田町史編纂委員会1985『有田町史』
- 小川 望1991「もうひとつの鈴木遺跡－小平市内の知られざる「遺跡」－」『武蔵野』69-1 武蔵野文化協会
- 小川 望1993『近世以降の鈴木遺跡特別展』近世以降の鈴木遺跡特別展実行委員会, 小平市
- 加賀一丁目遺跡調査会1995『東京都板橋区加賀一丁目(東京家政大学構内)遺跡発掘調査報告書』
- 佐賀県立九州陶磁資料館1983『佐賀県政百年記念「近代の九州陶磁」展』
- 滋賀県陶芸の森1996『企画展 明治のやきもの』
- 瀬戸市歴史民俗資料館1996『特別展 近代日本陶磁の華－シカゴ万国博覧会出品作品を中心として－』
- 瀬戸市歴史民俗資料館1997『企画展 陶磁胎七宝』
- 高木典利1996『明治の美濃陶業史』
- 竹本紀明1986「第一回「磁器の特色と歴史」」『瑞浪陶磁資料館年報』第6号
- ノリタケカンパニーリミテド1996『ノリタケ陶磁器の素材開発の変遷と裏印の歴史』
- 三井弘三1979『概説 近代陶業史』
- 瑞浪陶磁資料館1983『特別展 美濃の輸出陶磁器』
- 目黒区大橋遺跡調査会1998『目黒区大橋遺跡』
- 桃井 勝1997「工場記号番号－昭和23年岐阜県陶磁器工業共同組合員工場記号番号－」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号

参考文献

- 安孫子昭二1984「炉穴・焼土」『小山田遺跡群』Ⅳ
- 天内克史1988「統制経済下における陶磁器生産の様相」『村上徹君追悼論文集』
- 有田町史編纂委員会1985『有田町史』
- 石井 寛1990「炉穴の重複に関する所見と問題提起」『山田大塚遺跡』
- 市川市教育委員会1974『美濃輪台遺跡－A地点（貝塚）』
- 市川市教育委員会1975『美濃輪台遺跡－B地点』
- 上田 寛1990「荒川流域における「炉穴」の様相」『富士見市遺跡調査会研究紀要』6
- 加賀一丁目遺跡調査会1995『東京都板橋区加賀一丁目（東京家政大学構内）遺跡発掘調査報告書』
- 金山喜昭1984「武蔵野・相模野両台地における旧石器の礫群の研究」『神奈川考古』19
- 関東ローム研究グループ1965『関東ローム その起源と性状』
- 桐生直彦・川口正幸1980「炉穴」『藤の台遺跡』Ⅱ
- 小林謙一1988「縄文時代早期後葉の新井三丁目遺跡」『新井三丁目遺跡』
- 小林謙一1991「縄文早期後葉の南関東における居住活動」『縄文時代』2
- 斎藤 進1991「炉穴の時代」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』10
- 佐賀県立九州陶磁資料館1983『佐賀県政百年記念「近代の九州陶磁」展』
- 佐藤明生1984「「炉穴」研究ノート」『貝塚』33
- 滋賀県陶芸の森1996『企画展 明治のやきもの』
- 十菱駿武・鈴木克彦1984「炉穴の研究」『考古風土記』第9号
- 瀬戸市歴史民俗資料館1996『特別展 近代日本陶磁の華－シカゴ万国博覧会出品作品を中心として－』
- 瀬戸市歴史民俗資料館1997『企画展 陶磁胎七宝』
- 寺畑滋夫1988「炉穴」『堂ヶ谷戸遺跡』Ⅲ
- 高木典利1996『明治の美濃陶業史』
- 竹本紀明1986「第一回 「磁器の特色と歴史」」『瑞浪陶磁資料館年報』第6号
- 種田斉吾1972「茅山式期における炉穴の予祭」『なわ』9
- 東光寺裏山遺跡調査会1997『東光寺裏山遺跡』
- ワタカハ・ニリミト1996『ノリタケ陶磁器の素材開発の変遷と裏印の歴史』
- 飛ノ台貝塚調査分科会1939「下総飛ノ台貝塚調査報告」『考古学』10-4
- 東日本埋蔵文化財研究会1995『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』
- 富士見市遺跡調査会1985『貝塚山遺跡発掘調査報告書』－第2地点－
- 三井弘三1979『概説 近代陶業史』
- 瑞浪陶磁資料館1983『特別展 美濃の輸出陶磁器』
- 村田文夫・増子章二1989・90「南武蔵における古代火葬骨臓器の基礎的研究－川崎市域における事例研究をふまえて－上・下」『川崎市市民ミュージアム紀要』2・3

大橋遺跡調査会1998『目黒区大橋遺跡』

桃井 勝1997「工場記号番号－昭和23年岐阜県陶磁器工業共同組合員工場記号番号－」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号

1999「生産者別表示記号(統制番号)」『土岐津町志』史料編

森 幸彦1982「炉穴の形態と機能に関する考察」『多聞寺前遺跡』Ⅰ

山本輝久1979「炉穴について」『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15

写真図版



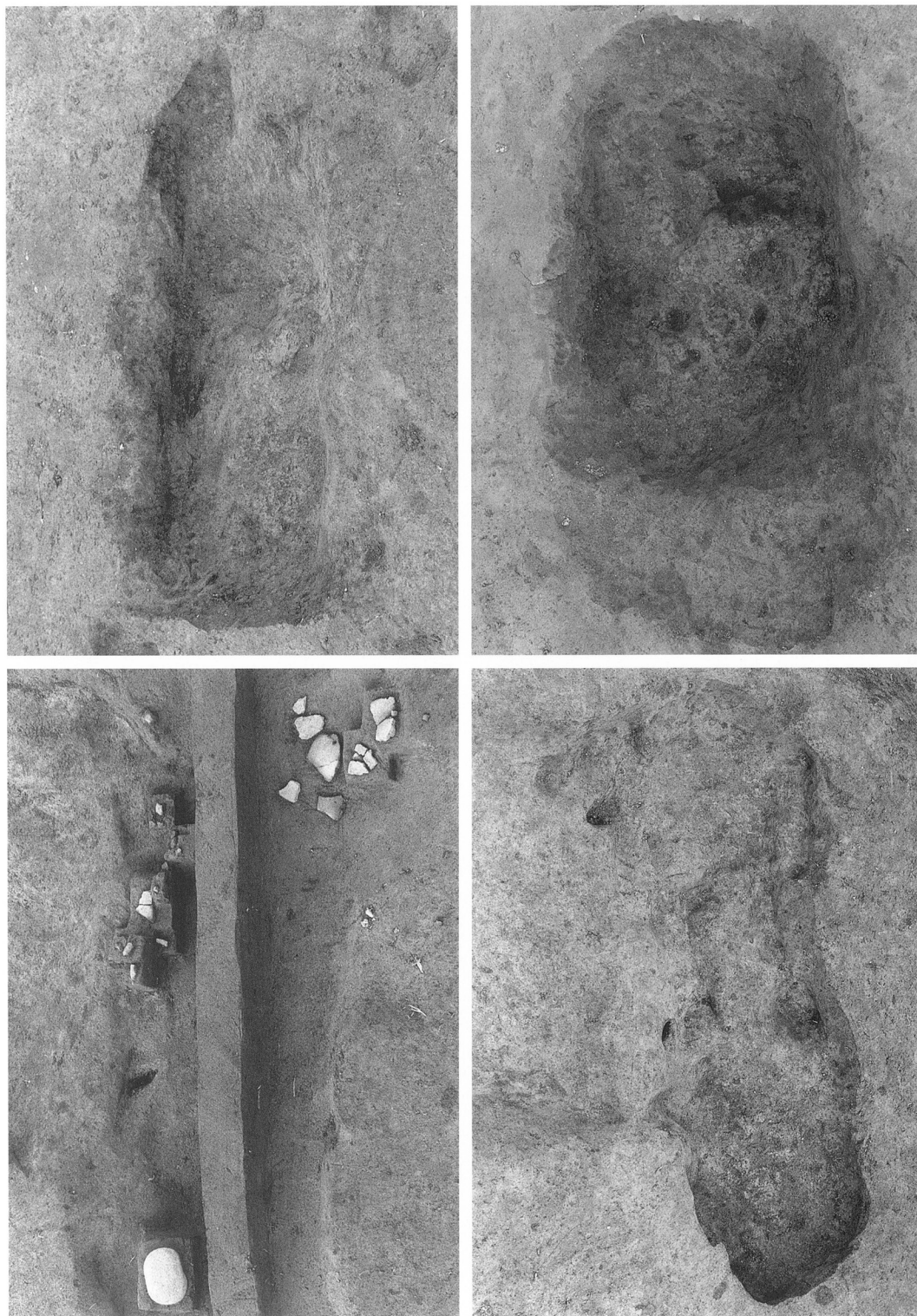
上：口ム堆積状態，下：礫出土状況



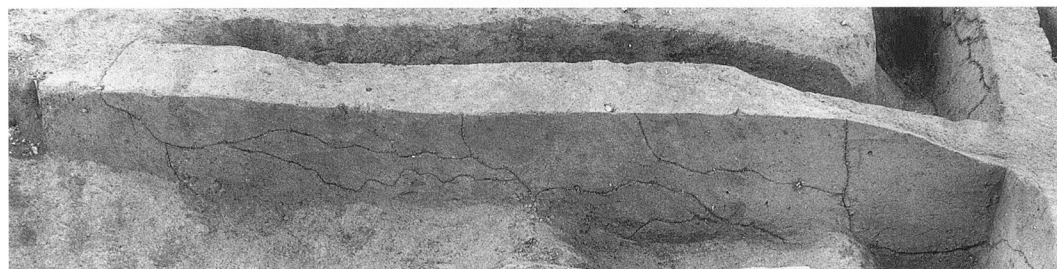
上：全景，左下：SF04，右下：SF05



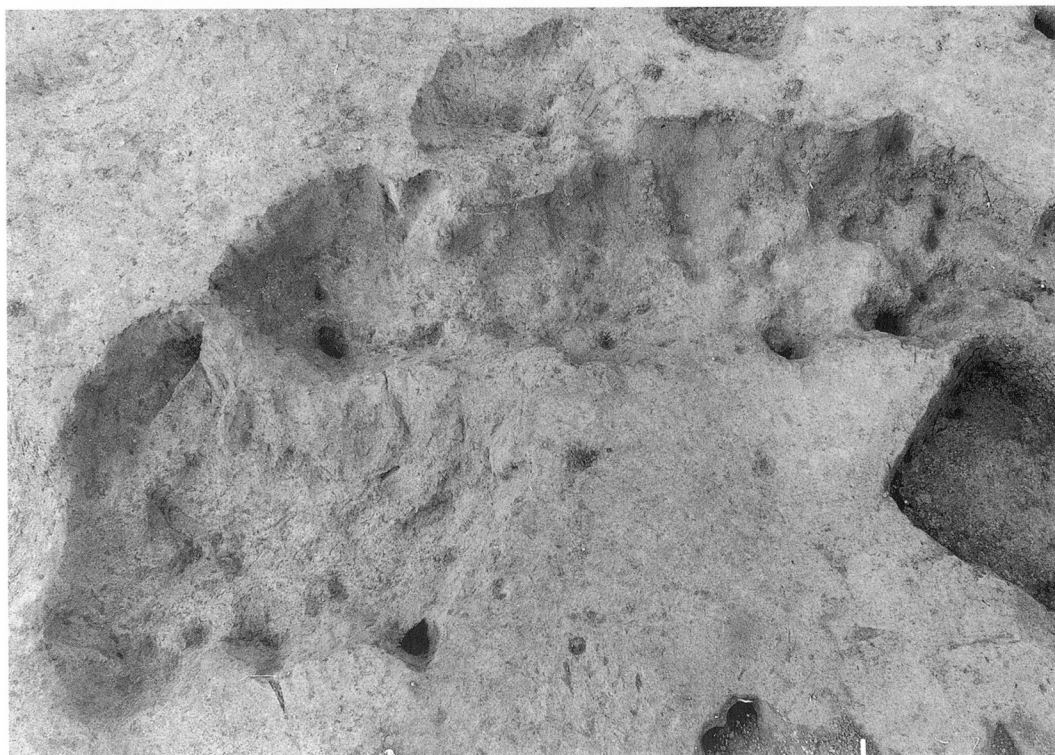
上：SF14，下：SF16



左上：SF17，右上：SF24，下：SF23



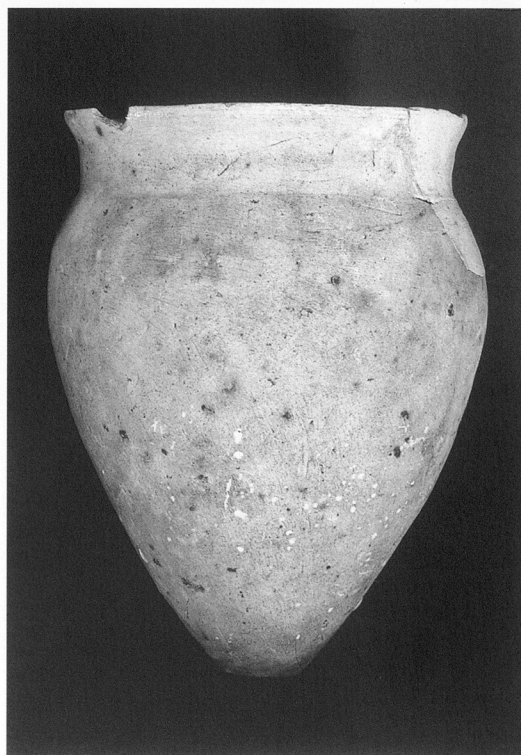
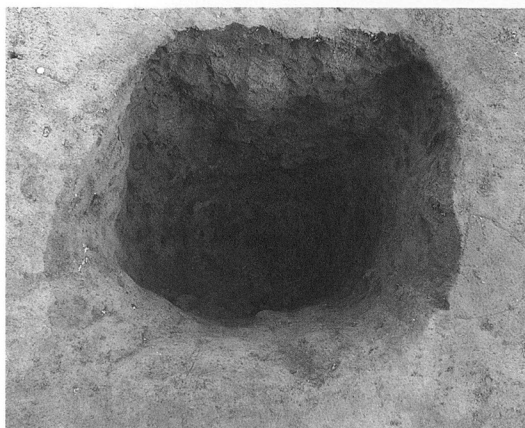
上：SF29，中：SF29土層断面，下：SF33



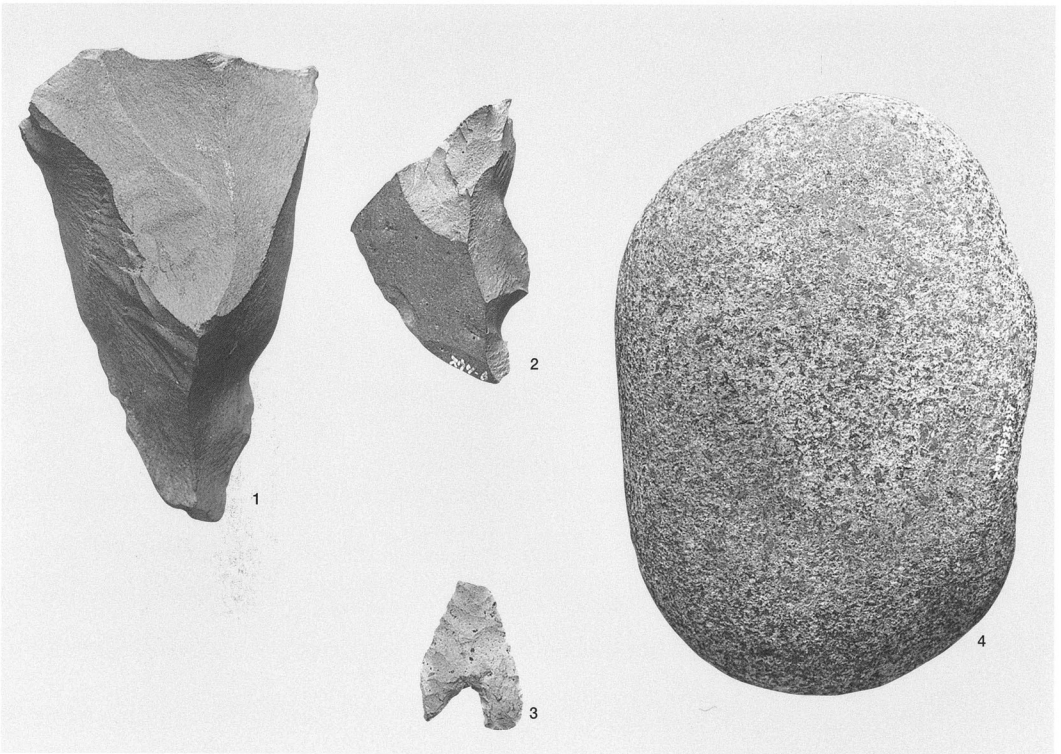
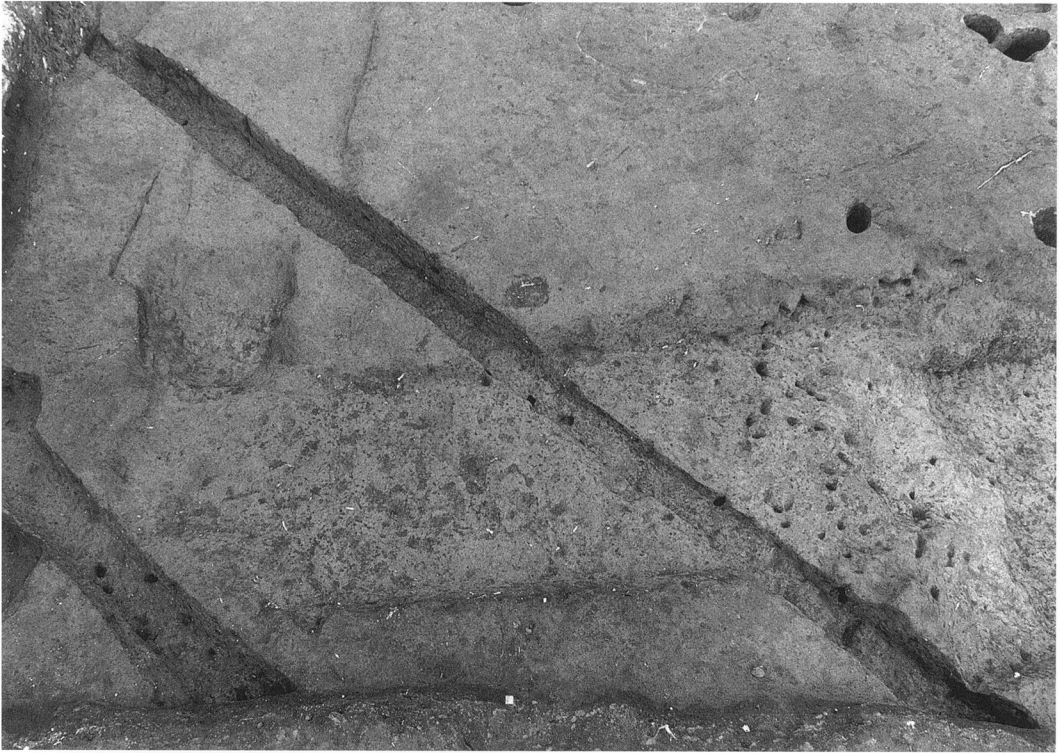
上：SF34，下：SF39



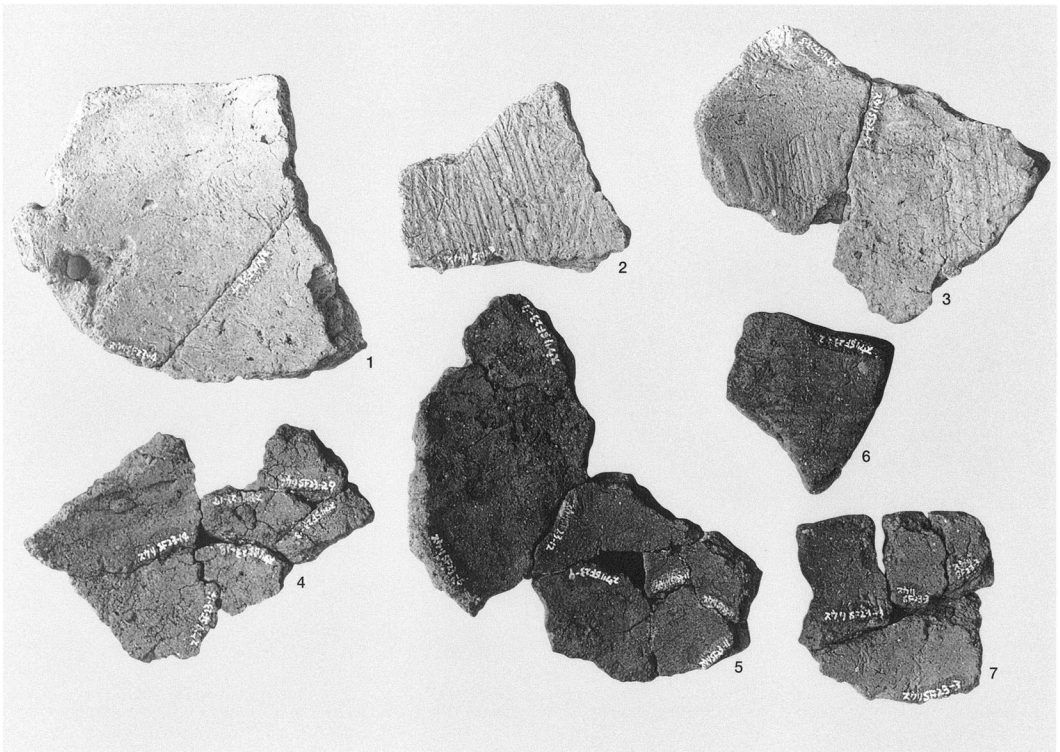
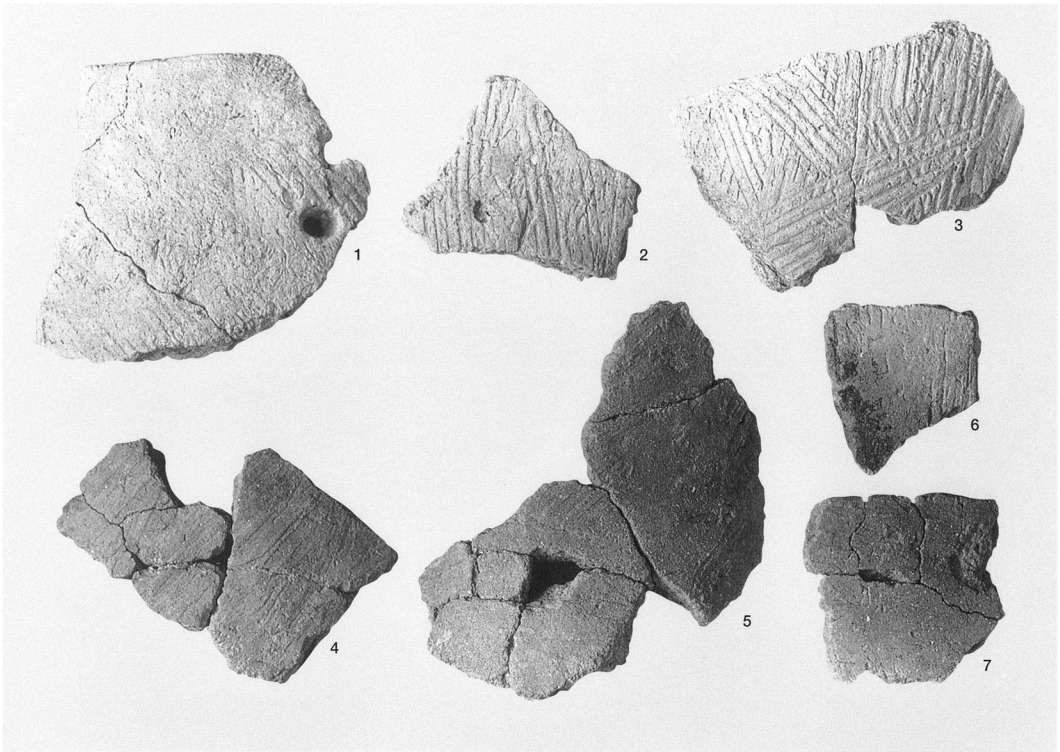
上：SF42, 下：SF50



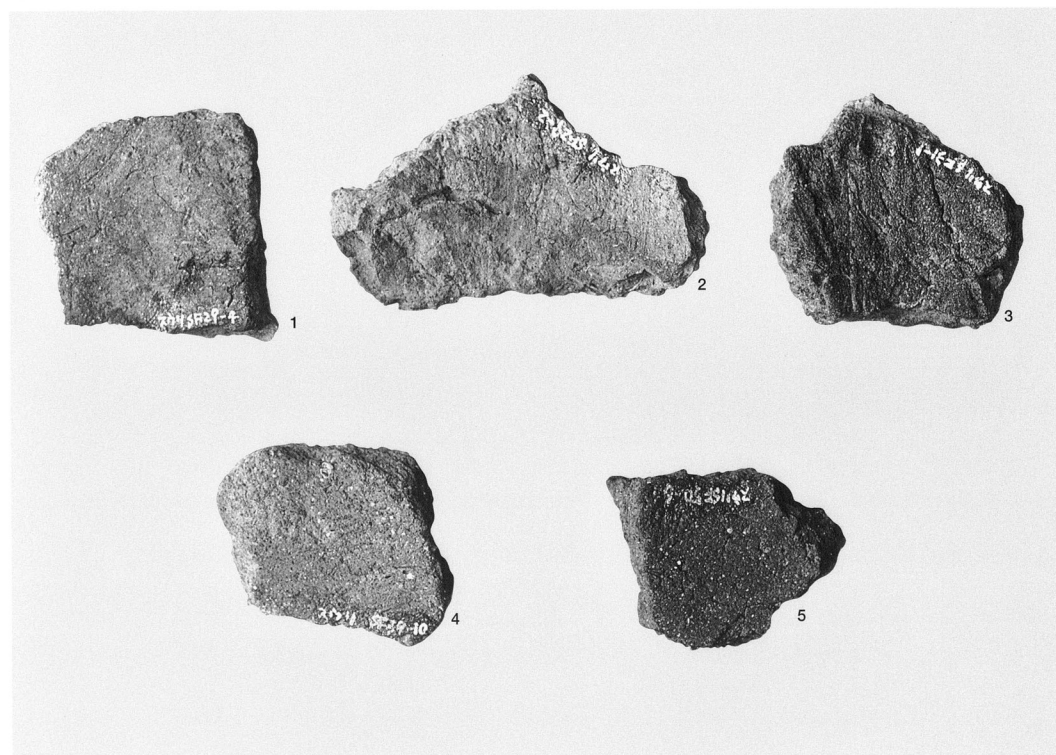
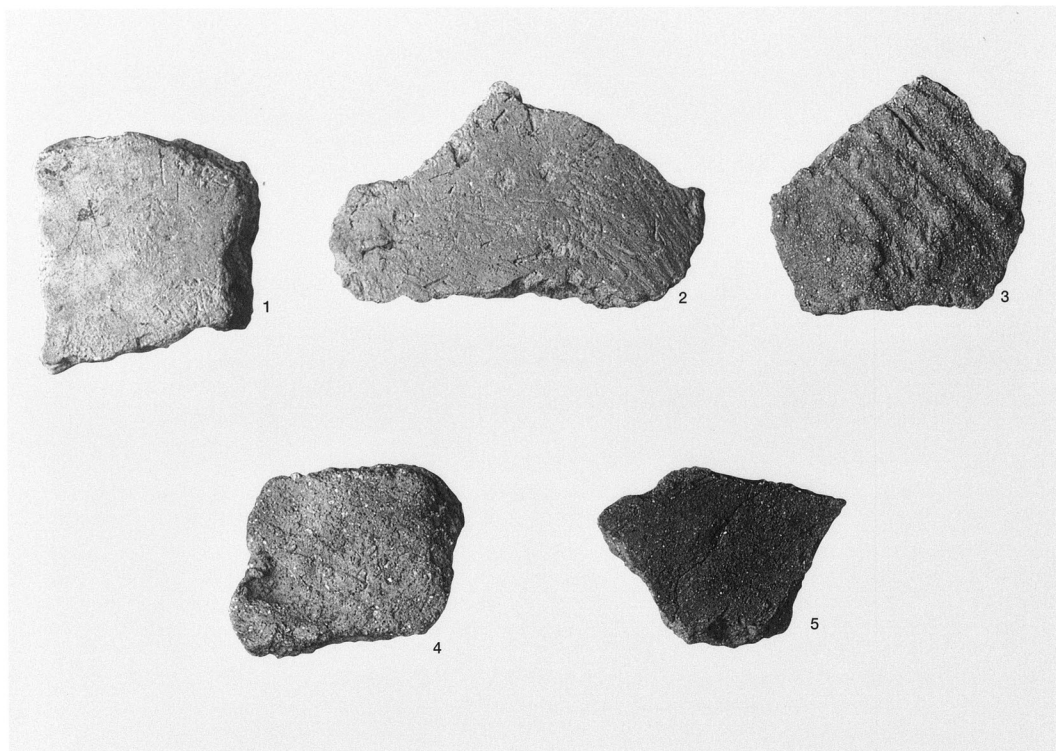
上：SK03遺物出土状況，左下：SK03，右下：SK03出土土師器壺



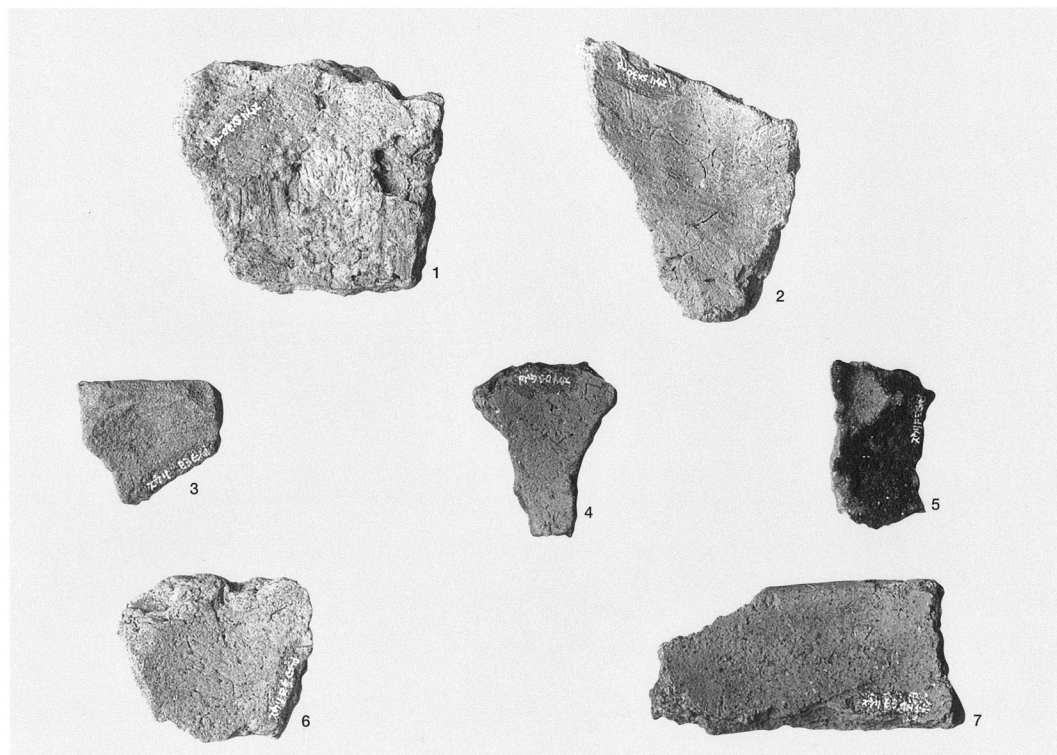
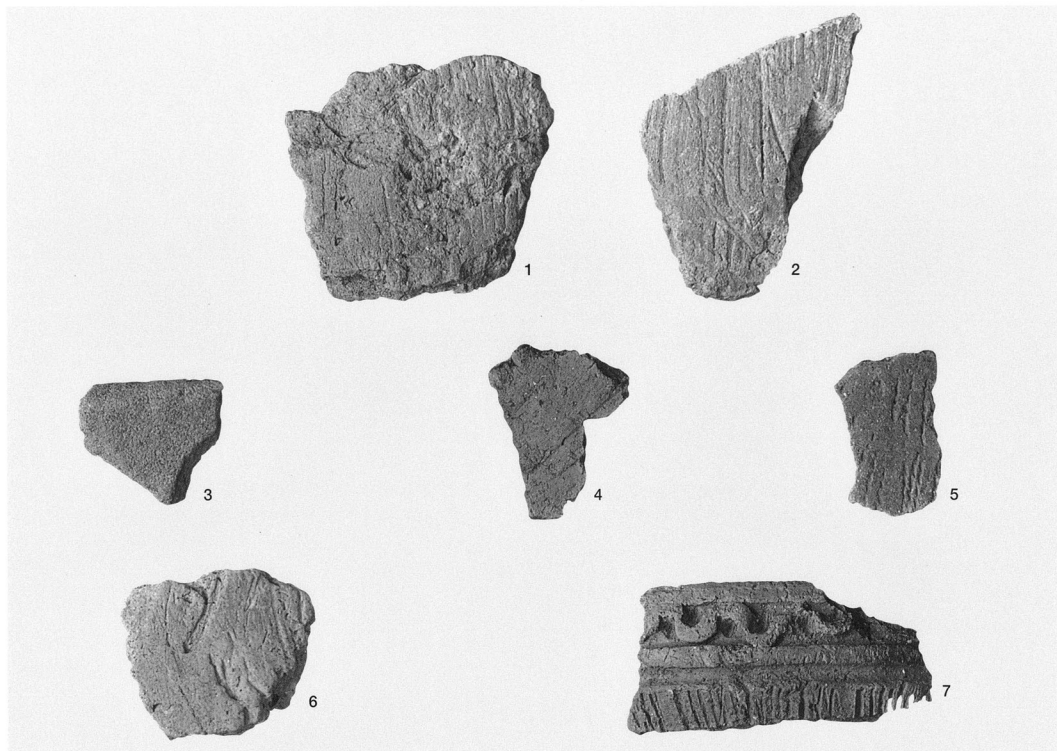
上：SD01・SD02，下：石器 先土器時代（1・2），遺構外（3），SF23（4）



土器(1) SF23



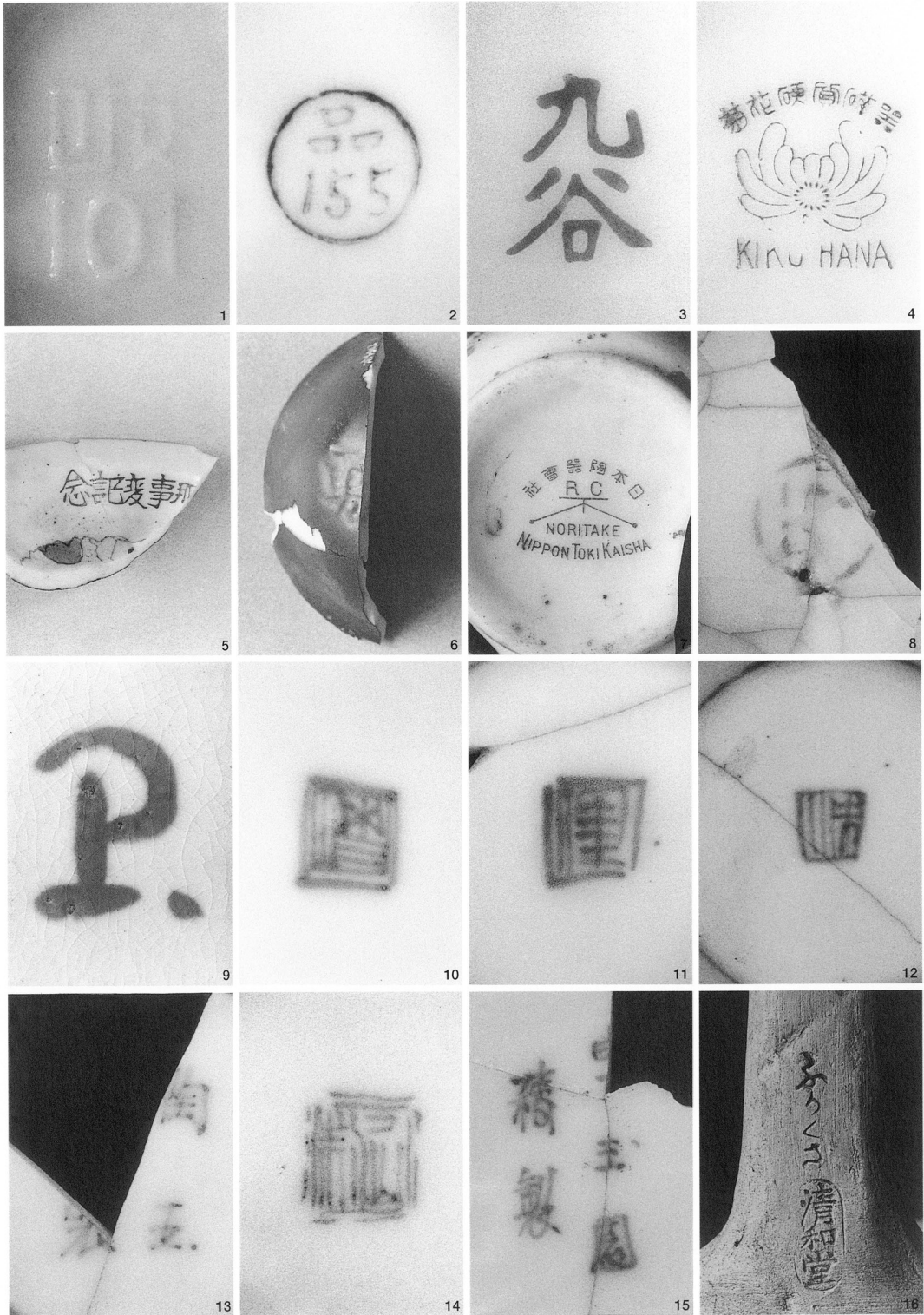
土器 (2) SF29 (1・2), SF31 (3), SF39 (4), SF50 (5)



土器 (3) SX30 (1・2), 遺構外 (3~7)



上段：SK12，中・下段：SK13



陶磁器の銘款SK12 (1~9), SK13 (10~16)

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこまぼこうないせき だいがくいんすうりがくけんきゅうかにかとうちてん ほくつちようさほうこく							
書名	東京大学駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	堀内秀樹 佐藤律子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学先端科学技術研究センター内 TEL.03-3481-4555							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査期間 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがく こまぼこうないせき 遺跡 (東大遺跡) だいがくいん 数理学 研究科 Ⅱ期棟地点	とうきょう 都 目黒区 駒場 3-8-1	13110	1	35° 39′ 18″	139° 41′ 26″	1996年 12月12日 ～ 1997年 2月6日	1160	東京大学 大学院 数理学 研究科 Ⅱ期棟 新営に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別 主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
東京大学 駒場構内遺 跡大学院数 理学研究科 Ⅱ期棟地点	生活関連 (炉穴群) 先土器時代 縄文時代 近世 近代・現代	礫群 炉穴 土坑 溝	1基 13基 10基 2基	土器 石器 陶磁器 ガラス製品 煙管				

